

ベル・クラネルがモテ過ぎるのは間違っているだろうか

ぽちよむきん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、冒険者ベル・クラネルがモテ過ぎるところなるかもしれない、という「お伽話」である。

※注意※

- ・ 原作の設定上、展開にかなり無理があります。
 - ・ キャラの言動も相当違和感あるかもしれません。
 - ・ 陵辱はありませんが、原作には無いカップリングが発生します。(というより、ベルが理不尽なまでにモテます)
 - ・ 更新不定期、アニメの展開をなぞる内容となります。
 - ・ 戦闘描写や、改変が無い部分はがつり端折ります。
- 以上を踏まえた上で、宜しければお読みください。

目次

1章 「冒険者（ベル・クラネル）」	
1話 「お仕置き」	1
2話 「憧憬一途・子宝雄兔」	16
3話 「嘲笑と願望」	30
2章 「怪物祭（モンスターファイリア）」	
1話 「お使い」	50
2話 「襲撃」	62
3章 「神様の刃（ヘステイア・ナイフ）」	
1話 「輝きを、其の手に」	78
4章 「弱者（サポーター）」	
1話 「必要になる物」	92
2話 「宿す者」	103
3話 「忍び寄る協力者」	130
4話 「痴情の纏れ」	148
5章 「魔導書（グリモア）」	
女神に追われ	165
魔法、発現	180
6章 「理由（リリルカ・アーデ）」	
交錯する疑心	194
始まりのとき	207
7章 「剣姫（アイズ・ヴァレンシユタイン）」	
和解	234

1章 「冒険者（ベル・クラネル）」

1話 「お仕置き」

*****オラリオ・冒険者ギルドくエントランスく*****

迷宮都市オラリオ――

広大なダンジョンが聳え立つこの都市では、地上に降り立った神々とその眷属からなる「ファミリア」の冒険者達が数多く暮らしている。

私は神様の恩恵を頂いてはおらず、この『冒険者ギルド』の案内役アドバイザーとして務めている。

そろそろ私が担当する冒険者が、そのダンジョン探索から帰ってくる頃だ。

彼はまだ駆け出しなので、探索できる範囲は限られている。それでもダンジョンでは何があるかわからないので毎日みっちりダンジョンについて、私の指導でお勉強をしている。

あの直向きさと純真さが私の母性やら姉性やらを刺激してしまい、どうにもスパルタ気味というか……過保護気味なくらい彼には慎重さを求めてしまう。

他の冒険者は音を上げてしまうけど、彼は雛鳥のように私の指導に応えてくれるのがまた嬉しい。

なので、彼が勉強の成果を見せたり探索から無事帰還出来た時はたっぷりご褒美をあげている。

溜まった事務仕事を処理するために書類の束を抱えながら、私こと【エイナ・チュール】は今日はどんなご褒美が良いか考えていた。

ウサギの様なふんわりとした白髪に、純朴そうな顔を目の色と同じように真っ赤にして慌てる彼を想像するとお腹の奥がじんわり温かくなってくる。

「エイナさあーん!!」

ダンジョン5階層で、金髪の綺麗な女性——アイズ・ヴァレンシユ
タインさんにミノタウロスから命を救ってもらった僕こと「ベル・ク
ラネル」は、彼女の事が知りたくてギルドに駆け込んだ。

しかし、ミノタウロスの血で全身を真っ赤に染めたままだった僕
は、エイナさんをカンカンに怒らせてしまった。

血糊を落とすのも兼ねて、僕はエイナさんからギルドの個室にてお
説教を受けることに。

何せ5階層への探索許可は貰っていなかったのに、好奇心で潜った
のだから完全に僕の自業自得だ。

その結果、何故か5階層にまで来ていたミノタウロスと遭遇して、
命の危機に晒されてしまった。

いつも僕の事を気にかけてくれて、ダンジョン探索のアドバイスを
くれるエイナさんに申し訳なく、僕は只々彼女のお説教に落ち込むこ
としか出来ない。

「いつも言ってるでしょ? 『冒険者は冒険しちや駄目』だって」

「はい……すいません……」

エイナさんは何も僕に腹を立てている訳じゃない。

ダンジョン探索には危険がつきもの。まだ駆け出しでしかない僕
が、いかに注意が足りないかを教えてくれている。

頼りない僕なんかを支えてくれる彼女を失望させてしまう事が、何
より僕には辛かった。

「ベル君……君は凄い幸運なんだよ? ダンジョンに潜り始めてまだ半
月のレベル1の冒険者が、ミノタウロスに襲われて生きて帰れたなん
て」

「……はい」

ブンブンと音が出そうな程怒っていたエイナさんの声が、諭すような優しい声音に変わった。

彼女が何より怒っているのは、僕が実力を過信した事でも、言いつけを守らなかつた事でも、ましてや血まみれのままエイナさんに恥をかかせた事でも無い。

エイナさんや色んな人に支えられてここに居る僕の命を、軽く扱ってしまっている事に怒っているんだ。

落ち込む僕を今度は励ますようにと、エイナさんの感情が声から伝わり、真っ直ぐ僕の心を包んでくる。

姉のようにお世話をしてくれる彼女が、本当に僕の事を案じてくれるのが伝わって、立ち直るばかりかどんどん声が小さくなってしまふ。

ああ、またやってしまった……。

暗い気分になって沈んでいると、エイナさんに鼻を軽く小突かれた。

びつくりして顔を上げると、そこにはいつもの優しいエイナさんの笑顔があつた。

「とにかく、無事でよかつた。今度からは気をつけるんだよ？あと、血まみれで街を突つ切るのはやめようね」

「……はいー」

やっぱりエイナさんには叶わないや。

やれやれと僕の失敗を許して、最後は笑顔で背中を押ししてくれる。感謝しても仕切れない。仕切れないんだけど……

「——それに、こつちもそろそろでしょ？我慢しないで出しちゃつて良いんだよ？」

「だ、駄目ですよっ。もう抜かないと」

「毎日いっぱい私の中に出してらんだから今更じゃない。観念して気持ちよくなりなさい！ほら、ほらっ」

「もう無理……ううっ!？」

「んっ、熱い……。今日も遅しいね、ベル君」

「うう……エイナさあん」

「安心して?もし出来ちゃっても、ベル君に迷惑はかけないから……」

この行為だけは、未だに慣れないよ……!!

何を隠そう僕とエイナさんは今、お説教の最中もずっといたしていた。

具体的に言うと……その、男女の営みというか……結婚した男女が愛を育む為の儀式と言うか……。

いわゆる、そういう事をしていた。

「私がちゃんと抜いてあげてるのに、いつも凄い出るのよね。満足させてあげれてないのかなあ?」

「そ、そんな事は……」

「ふーん、じゃあ私の身体……気持ちいい?」

「あうう……」

「うふふ、可愛いなあ。ベル君は」

さつきまでの真面目なお姉さん然とした雰囲気はどこかにぶん投げた様な彼女の笑顔は淫靡な妖しさを纏っていて、とても潔癖なエルフの血を半分引いている女性とは思えない。

ソファに座る僕の膝に正面から跨り、お互い下半身の服だけ脱いで僕とエイナさんは繋がっていた。

シャツの上からでも柔らかい大きな胸に僕の顔を包んで、髪を優しく撫でながらゆつたりと腰を動かすエイナさん。

仄かな石鹸の匂いと子供をあやすような彼女の中の暖かさに包まれて、耳元に息を吹きかけながら甘い声をかけられた僕は、白い欲望を我慢できず彼女の奥を何度も汚してしまう。

身体をお湯で洗っている最中から今に至って既に5回。僕の射精

をエイナさんの身体で受け止められている。

情けない気持ちになりながらも、エイナさんの中へ精子を吐き出し
続けていた……。

+++++

僕とエイナさんがこんな関係になったのは、半月前の事。

駆け出し冒険者で右も左も解らない僕。それを1番に支えてくれ
たのは彼女だ。

僕と神様の二人だけのファミリアで、装備も貧弱だった僕が真っ先
にダンジョンで帰らぬ存在とならないように、生き残るための知識を
授けてくれた。

ある日、僕がボロボロになってダンジョンから帰った日。

パーティも組まずにその日も僕は身の丈に合わない探索をしてし
まっていた。

僕はヘトヘトで、エイナさんのお説教中に寝てしまう。

その時エイナさんの見た光景が、

ズボン越しにとんでもないぐらい勃起した僕の男性器だった。

死の淵から帰ってきた僕が、種の保存を担う男性器が少しでも子孫
を残す機会を作ろうと、そんな知識も無い筈なのに^{全力勃起}にあんな事になった
理由だろう、と後ほどエイナさんから聞いた。

起こされてその話を聞いた僕は、恥ずかし過ぎて丸1日ホームから
出られなかった。

よりにもよって、女の人の目の前で……もし毎回ダンジョンから帰
る度にこれじゃあ、もうエイナさんのアドバイスを貰うどころじゃな
い……。

きつと彼女も、こんな盛ったモンスターみたいな僕を見限るだろ
う。

そうしてとことん落ち込んだ翌日。エイナさんから、

「その、ね？ベル君さえ良ければ……ああならないように、お世話して……あげよつか？」

「……………」

きっと担当を変えさせ貰うと宣告されるのかと思いきや、彼女が提案したのはそんな話だった。

そんな事出来ません！と顔が燃えそうになりながら断ろうとする
と、

「こんな事、君にしか言わないよ？それに私だって……初めて、なんだから。君が……ベル君が、良いの。私の初めてを……君の初体験に、して貰えないかな？」

僕と同じか、それ以上に顔を長い耳まで朱く染めた彼女は俯きながらそんな事を言っていた。

黒い手袋越しに僕の服を掴むエイナさんの手を見て――

『女子の頼みも聞けないような、情けない男子になぞなるな。ベルよ』

小さい頃に毎日聞いた祖父の声が、何故かよぎった。

そしてその日はダンジョンにも行かず、エイナさんの家で1日中絡み合ってしまった。

ホームにも帰らず、一糸纏わぬ姿で抱き合った状態で朝を迎えた僕が見たのは、エイナさんの暖かな笑顔だった。

ベッドのシーツは二人の汗で湿っていたり、僕の出した汚れでカピカピになっていたり、彼女の純潔を奪ってしまった証の紅い花びらが、昨夜の営みが夢ではないと告げている。

エイナさんが僕との行為を思い出したのか、真っ赤になる。

それを見て僕も恥ずかしくなり、顔が熱くなる。

しかし、朝のせいであれだけ彼女の身体で暴れまわった僕の愚息は、再び膨張してエイナさんの柔らかいお腹を圧迫していた。

「仕事に行く時間まで……しよつか？これじゃあ外に出れないし、ね」
子供の粗相を許す様な笑顔に、僕は弱々しい返事しかできなかった。

しかも結局エイナさんは、体調不良を理由に職に就いてから初めての欠勤。僕は連続しての外泊。

何度も絡み合い、気を失っては起きて愛し合うの繰り返し。

エイナさんの表情、普段は出さない声に匂いや感触、あ、味も含めて全部知ってしまった。

なんやかんやあって、ホームに帰ったのはエイナさんの家に4泊ほどした夕方だ。

帰ったときの神様、見たこと無いくらい怒ってたなあ……。

丸1日街で一緒に遊ぶことで許してくれたけど、もう二度とあんな心配はかけないようにしよう。

そうした事があって、その日から僕の日課にエイナさんとの「お勉強」が一つ増えた。

ダンジョンでの知識以外に、女性との愛し合い方。

そしてダンジョンでの探索する前後に、僕の動物じみた性欲を解消してもらおう。

はたから見れば、僕は彼女に寄生して身体を貪るだけの最低男だ。

それではダメだ。女性とは尊い存在で、守るべき存在なんだから。

僕はエイナさんの純潔を奪ってしまった責任を取る、と意気込んだが……

「何言ってるの？ベル君はまだ冒険者になったばかりで、夢を叶える最中じゃない。あれは私からお願いしたことなんだから、君はとに

かく立派な冒険者になれるよう余計な事は考えず頑張るの。だから……これからも応援、させて欲しいな」

そんなどこまでも都合の良い女性であり続けている。
いつまでも甘えてはもらえない。

だけど駆け出しのままじゃ、エイナさんのような素敵な女性には見合わないし、神様にも申し訳ない。

今は、彼女の優しさに支えて貰っている。

1日でも早く、速く、疾く立派な冒険者になるんだ――

+++++

「ん、ちゆるる……。よし、綺麗になったね」

「口でなんて、いつもすいません……」

「気にしないで。それにベル君のつて顔に似合わず凄いサイズだから、お掃除しがいがあるよ？ちゅっ」

エイナさんの中を汚し続けてドロドロになった僕のを、彼女が口で舐め清めてくれた。

根本から先端まで口を下品に窄めて吸い出す姿は、普段の真面目な彼女からは想像もできないが、そのギャップが余計僕を興奮させた。

綺麗にして貰っている最中にまた1回出してしまい、今は2回目のお掃除だ。

終わりを告げる合図に、先端の出すところへキスをしてにつこり笑うエイナさん。

あの桜色の唇を通して、僕が出した精液が今は胃の中に収まっている……。

しかもお風呂も入らず下着とパンツを履いたあの中……つまりエイナさんの子宮では、それ以上の子種が泳ぎ回っているんだなんて――
―って何を想像してるんだ僕の馬鹿!!

これじゃあ本当に発情したモンスターと一緒にじゃないかあ！
そ、そうだ。そもそもここに来た1番の目的は……

「それで……アイズさんの情報、なんですけど」

もじもじしながら話題を戻す僕。

するとエイナさんは、目を少し見開いて驚いたような顔をする。

「なあに？もしかしてベル君、助けてくれたヴァレンシユタイン氏の事……」

勘の良い彼女は何かに気づいたのか、にやっと口元が緩んでいる。
弟の企みに気づいた姉の図だが、僕の陰茎を頬に添え妖しげに微笑む表情はハーフエルフというよりも、淫魔であるサキュバスに近い危なげな魅力を感じる。そんな事言ったら、また家に帰れず朝まで絞られるだろうけど。

「いやあ、その……へへ」

「好きになっちゃったのね♪」

「はっはっはいいい……ひい!?!」

凶星を突かれて思わずはにかんでしまうが、エイナさんの顔を見て竦んでしまった。

それまで優しさを感じる笑顔だったのに、目が笑ってない……。怒ってる!?

そりやそうだよ、いつも下の世話こんな事をして貰ってるエイナさんに、『他に好きな女性ひとが出来た』って、どこまで最低なんだ僕は!?!
で、でも違うんだ。

あの金髪の綺麗な女性、アイズ・ヴァレンシユタインさんに抱いたのは、そんな本能から来る欲望じゃなくて……。
何にも染まらない、洗練されたあの強さ。

冒険者としての彼女の在り方に、憧れてしまったんだ。

僕がそんな事を考えているのを、エイナさんにも伝わったのか据わった目が再び綻ぶ。

一点表情を戻したエイナさんは「フム」と小首を傾げ、右手を顎に添えて思案顔だ。

理知的で素敵な筈なんだけど、空いた左手は僕のモノを上下に擦っているのでシユールだ。

つて、もう終わりじゃなかったのか。

手袋を取ったエイナさんのスベスベな細長い指で触られると、とても気持ちいい……じゃなくて！

あつという間に硬さを取り戻した肉の棒を、チュクチュクと水音を立てながら扱かれる。

僕が少し乱暴な扱いに悶えているのも気にせず、サラサラと彼女の脳内にある知識を読み上げていた。

【アイズ・ヴァレンシユタイン】

『ロキ・ファミリア』所属、現在のレベルは5。

剣の腕前はオラリオの1、2を争うとされ、神々から授かった称号は剣の姫——『剣姫』。

エイナさんが挙げていく情報は、オラリオにおいて最早常識の範囲で、流石の僕でも知っていた。

そうではなく、僕が知りたいのは趣味とか、好きな食べ物とか……って伝えたいのに、エイナさんの手の動きが激しすぎて、射精を我慢するので精一杯だ。

先走りエイナさんの唾液が彼女の手入れが行き届いた指先と僕の肉棒をヌラヌラとコーティングして、潤滑油を越えて泡立っている。

このままでは彼女の綺麗な相貌と栗色の髪、凜とした黒スーツを汚してしま……!!

歯を食いしばって我慢し、なんとか目だけで「そうじゃないんです」と伝えてみる。

すると手の動きがピタツと止まり、「わかってるよ♪」とウインクされる。

「知りたいのは、『特定の相手がいるのか』とか？」

「そ、そうです!!」

ズバリ、最も欲しい情報を言い当てたエイナさんに、思わず食い気味で迫ってしまう。

僕の愚息に血が集まっているにも関わらず、今の状況を忘れて彼女の返答に集中する。

「うーん……今までそういう話は聞いたこと無いなあ」

「本当ですか……？」

色んな意味で興奮している僕に構わず、冷静に自分の記憶を漁っているエイナさん。

今もなお固くなった陰茎を握りしめられてるのも頭から抜けて、頬がだらしなく緩む。

そうか……アイズさん、まだそういう男性ひとは居ないのか……!

もしかして、こんな僕でもまだ――

なんて身分不相応な希望は、新たな刺激とエイナさんのメガネのが怪しく反射した事で引き戻される。

「でも、現実的に考えて難しいと思うよ？」

「え……う？」

それって、やっぱり――

「あうう!?!」

「もうこんなにカチカチ。ベル君ってば私に弄られながら、ヴァレンシュタイン氏でエツチな事想像してたのかなあ?」

「ち、違いますう……それより、でっ出ちやいますよエイナさん!? 汚れちやいますー!」

「まだ仕事中ののに、駄目だよ? ベル君。我慢してね」

我慢させる気など毛頭ないスピードで手の動きを再開したエイナさん。

しかも今度は手袋嵌めたままの右手で、根本の袋をやんわり揉みほぐされる。

エイナさん、やっぱり怒ってる……!!

「ベル君。私ね、別に君の初恋を諦めろ、なんて言うつもりはないよ? だって私達の関係って恋人って訳でも無いし、私が一方的にベル君のお世話をしてるだけだもん」

「そ、そんな……僕も感謝してて……」

「それにね……もしこのままベル君との子供が出来ちやっても私はちゃんと産んであげるし、だからといって君に責任を取らせるような事はしないよ? 頑張ってる君の枷になんてなりたくないの」

「エイナさん……」

やっぱり僕は最低だ。

こんな素敵な人に支えられているのに、その気持ちを踏みにじる真似をして……。

謝ろう。

そして、それでも僕は彼女に憧れてしまったと素直に伝えて、ふしだらな関係をリセットした後、改めてエイナさんと仲直りを――

「でもね、ベル君……?」

「エイナさんっ僕、あぐああ!?!」

さあいざ謝罪を、と彼女の目を見つめようとした時。

僕の肛門に、エイナさんの人差し指が根本まで入ってきた。

とんでもない刺激によって、なんとか踏みとどまっていた僕の逸物が、いとも簡単に決壊した。

びゆるびゆるびゆる、とどこからこんなに出してるのかと呆れるような量をエイナさんに浴びせてしまう。

「うっわあ、すごい量だね。これは本当に近いうちに身籠っちゃいそう」

「ちよ、エイッナっさあん!?!おし、お尻っゆびいい!」

「あ、ごめんね。痛かったかな?ベル君はお尻、初めてだもんね」

「はぐうう!?!」

くいつと指を折り曲げて、いわゆる前立腺の部分を刺激されながら指をぬぽつと引き抜かれた。その際、追いつ打ちのように再び射精して、先程より濃度が薄めの精液がエイナさんの怖い笑顔を白濁塗れにしていく。

革手袋のザラザラした感触が、今度は陰茎を強く絞り上げて来る。握る手を先程まで扱っていた左手から、肛門を貫いていた右手に持ち替えたらしい。

そして素手である左手は、手のひらで亀頭を握り込むように包みこんだ。

恐怖を感じるくらい敏感になった部分が、エイナさんによって文字通り掌握されてしまった。

「我慢してって言ったのに。これは匂い取れるかなあ」

「す、すいまえ……」

「これぐらい我慢できずにびゅっびゅしちやうようなベル君に、ヴァレンシユタイン氏と恋人になるのは難しいんじゃないかなあ」

「へう……」

「……私、ベル君の恋ならもちろん応援するよ。なんなら彼女の情報

だって集めてあげる。でもね、ベル君
「は、はひ……」

まともに見えないくらい、眼鏡を汚しながらも気にした様子のない
エイナさんは、グリグリと先端を掌で圧迫しながらゆつくりと僕に語
りかける。

恐怖やら羞恥やら快感やらで定まらない思考をなんとか留めて、汚
れたレンズの奥にある彼女の瞳と目が合った。

ああ、やつぱり――

「君のお世話は、絶対に辞めないからね？」

「す、すいません……」

その瞳には、『絶対に逃がさない』という決意の炎が燃え上がって
いた。

この後エイナさんの柔らかい掌に亀頭を激しく擦られてしまい、腰
が勝手に跳ね上がりながら部屋のいたる部分に透明な汁を撒き散ら
して、僕は気を失った。

エイナさん曰く、あれが「男の潮吹き」であり、僕を懲らしめるた
めの秘策らしい。

どうやら同僚のミイシャさんから男を骨抜きにする手段として知
識だけは押さえていたみたいだ。

――エイナさんには、叶わないや……。

2話 「憧憬一途・子宝雄兎」

++++
++++
++++

エイナさんに色々絞られた僕は、身体の汚れも落とさきつてから改めてアイズさんと大きい隔たりがあることを認識した。

それはレベル1の駆け出しと、レベル5の第1級冒険者である格の差だけではない。

僕は既に神様の恩恵を受けた「ヘステイア・ファミリア」の一員、といつてもファミリアは僕唯一人。

それに対して、アイズさんは最有力の実力派ギルド「ロキ・ファミリア」の幹部を務めている女性だ。

そんな二人が男女の関係になるとするのは、ファミリア同士の衝突や疑心の原因になりやすく問題視される。

冷静に考えて、現実的じゃないのは僕もわかっていた。ただ、その……憧れるくらいなら、と淡い希望を持っただけなんだ。

しょんぼりしながら、ギルドのエントランスをエイナさんと二人で歩いていると励ますように声をかけられた。

「ほら、元気出して。今日稼いできた魔石、換金していらっしやい？」

「はい……」

せつかくエイナさんが元気づけようとしてくれているのに、感情が湧き出てこない。

換金窓口まで、小粒の魔石が少し入った袋の中身を渡す。

トレイに乗って還ってきたのは1200ヴァリス。1日の生活費で消えそうなこの稼ぎが、今の僕の実力だ。

聞いた話だと、有力ギルドが1日一人頭で稼ぐ金額は数万から、数十万ヴァリスだという。

まるで、住む世界が違う——僕に彼女を憧れる資格はないのか、と余計に心が冷たくなっていく。

「じゃあ僕、今日はこれで……」

もう空も朱くなっている。早くホームに帰って、ステータスを更新してもらったら今日は寝よう……。

そう思っ、出口に向かって歩き始める僕の背中に柔らかな声がかかった。

「ベル君」

振り返るとそこには——先程まで僕をからかうような雰囲気は抜けて、いつも僕の事を応援してくれる「頼れる案内役」のエイナさんが居た。

「あのね、女性はやっぱり強くて頼りがいのある男の人に魅力を感じるから……。めげずに頑張っていれば、ヴァレンシユタイン氏も強くなったベル君になら振り向いてくれるかもよ？」

そんな、いつ叶うかもわからない希望をにっこりと笑いながら示してくれた。

エイナさんにはこうして何度も背中を押してもらっている。

そして今回も、この女性ひとは頼りない僕に「強くなる」という道を指差してくれた。

そうさ——何も諦める必要はない。叶うかどうかじゃない、やるんだ——！

先程まで暗かった視界は晴れ上がり、思考が澄んでゆく。

駆け出したくなる衝動を抑えて、腰を曲げて頭を目一杯に下げ、心からの感謝を告げる。

「はいっありがとうございます、エイナさん！——大好き！」
「へえ!？」

なんかエイナさんが仰天してる気がしたけど、居ても立っても居られない僕は真っ先にホームへ向けて走り出した。

階段を跳ぶように降りて、少しでも早く、僕達のホームへ——

『ベル。——冒険者なら、ダンジョンに出会いを求めなくっちゃな』

立場は反対だったけど、死んだお爺ちゃんの言っていた通りだ。

——頑張らなくちゃ!

++++++
++++++
++++++

「ちよつと甘かった、かな?」

走り去っていく少年の背中を見送り、若干熱を感じる頬を触って呟いた。

まったく、あの少年は年上の女泣かせである。

可愛いくて弱々しい白兔のフリをして、いざ撫でてあげようと手を差し出せばペロリと捕食されてしまう。

私とその犠牲者1号であるのだから、たまったものではない。

背中を押してあげようと思っていたのに、あんなキラキラした顔で「大好き」なんて——

「次来た時はそここのところ教えてあげないと、ね」

お姉さんを困らせるなんて10年早いぞ、と。

少年の知らぬ間に新たなお仕置きが決定していた。

*****とある教会へ『ヘステイア・ファミリア』ホーム

「神様、今帰りました」

「ふううああああああ!!お帰り、ベル君!!」

少し街の中心から離れた位置にある無人の協会、そこに僕達のホームはある。

地下の部屋へ入ると、挨拶を中断する速度で僕を歓迎してくれたこの方が、僕の神様——【女神ヘステイア】様だ。

長い黒髪を、鈴付きのリボンで結ったツインテールを元気に振り回している。

体格に見合わない豊かな乳房と、背中や脚が大胆に露出した独特な白い衣装以外には、あどけない美少女にしか見えない。

今の僕にとってただ一人の「家族」だ。

歓喜の叫び声と同時に、僕のお腹へ思いつきりタツクルをしかける神様。

もう何度もしてきたやりとりなので、腹筋に力をこめて身構えていた。

神様は体格が頼りない僕よりも更に背丈が小さいので、胸元に抱きつく形になる神様が少し上気した顔で見上げている。

「今日は早かったんだね!」

「はい、実は今日ダンジョンで死にかけちゃって……」

「っ大丈夫なのかい!?痛くはないかい?もし君に死なれたらボクはショックだよお!」

大きさに感じるほど僕の全身を確認しながら、心配してくれる神様。

小さい女の子の様な見た目だけど、何の取り柄もない僕をファミリアに迎えてくれた恩神なんだ。

神様含めて、僕達が居るこの世界に刺激を求めて『神の力』を封印し、不便さと共に僕らと共に生きる道を神々は選んだ。

そしてその神の家族「眷属」となって恩恵を授かるのが、この『ファミリア』なんだ。

しがみついて来た神様をヒョイツと床に降ろして、膝を付き神様を下から見上げる姿勢になる。

例えヒトと同じ力しか無くても、神様っていうのは敬うもので尊い方々なんだ。

「大丈夫ですって神様。僕はヘステイア・ファミリア唯一のメンバーですよ？神様を路頭に迷わせるような事はしませんから」

僕が頼りないばかりに貧しい暮らしをさせているけど、神様は見捨てることなく毎日僕の帰りを待っていてくれるんだ。

大きな恩を残したまま、神様を置いて行ったりなんて出来る筈もない。

そんな僕の言葉に、安心してくれたのか満足そうに目を閉じて微笑む。

「いよおーし言ったなあ？なら、大船に乗ったつもりで居るから覚悟しといてくれよ？」

そしていつもの様に、僕を応援してくれる。

こうした色んな支えがあるから、頑張れるんだ。なんとしても応えなきゃ、という気持ちになる。

「そうだ！今日はキミに美味しいお土産があるんだよっ、じゃーん!!」

思い出したかのように神様が手で示す先には、テーブルの上に鎮座する山盛りの「じゃが丸くん」だ。

ここオラリオでは定番の屋台料理。お芋をベースとした、様々な味付けが特徴の揚げ物である。

「どうしたんですか？そのじゃが丸くん」

「ボク、最近オラリオの屋台でバイトを始めたろ？お客が増えたご褒美に貰ったんだ！」

僕がダンジョンに潜っている間、神様はアルバイトで生活費を稼いでくれているんだ。

本当はそんなことさせたくなかったけど、僕が一人前になるまでと割り切るしかない。

「夕飯はパーティと洒落込もうじゃないか……ベル君。今日はキミを寝かさないぜ！」

グツと親指を立てて、バチンとウィンクをする神様。

何か含みを感じるお誘いだけど、その容姿の影響でませた女の子が背伸びをしている印象を受ける。

これをエイナさんが言ったとしたら、その日は朝まで……

——って不味い不味い!!アソコがムズムズしてきた!

神様の前で股間を膨らませるなんて不敬、罰当たりなんてレベルじゃないぞ!?

「す、凄いですっ神様!」

「へへっうへへっうへへっ♪」

取り繕うために拍手をして、神様に賛辞を送る。
すると神様はくねくねしながら照れ笑いをしていた。どうやら僕の
の下品な妄想は勘付かれていないみたい、助かった……。

そうして二人でじゃが丸くんを頬張りながら、ファミリアの求心力
が足りないと落ち込む神様に、僕が立派になつてこのファミリアを大
きくして貧しい生活からも抜け出してみせると約束した。

神様は、目を潤ませて僕と出会えた事を喜んでくれていたけど、僕
の方が感謝しているんだ。

必ず神様に孝行しなくてはいけない……。

そして、待ちわびた「ステータス更新」——。

上着を脱いで、ソファにうつ伏せになる。

僕の腰に神様が跨り、指に針を刺した傷口から垂らした神血イコルが神秘
的な光を放つ。

そして古代文字ヒエログリフで刻まれた僕のステータスが浮かび上がり、新たに
書き換わる——。

僕は古代文字が読めないので、神様に紙へ写しを作ってもらわな
きゃいけない。

—— 良いかい？ ベル君。キミはダンジョンに夢を見過ぎだよ

あんな物騒な場所に、キミの求める出会いなんてあるもんか！

—— は、はあ……

—— そのアイズ・ヴァレンシユタインだつて、

そんなに強くて美しいなら他の男が放つとかないよっ

お気に入りの男の一人や二人、困っているに決まってる！

—— …… 神様なんだか怒ってません？

—— 怒ってない！

……っ!?

—— どうかしましたか？

—— あ、いやあなんでもないっ

……良いかい、ベル君。もつと周りを見るんだ
出会いはすぐ側に転がっているだろう？いや……
キミはもう、キミを優しく包み込んでくれる素晴らしい相手と出
会ってるっ

そうに違いないよ！

——そうでしょうか？

ステータスの更新中、そんなやり取りがあった。

「……ま、ロキのファミリアに入ってる時点でそのヴァレン なにかし 某 なにかし っ
女とは結婚出来っこないんだけどね？」

「あ、はは……」

神様は、どうやら僕がアイズさんに近づく事に反対らしい。
だがそれは当然だろう。ロキ・ファミリアなんて有力ファミリアと
トラブルがあつたら、真つ先に被害に遭うのは神様だ。
応援して貰えるとは思ってなかったので、ですよねえと苦笑いす
る。

「そんな女の事は忘れて、すぐ近くにある幸せを探すべきだよ♪」
「ひどいですよ、神様……」

ニコニコと僕の叶わぬ初恋を諦めるように促す神様。
でもすぐ近くの幸せかあ……——エイナさんかな？やっぱりきち
んと責任を取るべきだと僕も思う。

今の気持ちに整理を付けたら、彼女とも真面目に話し合いを——と
考えながら、神様からステータスの記された紙を受け取る。

……予想以上にステータスが伸びている。

やはり、自分の成長が数値で表されるのは非常に嬉しい。

「敏捷、結構上がりましたね」

「うん、ミノタウロスに追い掛けられたせいだろうね」

戦いや訓練によって得られる経験値エクセリアを得る方法は、何もモンスターを倒したりする事ばかりじゃない。

敵から攻撃を受けたり、逃げ回ったりする「負の経験」によっても能力は向上していく。

失敗も、積み重なれば実力に還元されていくのだ。

「魔力はまだ0ゼロかあ……僕、魔法使えるようになりますかね？」

「それはボクにもわからないなあ」

やはり冒険者なら、誰しも憧れる魔法スキル。その前兆とされる魔力アビリティの欄は未だ0。

つまり、まだ僕に魔法の才能は発現していない。

でもこれからの経験如何では可能性はあるから、諦めてはいけない。

すると、いつもは空白の「スキル」の項目に何かが書かれていた形跡が……。

もしかして、僕にもとうとうスキルが!?

「神様、このスキルの欄は？」

「ん？ちよつと手元が狂ったんだ。いつも通り空欄だよ？」

「ですよー」

わかってはいても、少し期待してしまった。

スキルの発現は才能以外に、何か特別な経験をした者に現れる。

今日の僕と言えば——ミノタウロスに殺されかけて、アイズさんと出会い、年上のお姉さんエナと情事に耽った。

——うん。スキルが発現する訳無いよね……。

ステータスはしっかり伸びてるけど、あの憧れの存在アイズ・ウアレンシュユタインに近づく良

い手段があればなあ……。

++++
++++
++++

「はあ、何か早く強くなる方法があれば良いんだけどなあ」

ボクのたった一人の眷属、ベル君が途方に暮れながら洗面所へ向かっていく。

——下界の子供達は本当に変わりやすいんだなあ。不変の神達^{ボク}とは全然違う。

【^{リアリス・フレイゼ}憧憬一途】

- ・早熟する
- ・想いが続く限り効果は持続し、想いの丈で効果は向上する。

「おめでとう、ベル君……ついにキミにもスキルが発動したんだね」

ベル君に聞こえないように小さく呟く。

このスキル、要はヴァレン某とやらへの想いで現れたスキルなんだろう。

ボクじゃない他人の手でこの子が変わってしまった事が悔しくて、ついスキルを隠してしまった。

でもそれより——

【^{スピルム・トリトウス}子宝雄兔】

- ・接触した雌性対象への魅了・発情を誘発
- ・望むなら、子孫を宿す事を阻まれない

——何なんだいこのスキルは!?!?

なんか「憧憬一途」のついでに出てきたようなスキルだけど、冷静

に読み解くととんでもない内容だ。

1行目は、まあわかる。

つまり、ベル君と接触した女、神もモンスターも含めて——と接触した際、その者を魅了する。しかもは、はつ……その、エツ……大胆な気持ちになるって訳だ。

美の女神とかがよく宿す呪いみたいな能力だけど、子供達でも「魔眼」や「魔貌」の類でスキルとして発動することはある。

おまけで相手を興奮させるような、理性を破壊する効果まであるんだからかなり凶悪な性能だ。

そして、問題はその次だ。

これはベル君が「子供を産んで欲しい」と望んだ瞬間、それは種や法則を覆しても相手は子供を身籠る。

恐らく、そういう営みさえ行ってしまうえば相手が男だろうと動物だろうと、なんなら神だろうとベル君の子供が産まれる……！

神によつては、命の冒流ともとれるこのスキル……。

他の神にはもちろん、子供達にも絶対知られちゃいけない！というか——

「ベル君……キミはやっぱり、他所に女を作ってるね……？」

本人は隠せているつもりかも知れないが、無名とはいえボクだってれつきとした神の石柱だ。

子供達の嘘や隠し事なんて通じない。

ベル君がボクの眷属になってくれて、およそ十数日後。

ダンジョンから帰ってこない事があった。

あの時ボクは、ベル君に何か遭ったのかと慌ててギルドに確認をしに行った。

しかし、ギルドの履歴にはベル君はどうやらダンジョンから無事に帰還していて、そこから再び探索に向かった訳では無さそうだった。

ボクがやきもきしながら、ホームで帰りを待つことにした。

そして、待つことゆうに4日後。

ベル君は、何か雰囲気——つまりはオンナを知ったような雰囲気を感じた。

それなのにボクに何の劣情も感じていないっぽいのは納得がいかないけど、あの子がどこぞの女といかがわしい暴挙に出ているのは明白だった。

さあ問いただしてやる!と思った矢先に、ホームに戻ったあの子は涙目になりながら「二度と神様に心配させません」なんて言い出して、真摯に反省していたんだ。

これ以上この子を責めたくないという気持ちが勝って、それ以来追求するタイミングを失ってしまった。

でもこの子は、探索から帰る度に女のニオイをさせて帰ってくる。

ベル君……ボクはキミをそんなエッチな子に育てた覚えは無いよ!

そして、このスキルにボクが対象外なのは——

——他所の女は抱いても、ボクは抱けないって言うんだね……!!!!

「~~~~~♪」

「むむむむむむむむ……」

鼻歌を奏でながら歯を磨いているベル君を、ボクはしかめっ面で睨むしか出来ないのだった。

++++
++++
++++

窓から差し込む朝の日差しを瞼に感じて、僕は目が覚めた。

ソファに毛布を被って夜を明かした僕のお腹に、僕以外の重みと暖かさに気付く。

毛布からはみ出ている素足と長い黒髪——神様で間違いないだろ

う。

こんな風に僕の布団へ潜ってくるのは初めてではない。きつと肌寒いのを凌ぐためだろうし、僕としても神様の存在をしっかりと感じて安心出来るので、拒んだりは……

「ひ、ひいつ!？」

「んむう……」

なんかいつもより位置が下だなあ、と思っていたら……。

朝だからなのか今日も固く膨張した僕の陰茎。

それを挟むように押し付けられた神様のお、おっぱい……。

こんな柔らかい物体が存在するのか、と分身越しに感じる余裕も無く。乳房の狭間から飛び出た先端は神様のご尊顔、つまりほつぺたに押し当てられている……!!

ぷにぷにすべすべで気持ち……じゃない!!

恩神で家族の神様に、なんて事してるんだ僕は!早く抜け出さない
と――

「んう……」

「ふぎいつ!？」

神様が身動きする僕に、心地いい体勢を求めているのか顔をグリグリ、お胸をムニムニと動かし始めた!!

あまりの気持ちよさに腰が砕けてしまう。これじゃあ身動きが取れない……!

というか、なんでパンツまで脱げているんだ僕は!?

あ……マズい……

「んん……まだ眠い……」

「も、むり……あうう!」

「あぶ、ふこいつ……?」

寝ている間も刺激されていたのか、あつという間に限界が来てしまった。

神様の顔や胸、髪の毛を白い液体でドロドロに汚してしまう。

ごめんなさい、神様……僕は罰当たりです……。

結局、神様を顔中真っ白にしてしまった辺りで暴発は収まり、神様の拘束から抜け出した。

そして濡れた布巾でなんとか汚れだけは落とされたけど、匂いまでは……。

神様が僕の体温が離れたので最初ぐずっていたけど、顔に付着した精液を舐めとって何故か微笑んでいるのを見ないようにするので必死だった。

畏れ多い畏れ多い畏れ多い畏れ多い……。

念仏のように頭の中で唱えながら神様の乱れた服装を直して、毛布をかけ直した。

「行ってきます、神様」

起こさないように挨拶をして、安らかに眠る神様を後に——僕はようやく今日の冒険に出発した。

3話 「嘲笑と願望」

ダンジョンに向けて、僕はオラリオの大通りを歩いていた。
まだ早朝ということもあって、人通りは少ない。

「たくさん並ぶお店もまだ仕入れや開店準備の最中で、生鮮市場ぐら
いが営業してる程度だ。」

「危ない危ない、神様寝惚けてたのかなあ……」

朝はひと騒動あって、ヒヤっとしてしまった。次から神様にはしつ
かりベッドで寝てもらわないとなあ……。

だが昨日の今日だ。今日は慎重に探索して、何事もなく――

――ふと、僕を見つめるじつとりとした視線を感じた

「っ!？」

咄嗟に後ろを振り返るが、視界に映るのはこちらを見向きもせず通
り過ぎる人々。

もう視線も感じなくなっていた。何だったんだろう、今の――

「……あのお、」

「？」

「!、あっ」

不意に正面から呼ばれているのに気付き、前に視線を戻した。すると、予想よりも距離が近かったせいでその人を驚かせてしまい、体勢を崩させてしまった。

このままでは転ばせてしまう――

「あ、危ない!」

「きやつ……」

「あ……えつと、」

なんとか肩を抱き寄せて、転ばせてしまうのは免れた。

しかし、よく見れば相手は女の子。エプロンドレスを着ているという事はお店の店員さんだろうか。

女の子の顔が上気した様に赤くなっていき、僕もカアッと顔面が燃えるような錯覚に陥った。

「ご、ごめんなさい!」

「いっいえ、こちらこそ……急に呼び止めてしまって……」

「あ、あの……その、手が……」

これじゃあ痴漢に間違われる――と身体を離そうとしたけど、対して彼女は僕の腰に手を回して胸元に体重を預けてきたので、更に距離が詰まってしまった。

重心が揺らいだため肩を抱いた手も離す機会を失い、まるで抱き合うような体勢になる。

鈍色の前髪が僕の鼻元をくすぐり、長い睫毛の奥にある髪と同じ色をした瞳がウルウルと揺らいでいた。

鼻腔を刺激する甘いパンのような香りに誘われて、淡いピンクでぶるんとした唇に――

って、何を朝っぱらから興奮しているんだ僕は!?

それに近い近い!? 顔が近い!!
危うく、名前も知らない女の子にキスをする所だった……。

なんとか理性を引き戻して、接吻寸前だった顔を彼女から離す。

「あつ……」と何故か残念そうな声と表情があつた気がするけど、興奮した僕が見せてる妄想に違いない。

どこに好き好んで、いきなり抱きつかれた男にキスされたがる女の子が居るっていうんだ。

というよりも、彼女は僕に用があつて声をかけたのでは無かつたか。

「えつと、すみません。何か?」

「……、あのつこれ……落としましたよ?」

僕がブンブンと頭を振って雑念を消して尋ねると、おずおずと例の女の子が手にある物を僕らの横側に差し出してきた。

というか、顔は離れたけど相変わらず身体が密着したままだ。

身体を後ろに引くと彼女もこちらに進んで、横に重心をずらそうとしてもぎゅつと腰を掴まれてしまう。

……離れてもらえない? な、何で?

困惑しながらも、彼女の掌に乗っていた物に別の疑問を抱いた。

「……魔石?」

紫紺の輝きを放つ小さな結晶は、モンスターを倒した際に落とす魔石である。

彼女が差し出すそれを手に取って確認するが、間違いない。

きつと僕がこれを落としたのだと、わざわざ教えてくれたのだろう。だとしても――

「昨日、全部換金したはずなんだけど……」

——そうだ。昨日エイナさんの元へ向かった際、僕は確かにその日稼いだ魔石を窓口で換金したんだ。

でも落としたって事は、コートのポケットに入れていたのを忘れていて、たった今落としちゃったのかな？

ミノタウロスから逃げるので精一杯だったし、咄嗟にそうしたのかもしれない。

「すみません、ありがとうございます！」

「……冒険者の方ですよ？こんな早くからダンジョンへ行かれるんですか？」

受け取った魔石をしつかり魔石用の袋にしまっていると、彼女に質問をされた。

確かに、こんな早朝から探索に向かうのは珍しいのかもしれない。

でも僕は駆け出したから、少しでも探索の時間を確保するために早い時間に出発しているんだ。

探索は夜になればなるほど危険が伴う。単独ソロの僕は夕暮れまでには引き上げないといけない。

エイナさんから貰ったアドバイスに従って、少しでも帰還できる確率を上げるための手段だ。

……というか、身体を密着させたまま話題を振られてしまった。

鳩尾辺りに感じる柔らかい触感に、心臓の音がドンドンうるさくなっていく。

もしかして、会話が終わるまでこのままなのだろうか？そろそろ僕の節操なしな股間が反応してしまう……！

「ええ、まあ——あ」

「——」

すると、股間よりも先に腹の虫がぐるぐると悲鳴を上げていた。
そういえば朝食を抜いてきたんだった。

気不味い状況に僕は苦笑いするが、何か思いついたように彼女は
「待っていて下さいねっ」と後ろのお店らしき建物に消えていった。

——やっと離れてもらえた……ぎ、ギリギリだった……。

程なくして、僕の手に乗せられたのは可愛らしい布巾で結ばれた正
方形の包み——つまりお弁当だった。

まだ理解が追いついていない僕に、彼女は花のような笑顔を咲かせ
ていた。

「大したものじゃありませんが♪」

「そんなっ悪いですよ！初対面の人にお弁当なんて。それにこれ、あ
なたの朝ごはんじゃ……」

「気にしないでください。私の方は、お店が始まったら賄いが出ます
から」

「で、でも……」

そう言う彼女が振り返る先にあるのは、お弁当を取りに行ったお店
——彼女の働き先になるのだろう建物の中はまだ薄暗く、彼女と同じ
エプロンドレスを着た^{デミ・ヒューマン}亜人の女性が忙しく動いていた。
きつと夜に開店する食事処といったお店なのだろう。

店内に見える酒樽や、メニューの看板を見て僕は何となく察した。
日が暮れば、オラリオの冒険者で賑わうのであろう事が用意に想
像できる。

「その代わり、今晚の夕食は是非当店で！約束ですよお？」

そう言って、人差し指を立ててこちらを上目遣いに覗き込む女店員
さん。

成る程。つまりこの子はお店の集客を狙っていたのか。僕なんて

大した客にならないだろうに、けっこう食えない子だなあ、と思っ
ていると――

「――だめ、ですか？」

立ててた指は艶やかな唇に添えて、悩ましく眉尻を下げてお願いさ
れてしまった。

清楚な見た目なのになんてあざとい娘なんだ……でも可愛い……
と、断る気が失せてしまった僕。

こういうのを商売上手って言うんだなあ。

「わ、わかりました……」

「うふふ、ありがとうございます♪――んっ」

「へ？んむう!？」

それは不意に彼女から行われた。

僕は女店員さんの策に嵌ったと苦笑いしてて完全に油断していた。
至近距離でホクホクな笑顔を見せていた彼女さんの目が一瞬キラ
リと光ったと思うと、その顔が視界いっぱい広がった。というより
も、再び顔が密着した。

しかも、先程には無かった唇に感じる感触。

プルプルとした柔らかい物体に口元を包み込まれて、ヌルつとした
細長い何かが僕の唇をなぞる様に動いた時点でようやく「あ、キスさ
れてる」と思考が追いついた。

「っ――!?!、!!っ?!?!?」

「♪」

くぐもった声を喉から出して、「どうして」と抵抗を試みるも女店員
さんはうっとり目を閉じ、両手は僕の頭を押さえているので逃げら
れない。

口内へ侵入した舌が艶めかしく歯茎をなぞり、生温くも甘さを感じる液体が流れ込んでくるのを無意識に嚙下し、代わりに驚きで溢れる唾をコクコクと味わうように飲み干されていくのを感じた。

——これ、食べられてる!?

ようやく濃厚な口吸いから開放されて、ぷはっとお互い酸欠気味の状態から息を大きく吐き出す。

僕らの口を繋ぐ白い糸がタラリと垂れて、ペロリと唇を舐める彼女の舌の動きに目を奪われてしまう。

呪いにかかったように固まった僕へ、彼女は再び太陽のように微笑む。

「私、今のが初めてなんですよ♪」

「文字通り、唾を付けちゃいました。冒険者さん——予約、しましたからね?」

何を、と言い返す余裕は無かった。

えへへっとはにかんだ彼女はその後お店の奥へ消えて、戻ってこなかった。

僕が探索に向かうために再起動したのは、そこから三〇分ほど後の話である。

*****ダンジョン上層*****

その後、ダンジョンの上層でいつも通り探索を行っていた。

慎重に確実に、僕でも対処が可能なモンスターとのみ戦闘を行い、

僅かな魔石を回収していく。

——こんな事で、いつになったらアイズさんに追いつけるんだろう。

「積み重ねが大事」ってエイナさんは言うけど……。

途中、大量に出現したモンスターに遭遇する。

いつもなら、無難に撤退する量だ……でも——

『お願い、ベル。戦って♥』

妄想の中のアイズさん（とても可愛い）が小首を傾げて、僕に助けを求めている……！

ここで立ち向かわなきゃ、男じゃない！

「や、やってやりますううううううううう!!」

日が暮れるまで僕は探索——、もといアイズさん（幻）を救うためモンスターを倒し続けた。

*****とある協会へ『ヘステイア・ファミリア』ホーム

「——ええええええええええええええええ?!?!」

探索から帰還し、今日のステータス更新を神様にして貰ったのだが……その内容に僕は思わず叫び声をあげてしまった。

「神様っこれ間違っていないか?! 熟練度の上昇、トータル160

オーバーなんて……ほら、一回しか攻撃を貰ってないのに、耐久値が30近くも伸びてますし——」

だがこれはとんでもない事だ。

いつもならステータスの熟練度というものは、通常1回の探索を終えた程度であるならばいずれも1桁程度しか伸びず、2桁なんて上昇した暁には大喜びだ。

よっぽどの事がない限り、ここまでステータスが伸びるなんてあり得ない。

つい目の前の事実が信じられず、僕は神様へまくし立ててしまう。

「力も、器用さだって……初めてですよ、こんなもの！」

「……ふんっ」

「……か、神様？」

「……」

だが神様は、ステータスを僕に見せてからはこちらを振り向こうともせず、ベッドから立ち上がってしまった。

返事が欲しくて、その物言わぬ背中に手を伸ばしてしまう。

そしてゆっくりとこちらに振り向いた神様は、ぶすつと不機嫌顔だ。

何か怒らせてしまったのだろうか？だがこの結果の理由が知りたくて、愛想笑いを浮かべながら再び尋ねる。

「えっと、その……だから……」

「……」

「何で僕……こないきなり成長したのかなあ、なんて」

「——知るもんかっ」

「……神様？」

どうしてか怒っている様子の神様。

そして、そんないつもの日常とは違う事が今日は起こる。

今朝、店の前を通りかかった白髪が目立つ冒険者さん。

落とし物を渡すだけの筈だったのに、彼に抱きかかえられた瞬間に身体が燃え上がるように熱くなって……。

ああ、この人を逃しちや駄目と何かに突き動かされた。

結果、お近づきの印にお弁当と情熱的なファーストキスを捧げてしまった。

普段じゃ誰かにしようなんて思わない大胆な行動をとったけど、自分でも不思議なくらい嫌悪感はない。

むしろ彼との時間がもつと欲しい、と喉の奥が乾いてしまう感覚だった。

彼も彼で満更じゃなかったみたいだし……抱きついた時に、お腹に当たるムクムクと膨らむナニかには気づいていたので、彼とそういったご関係になるのは難しい話じゃないかもしれない。

——これじゃ娼館の娘じゃない。でも、嫌じゃないかな♪

驚くほどの心境の変化を感じていると——お店の入り口から様子を伺う、見覚えのあるウサギの様な白髪と、つぶらな赤い瞳。

私は今しがたとった注文をルノアに押し付けて、彼の元に駆け寄った。

「冒険者さん、来てくれたんですね！」

「……、はい」

自分でも意外なほど嬉しそうな声が出てしまった。

しかし彼の表情は、どこか無理をしたような笑顔だった。

もしかして、今朝キスをした事でいやらしい娘って思われてるのかしら……。

ち、違います！貴方だけなんですから……とは言えないので、せめ

て清楚に振る舞うことで印象回復を狙う。

「自己紹介がまだでしたね。私、「シル・フローヴァ」です」

私が待ち焦がれていた、冒険者さんの名前はベル・クラネルさん。ベルさんって呼ばせてもらうことに。

彼をカウンター席に案内し、大盛りの食事をミア母さんに用意してもらった。

ミア母さんはこのお店の店長で、頼りになる素敵な人です。ベルさんの事はお昼に話していて、ぜひ鼻肩にしてあげて欲しいとお願いしていた。

出来ればずっと一緒に過ごしたかったけど、ルノアに仕事を押し付けたことをリユーに咎められてしまい一旦ミア母さんに相手をしてもらう。

ベルさんもなんだか少し暗かったし、ミア母さんから励ましてもらえれば元気が出るよね？

私はリユーの目を盗んで、注文の溜まった伝票をアーニヤに渡してしまおうとベルさんに近づいた。

何やらウチの迫力ある食事に驚いてるみたい。

見ると本日のオススメまで——たぶんミア母さんが冒険者と知って本日の稼ぎを吐き出してもらおうって算段なのね。

男の子だし、きつとエールも含めてなんだろうけど……値段を見てあんぐりと口を開けている。

もしかしたらお財布が厳しいのかもしれない。悪いことしちゃったかな？

「どうです、楽しまれていますか？」

「……圧倒されています」

「ふふ、ごめんなさい♪私の今夜のお給金も期待できそうですっ」

「……よかったでふね」

何かを諦めたように苦笑いするベルさん。観念してカリカリに揚がったお魚を頬張っている。

——楽しいなあ。

ベルさんの声や表情が変わるだけで私の心も大きく揺れる。

彼とこうして話すだけで胸がときめいて、つい抱きしめてほしくなっちゃう。

流石にお店で朝みたいな事はしないけど……でも、二人きりになれたなら——

私は彼のコートに、用意していたものをチャリ、と落とす。

「?えつと……これ」

「ウチって、2階は宿みたいになってまして……従業員の大半はそこに泊まっているんです」

「は、はあ……」

「その鍵の番号、私の部屋なんですよ?」

「なるほど……へえ!」

メニューの値段を見たときの倍以上に目を見開く冒険者さん。

私の言いたいことがわかったのか、顔が真っ赤でとても可愛い。

「お腹いっぱいになったら……そのお部屋で一休みして下さいね」

「いや!?あの、それってでもあの僕は……」

「私も仕事からあがったら戻りますので、その時は——」

他の人に聞こえないよう、ベルさんの耳元で囁く。

「——私の残り全部、ベルさんにあげちゃいますね♪」

「っ、っ」

最後に耳へ軽く息を吹きかけながら顔を戻した。

あんまりやると周りに勘ぐられてしまう。
リングみたいに赤くなつたベルさんは、口をパクパクしたままポケットの中の鍵を握りしめている。
——ちよつと大胆だったかな？

「ニャアー……ご予約のお客様、ご来店にやつ」

すると、キャット・ピール猫 人のアーニャが、踊るように店内へ団体のお客様を招いていた。

確か、今日は「ロキ・ファミリア」のメンバーが予約をしていたのだった。

なんでも、ダンジョンへの大規模遠征から帰還した打ち上げという話だ。

主神である神【ロキ】と、幹部メンバーを中心としたファミリアの主要人物達が一同に揃って、席へ着き始めた。

「――、」

「あれ？ベルさん、ベルさーん？」

何故かベルさんが更に顔を赤くして、今度はプルプルと震えだした。

目の前で手を振ってみるけど反応がない。

もしかして——今夜のことを想像してるのかしら。

もう、エッチですねっベルさん。まだ夜まではお預けですよ？

と思っていたけど、どうやらロキ・ファミリアの方々に見入っていたみたい。

彼等がウチのお得意様だと教えてると、嬉しそうな顔になった。何でだろう？

ベルさんがそろそろご飯も食べ終わりそうになった頃、ロキ・ファミリアの方から大きな声が聞こえる。

なんでも、ダンジョンで危ない目に遭った「トマト野郎」さんがモンスターから逃げていったというお話みたい。

特に珍しい話でもなく、ダンジョン帰りの冒険者の方が笑いながら話す内容としてはありふれた内容だ。

気持ちのいい話題では無いけど、見たこともない人の話だし私は特に思う事は無かった。

そして、話を盛り上げていた酔いが回っていきそうな狼^{ウエアウルフ}人の男性が、男の魅力は強さであると乱暴な口調でお仲間の女性に語っている。

——そんなこと無いと思うんだけどなあ。

私は、素敵な男性にはもつと別の魅力があると思います。ね？ベルさん……

「——っっ!!」

「あ、ベルさん!!」

急にベルさんが席を立ち、お勘定も払わずお店を出て行ってしまった。

慌てて追いかけるけど、物凄く足が早くてあつという間に見えなくなってしまう。

一体何があったのだろうか。無銭飲食を平気でするような人じゃないのは、勘だけど確信がある。

——もしかしたら、先程の話を聞いて何か思うことがあったのだろうか。

一瞬見えたベルさんの表情は、酷く傷ついた顔をしていた。

あんな純朴そうな人に、何かショックを受けるような言葉があったのかもしれない。

ベルさんが心配だけど、私は怪訝そうな顔をしていたミア母さんに彼を責めないで欲しいと弁明した。

「アンタが言うなら、あの子から来るのを待ってやるさ」と許してもらえた。

ミア母さんはベルさんの人柄を最初から見抜いてたのかもしれない。

他の娘達も、最初は疑っていたけど一生懸命説明したおかげで理解してもらえた。

リユーに至っては「シル、彼との仲。応援します」なんて言ってきた。

ほんとにあの娘は何を言ってるんだ。恥ずかしくて否定も出来なかったじゃない！

因みに、原因と思われる狼人の男性は綺麗なエルフのリヴェリアさんにお灸を据えられていた。

「彼も酔いが回ってあんな事を言った。悪く思わないでくれ」とパルツム小人族のフィンさんも言っていたし、私からあの人に何かする事は無いだろう。

問題は、ベルさんだ。

あの様子じゃ、もしかしたらこのお店が嫌いになってしまったかもしれない。

あんな素敵な人に出会えたのに……。

今夜、あつたかもしれない逢瀬を想うと、とても悲しい気持ちになる。

でもあの人のポケットには、私の部屋の合鍵がある筈だ。

——これつきりじゃ、無いですよね？ベルさん……。

またあの男の子が、明日もこの店を訪れる事を願うのだった。

そして、機会があれば——

*****とある教会へ『ヘステイア・ファミリア』ホーム

「ベル君、一体どこへ行ってしまったんだ……？」

昨晚ベル君の急成長ぶりを見て祝うべきところが、それだけヴァレン某への想いが強いという事が悔しくて、適当な事を言っ出ていってしまった。

ボクというものがありながら浮気なんて許せない、と罪もないベル君へ八つ当たりしてしまふなんて神として情けない。

ベル君が帰ったら、しつかり仲直りしようと思っていた。なのに――

「二晩中、帰ってこないなんて……」

昨晚、そろそろベル君も帰って寝てるだろう時間にホームへ戻るとそこは無人だった。

例の朝に出会った少女が働くお店とやらだつてとつくに閉まっているだろうし、場所もわからない。

探すあても無く、ただただ教会の前でベル君の帰りを待っていた。気づけば空がもう白んでいる。夜が明けてしまったようだ……。

恩恵を授けたベル君との繋がりは感じている。だから死んではない。

これで帰ってこないって事は、ボクに愛想を尽かして出ていってしまったのかい……？

他所の子になろうとしているのかい？

そして、今頃他所の女と幸せになろうとして――

「まさか、このまま……っ!？」

朝日が差し込む寂れた通りの奥に、人一人分の気配を感じて振り返った。

そこには、頼りない足取りで歩く少年の姿、まさしくベル君だ。

「ベル君、——!?!」

ベル君は、ちゃんとボクの元へ帰ってきてくれた。

だが、その姿はあまりにも痛々しいものだった。

いつも着ているコートは裾がボロボロ。あちこちに泥を付けて、顔は額から血を流して半分が赤黒く汚れていた。

片目は目蓋が腫れ上がっていて開かないのだろう。もう片方の目でボクを見つけると、弱々しく微笑んでいる。

急いで駆け寄ると、限界だったのか膝を地に付けてしまう。

支えてあげるが地面にぼたぼたと落ちる血を見て、早くホームで手当をしなければと不安になる。

息も微かに感じるだけで、もしかして危ない状態なんじゃ——とベル君に呼びかけた。

「ベル君!?!」

「——神様」

だが、その挫けそうな状態の彼の声からは、何よりも強い決意きもちを感じた。

そして血に濡れた顔を何とか笑顔にする少年は、神であるボクにこう告げる。

「僕……強く、なりたいです」

それは——かけがいのない眷属の、たった1つの願いだった——

++++
++++
++++

その後、ボクは怪我の手当と血糊をお湯で流してあげたベル君に肩を貸してあげていた。

「良いかい、ベル君。今日はソファじゃなくベッドで寝るんだ。君は怪我人なんだから」

「はい……すみません」

いつもベッドはボクに譲ってくれているベル君。

だが今は神の威厳がどうか言ってる場合じゃない。

「僕、もう眠くて……」

相当疲れているみたいだ。

ただ、ボクに気を使って休めないんじやベル君に申し訳ない。

ここは軽いジョークでも挟んで、肩の力を抜いてもらおうじゃないか。

「ふふん、その代わりに……ボクも一緒に寝させて貰おうかなあ？」

「良いですよ……じやあ一緒に寝ましようっ。」

2章 「怪物祭（モンスターファイリア）」 1話 「お使い」

++++
++++
++++

昨晚、がむしやらに朝までモンスターを倒し続けてヘトヘトになりながらホームへ帰ったその日のお昼前。

仮眠を取った後、早速ステータスを更新した。

その時は羊皮紙に写すこと無く、口頭で教えて貰ったけど……何でだろう？

——いや、それよりも今日は昨日の比じゃないくらいステータスが伸びている！

神様いわく、僕には才能があるかもしれないとの事だ。

あまり自惚れる訳にはいかないけど、他でも無い神様に言われた事が嬉しかった。

そして神様は強くなる代償に無茶をして、僕が神様を一人残してしまふ事はやめて欲しいとお願いされた。

……僕はアイズさんに追い付くためならなんだってする。

でもそれは強くなるために努力するって意味であって、神様への恩を返さずに命を粗末にする事じゃない。

暗に今回のような無茶な探索は終わりにした方が良くって事だろう。

僕は不安そうな神様を少しでも安心させたくて、はつきりともう危険な事はしないと約束した。

その後神様が2、3日ホームを留守にするらしい。

珍しい事だけど、他の神様との付き合いだつてあるだろうし深くは

追求しなかった。

でも何故か神様が自信満々な様子だったのが気になるなあ……。
一体、何をしに行くんだろう？

*****迷宮都市オラリオ〜西メインストリート『豊穰の
女主人』*****

先日お店を飛び出していったベルさんが心配で、朝早くからお店の前で箒をかけながら彼が通るのを待っていた。

だけでも、あの純朴な男の子が現れる気配はなかった。

もう彼は来ないかもしれない……。

時間が立つにつれ、どんどん悲しくなっていく。

お昼時になった辺りで自分から探しに行こうか迷っていた頃に、お店の中を伺う様に揺れる白髪と赤い瞳。

——ベルさんが、来てくれた。

たったそれだけで胸が高鳴って、先程までの陰鬱な気分は忘れてしまった。

申し訳なさそうにこちらを見るベルさんは、どうやら昨日のお勘定を払いに来たみたい。

律儀、とは違うんだろうけど……でも、あんな勢いで出て行きたくなるような事があった、しかもミア母さんに怒られるかもしれないわかっててしつかり謝りに来るなんて。

ベルさん、あなたは弱い男の人なんかじゃありません。私はわかっていますよ？

「——すみませんでした!!」

そして、誠意を込めてミア母さんに頭を下げるベルさん。
私はミア母さんが叱り過ぎたら庇ってあげたくて、側で様子を伺っていた。

しつかりお勘定も払って、彼が何度も謝っている。

「——わざわざ払いに来るとは、感心じゃないか」

心配は杞憂で、ミア母さんも許してくれるみたいだ。

これ以上ベルさんが落ち込むような事にならなくて、本当に良かった……。

これでまたこのお店にご飯を食べに来て貰えるのがとても嬉しい。でも、優しくも厳しいミア母さんが、最後にベルさんへ釘を差していた。

「……まあ、来なければこつちからけじめを付けに行く所だったがね」

「ほ、本当にすみません!!」

ドスの利いた声で、言われるものだから竦み上がってしまったている。

もう、怖がらせちゃ駄目じゃない!

私はベルさんに気を落として欲しく無くて、真つすぐ伸ばした手を取って笑いかける。

「謝らないで下さい、ベルさん」

怯え顔だったベルさんの紅い瞳を見つめて、優しく自分の本心を伝えた。

——ああ、ベルさんの手つてなんでこんなに気持ちいいんだろう? 安心させたいだけなのに、取った手に指を絡ませて感触を堪能して

しまう。

「戻って来てもらえて、私は嬉しいです……」

「シ、シルさん？」

ベルさんの顔が赤くなって、絡まった手を見ながら戸惑っている。いけない……！ミア母さんの前だし、後ろでクロエとリユーも見るのに私ったら。

取り繕うために、私は用意していた物を取り出した。

「今日もダンジョンへ行かれるんでしょう？これ……お弁当です」

「えっ……？」

今朝も、厨房を借りて作ったサンドイッチが入ったお弁当。

味見は済ませてあるから、味はきつと悪くないはず。

昨日は「予約」を果たせて貰えてないし、今日は夜に用事があるからベルさんとの繋がりが途絶えないように、お手紙を添えて準備していた。

律儀なベルさんはまたお弁当箱を返しに来てくれるだろうし、ダンジョンへ行く時は毎回ウチの前を通るみたい。

そうして毎日顔を合わせていれば……またチャンスが来ますよね、ベルさん？

「そんな、いや……」

「貰って下さい……。駄目、ですか？」

上目遣いに見上げて、ベルさんにおねだりをする。

こんな男性に媚びるような事は今までしたことなかったけど、ベルさんにはグイグイ攻めてしまう。

もしかしたら、私は本当にいやらしい子なのかもしれない。

「あはは……すみません、頂きます」
「うふふふ」

「観念して、お弁当を受け取ってもらえた。」

「どうやらベルさんは押しに弱いみたい。次もこんな感じで迫るところにしようかな。」

お手紙が見られちゃうと恥ずかしいから、小走りで厨房に戻った。

「シル、彼が例の少年かにや?」

「確か昨日食い逃げしちゃった白髪頭しらがあたまにや」

「アーニヤ、それは誤解だと昨日シルから説明があつた筈です」

厨房から食器洗いや料理の仕込みをしながら様子を見ていた同僚のクロエ、アーニヤ、リユートの三人に早速絡まれる。

黒髪を襟元で切りそろえた猫キャット・ビープル人のクロエがベルさんを見ながら確認しているので頷いて返すが、やけにクロエの眼がギラついているのが気になる。後で問い詰めなければいけない。

そして、昨日散々説明したのにアーニヤがまた誤解してそれをエルフのリユートが訂正している。

「そうなの、彼がベル・クラネルさん。昨日払えなかったお勘定をすっかり今日払いに来られたみたい。ね、食い逃げして居なくなるような人じゃなかったでしょ?」

「ただならぬ事情があつたと察しています。彼を責める者はもう居りませんよ」

「白髪頭はシルのオトコなのにや。だから問題無いのにや」
「……やっぱいいお尻してるにやあ」

リユートはともかく、アーニヤは気が早いし、クロエのベルさんをどう見てるのかはおおよそ理解した。

そんな話を話していると、ベルさんがミア母さんに背中を押されて

お店を出て行く。

「さあ行つた行つた、店の邪魔になるよ！」

「あ、はい……——行つてきます!!」

もうここに来た時の暗い雰囲気は抜けている。

元冒険者だったというミア母さんに、激励を貰つて元気が出たのかもしれない。

明るくお店を出て行くベルさんを見送っていると、私まで心が温かくなつてきた。

軽い足取りと挨拶は、ここも一つの帰る場所と認識とされたようにも感じてしまう。

——行つてらつしやい。

そうして彼の背中を祈ることで、私も押したのだった。

「……じゃあクロエ、少し貴方とお話がしたいな♪」

「んにやっ?!シル、女の子がしちやいけない眼をしてるにや、冒険者の眼力を出しては行けないにや!!」

「??.、なんでシルは怒つてるにや」

「……アーニヤにはまだ早いかもしれませんね」

++++++
++++++
++++++

ダンジョンからの帰り、夜の帳が落ちた大通りに面する武器商店の前で、僕は中で飾られた一振りのナイフを眺めていた。

——やっぱり、みんないい装備をしているんだよなあ……。

今日だけじゃなく、いつもダンジョンへ赴く際にすれ違う他の冒険者の中に、自分ほど貧相な装備をしている者は居なかった。

僕の戦闘スタイル的に、強固な防具よりもやはり強靱な武器——得物で言うならナイフが欲しかった。

だが、今僕が見ているヘファイストス・ファミリアの鍛冶師が仕上げた一品は正にそういった一級品の類だ。

——手が出せないなあ。

その値札には800,000の数字が載っていた。

とてもじゃないが、ファミリアの貯蓄をかき集めても届きそうにない。

この武器があれば、僕も少しはあの人に近づけるかもしれない……。

立派な武器を握って敵に立ち向かう自分と、アイズさんの精悍な勇姿を重ねていた。

そんな妄想と一緒に溢れたため息が、僕とナイフを隔てる硝子を白く曇らせる。

「ベルではないか」

「っ、ミアハ様」

不意に後ろから声をかけられて、振り返るとそこには「ミアハ・ファミリア」の主神「ミアハ」様が立っている。

片手にもった袋から乾燥した薬草の根が見える事から、材料の買い出し帰りの様だ。

僕は帰るわけが無い商品を眺めていた冷やかしと思われるのが恥ずかしくて頭を下げた。

「すみません……買えもしないのに」

「フツ……謝ることはなからう」

「ミアハ様は、神様の宴には行かれないのですか？」

優しく微笑まれて、安堵した僕はそう尋ねた。

確か神様も、ホームを留守にする初日は神様の宴に参加するって言っていた。

滅多にそういった催しには行かない神様に珍しいな、と感じていたので逆にここでミアハ様と会った事が気になった。

「うむ、私も声はかけてもらっていたのだが。弱小ファミリアゆえ、商品の調合に明け暮れていてな……ベル、これをやろう」

そういって、懐から取り出したのは2本の細い瓶に入った回復薬ポーションだった。

ミアハ・ファミリアの回復薬は市場で数千から数万ヴァリスは下らない高級品だ。

「えっ頂けませんよ、そんな!?!」

「なに、良き隣人へのゴマすりだ。——それに、最近お店に来ないとナーザも寂しがっている。またウチへ寄って相手をしてやってくれ。今後も我がファミリアを^ご最^上の^品になせ」

「あ、ありがとうございます……」

ミアハ様は、天界の頃から神ヘステイア様と交流があつたらしく、僕が傷薬等を買うのに何度もお世話になっている。

そしてその団長である「ナーザ・エリスイス」さんに良く効くとオススメの薬を売って貰っているのだ。

でも僕なんか稼ぎが少なく、あまり売上に貢献出来てないのに……本当に寛大な神様なんだなあ。

僕は頂いた回復薬を受け取って自分が色んな人に支えられてると改めて実感する。

「ではな」

そう僕の肩をポン、と叩いてそのままミアハ様は夜の喧騒へ消えていく。

——応援、してもらってるんだよね。

尊敬する神様の励ましが嬉しくて、僕は何も言わず小さくなっていく背中に頭を下げた。

+++++

神様がホームを空けてから、結構な時間が経った。

僕は手持ち無沙汰になって、西の大通りを歩いていった。

——「2、3日留守にする」って言っていたけど…神様、今日も帰って来ないのかな。

「おーっ！いつ待つにや、白髪頭！」
しらがあたま

「——え？」

「あ、お早うございますにや」

「お、おはようございます……」

考え事していると、いつの間にか「豊穡の女主人」の前まで来ていた様だ。

そして、その仕事着である緑を基調としたエプロンドレスを着ている猫人の店員さんから声をかけられた。

「持って来るのを忘れたから、付いてくるにや白髪頭っ」

「あ、あの……一体何の話ですか？」

「にやーからあ、この後おみゃーはおつちよこちよいのシルに渡すのにや」

「えっシルさん？何を？……え？」

そして、「あ、部屋に置いてきたにや」と呟いてから、僕は「アーニヤ・フロームル」さんに事情もわからないままお店の中まで案内される。

階段を昇って部屋が並ぶ所まで付いていった時、ここがシルさんの言っていた従業員さんが泊まっている場所なのかと思い出した。

どうやら僕に用事があるみたいなんだけど、全然具体的なことがわからない。

「おやあ？少年じゃにやいの」

「あ、すみません……お邪魔してます」

「んにや、クロエ」

廊下を渡っていたら、一つの部屋から出てきた黒髪の猫人の女性が出てきた。

エプロンドレスではなく灰色と黒のワンピースを来ていて、細い腰やしなやかな手足が綺麗な曲線を作っている。

「今日は夕方からにや？」

「にやあ。にやから今から怪物祭モンスターファイアにでも行こうかと思ってにやけど

……少年が居るなら話が別だにやあ」

「……え、僕ですか？」

突然、クロエさんがこちらを見てその黒い瞳を補足しながらこちらに微笑みかける。

……嫌な予感がする。

「今はシルも居ないし、丁度いいじゃにやいの」

「白髪頭に用事があったのかにや？」

「まあ、あつたというか……これからあるという感じかにや」

「あの……一体何の話しを」

「まあまあ、初めまして少年？みゃーは【クロエ・ロロ】にや。クロエって呼んで良いにやよ？」

「え、うええ!？」

クロエさんが僕の横まで近づくと、にっこりと笑いながら名乗られた。

そして、いきなり僕の臀部を鷲掴みにされる。

訳が分からなくて、抵抗するが肩を抱かれる手の力に一切身動きが取れない。

——この人、力が強い……!?!

「すみません！あの、お尻っ手が！」

「暴れにやけても良いのよ、少年……みやーの部屋で少し火遊びでもして、少し気持ちよくにやるだけだから」

「お、にゃんか良いことするのにやか？」

「ふふ♪アーニヤもそろそろお年頃だし、少年で経験しといても良いかも知れにゃいわね」

「あのっ僕、そんなつもりは……！」

「間近で見ると、可愛い顔してるにやあ少年。つい現役の頃を思い出しちゃうにゃん」

なんだかとんでもない方向に話が進んでいってる気がする……！

僕のか細い抵抗も虚しく、クロエさんが出てきた部屋に連れ込まれて付いてきたアーニヤさんがドアを締めてしまう。

というかアーニヤさんは僕に何か用があつたのではないのか。

すつかりこれから起こる事を見届ける事に興味が移ってしまっている。

クロエさんが普段寝ているのだろうベッドの目の前で、僕の身体に触れている手の動きがねつとりと撫でる動きに変わっていく。

熱い吐息を耳に吹きかけられ、思わず全身の力が弛緩する。

「初心にゃんだねえ、少年。……これは刺激的なお昼ににやりそうね♪」

そうしてベッドに僕が押し倒され彼女が押し掛かる頃には、僕にもこれからの火遊びがどんな事なのか察しがつく。

汗がじつとりと頬を伝わり、股間に血が集まるのを感じながら——

狡猾な猫に捕食される兎の映像が脳をよぎった。

2話 「襲撃」

+++++

「あ、そんな……クロエさん……」

「にやあん♪鳴き声も可愛いねえ、少年」

「そんなぺろぺろ舐めて、白髪頭って美味しいのかにやん？」

「豊穰の女主人」でクロエさんの部屋に連れ込まれてしまい、僕はまさに捕食されていた。

アーニヤさんに両手^{うわて}を上手に拘束され、あれよと言う間に上着は脱がされ上裸になってしまう。

……この猫^{キャット・ピープル}の二人、力が強くてとても抵抗が出来ない……一体何者なんだ？

ザラザラとした舌が腹筋や胸板を這い回り、クロエさんの唾液で濡れた乳首に息を吹きかけられたと思うと、爪で優しく引つ掻くように刺激されて腰が浮いてしまう。

「ちゆる、れろお……うーん、でも少しメスの匂いもするにやあ。少年は初めてって訳じやにやさそうねえ」

「それは……ふあっ歯を立てるのは……!」

「じゃあさつきからみヤーのお腹にイタズラしてる固あーいの、見せて貰おうかにやん♪」

「勘弁してくださいさあぁいい……」

そしてとうとう、下の服も脱がされてしまう。

股間は散々身体を愛撫されたせいで限界まで膨張している。

「えっ、嘘にやよね？」と眩きながら、手慣れた動きで下着も含めて脱がされた。

もう完全に全裸である。僕はお店の部屋でお昼から何をしている

んだらうか。

「にやあお……。これは予想以上の業物だにやあ」

「うにや！白髪頭しらがあたまのオチ○チン、デカすぎにやあ!!お兄ちゃんのと全然違うのにやあ」

「にやん？アーニヤの兄上は普通サイズにやのかにやん？」

「にやあ、昔見た時はこんにや小さくて可愛かったのにや。白髪頭のはデカ過ぎるし、形もにやんか怖いにや！」

「それもう指にや……。女神ヴァナ・フレイアの戦車の意外な弱点を知ってしまったにやん」

僕の勃起したペニスを捏ねるように弄りながら、雑談をし始めるクロエさん。

空いた片手で陰囊をやんわり揉まれて、正直すぐにでも限界が来てしまいそうだ。

しかも、アーニヤさんまで食い入るように僕の股間を凝視していて、スカートから伸びた黒タイツの太腿に顔を挟まれて、濃い女性の匂いや体温、張りの良い肌の感触にますます興奮を抑えることが出来そうにない。

「うっわ、まだ大きくにやるの？これはシルも将来大変だにやあ」

「すみませんもう本当に離して下さい……。今日名前知った女性ひととこんな」

「モチロン駄にや目♪こんな物騒なモノでオンナを泣かせてるにやんてえ、お仕置きにやんっ」

「うう……。どうしてこんな事に」

「白髪頭、元気出すにやん」

口を少しモゴモゴさせて、薄い形の唇からどろっと唾液を陰茎に垂らされて、まぶすように手で扱かれる。

本格的に絞られてしまうようだ。

僕のモノを手で上下に擦りながら、クロエさん自らも器用に服を脱いでいく。

スレンダーな体格に、しっかり女性である事を象徴する胸の膨らみ、その先端でピンと主張する桜色の突起、上気して艶を出し始めた白い肌全てが視界に捉えられた。

最後に股間を隠す布も、長い尻尾を動かして取り払われた。

その黒く毛が細い茂みを見て、形から細かく手入れされている事が伺えた頃には、僕も抵抗する気がとうに失せていた。

男女がお互い全裸（アーニヤさんは仕事着のまま）になった部屋の中は、淫靡な空気で充満している。

水気を出し始めた股間を僕の脛に擦り付けながら、クロエさんはじっくりと肉棒を絶頂へ高める為に愛撫を続ける。

脚で僕の顔を挟むアーニヤさんも、息がだんだん熱くなり腰がモジモジと揺れ始めて、手首を掴む力もどんどん強くなって正直痛みを感じてきた。

いよいよ射精まで秒読みかという所まで来た所で、ピタツとクロエさんの手の動きが止まった。

寸前でお預けされてしまい、困惑しながら彼女の目を見ると、ニイイツと三日月のように弧を描いていた。

——完全に弄ばれている。

「少年、もしお姉さんの言うとおりにオネダリが出来たら……最高にキモチ良い事をしてあげるにゃん」

「な、にを……」

『クロエお姉さんがイチバン好きです。言うとおりにしますから、たくさん愛して下さい』って言えたら、少年の好きな事も、想像も出来にゃいくらいスゴイ事もしてあげるにゃん？」

「し、白髪頭。とりあえず言う通りにするにゃ。みゃーもソレ気に

「にやるにゃん」

「僕、は……クロエさん……」

ハアハアしながら促してくるアーニヤさんはともかく、クロエさんの扇情的な誘惑に心が堕ちかける。

このまま、この女性に任せれば……嫌なこと全部忘れられそうだ。色んなものが色褪せていく中、最後の小さな光の中にあつた憧憬が——金の髪を風に揺らし、剣を振る少女が浮かび上がる。

——彼女は、こんな事で折れたりしない。

「僕は、こんな事望んでません……お願いですから、離してもらえませんか……?」

「……、」

驚いたように目を見開き、ポカンとするクロエさん。

どうやら彼女のアテは外れた様だ。

僕は、もう快樂に溺れた思考を取り払い、真剣な眼差しで彼女を見つめる。

「エー……つまんにゃいにゃあ」という不満の声を無視していると、僕を視ていた黒い瞳は潤いを帯びて、黒いナニかを感じるような先程までの物ではなく、ご褒美を得た子供みたいな笑顔になっていた。

「少年、合格にゃん♪」

「……うえ?」

「もしこの程度で誘いに乗るようじゃ情けにゃいオスはシルには相応しくにゃいから。襲われたとかでつち上げてミア母さんに潰しても

らうつもりだったにやん」

「ひい!？」

なんて事考えてるんだ、この人？もし僕がもう少しでも揺さぶられていたらと思うと血の気が引く。股間は大きいままだけど。

止まっていた手の動きをゆっくりと再開して、はもつと陰囊を咥えて優しく舌でほぐされる。

「んぱつ、これでも自信はあつただけにやあ。でも、今の少年はすっかりオスの眼をしていたにやん。可愛い顔してるけど、しっかりコレに見合つた強いオスにやんだにやん……?？」

うつとりと、怒張した肉棒に頬釣りしてこちらに微笑んでいる。

なんか心なしか、目の焦点が合っていないよな……?？」

「まあ、それはそれとしてこれからはみやーの事もたまには相手して欲しいにやん。今までロクなオトコと出会ってにやいから、みやーのオンナも寂しくて仕方にないにやん」

「え、は!?!何を?何でそうなるんですか!？」

「何をつてナニに決まつて……ああ、言わせたいのかにやん?オスとメスの交・尾♪少年の子供を、みやーのお腹に仕込む遊びにやん」

「いやだからそれは望んでないってさつき僕があ!？」

「そんなにやの一回やつてみたら気が変わるかもしれにやいにやん。ひとまず、コレはさつきのご褒美にやん♪」

「え?何を……つてええ!?!ソコは駄目です!汚いですつああ!!」

「んー?クロエ、白髪頭の出すとこ舐めてるのかにやん?」

何と、クロエさんの舌が尻の割れ目の奥——つまりは肛門の中に侵入してきた。

唇で入り口を吸いながら、長くザラついた舌がレロレロと不浄の中を蹂躪する。

未知の衝撃に、チカチカと視界が明滅する。
気持ちいいとかを越えて、最早僕の理解を越えた領域に達している。

エイナさんに指で弄られたことはあったが、まさか口で愛撫されるとは思っていなかった。

焦らされていたこともあり限界はすぐそこまで来ていて、このままでは女性二人を汚してしまうのは明白だ。

「あ、アーニヤさん、お願いします！何でもしますから、この手を離してください!!」

「ええ? うーん……」

「ちゆるる♪どうやらコレは初めてみたいね。じゃあトドメ刺してあげるから、堪能してにゃん? んちゅううっ」

「おお、なんか起きるのかにゃん? 早く見せるにゃ白髪頭っ」

「話を聞いてくださ、あつもう駄目……!」

「?……、うみやああ!」

アーニヤさんの悲鳴を聞きながら、僕は天井に向かって思い切り射精してしまった。

魂が抜けてるんじゃないかと錯覚するくらいの量が飛び出している。

出している間もクロエさんは最後まで絞るように手で扱き、僕の肛門を吸い続けた。

噴水のように吹き出た白い精液は、ベッドは当然ながら一心不乱に奉仕をしているクロエさんの黒髪や白い背中、情事を観察していたアーニヤさんの制服を含めた全身に降りかかる。

「ぶっ、みやあ?! にゃんにゃコレ?! 白髪頭は漏らしたのかにゃん?! しかも白くて生臭いし病気にゃん!」

「アーニヤ、これが子種……この白いやつをお腹に入れてもらって、少年の子供を作るにゃん。——にしてもスゴイ濃さと量……1発でこ

れにやんだから、まだまだイケるにやよね?」

「へ、え……?」

「これがコダネ? 皆こんにゃの出してコドモ作ってるのかにやん……」

放心していた僕の腰に、クロエさんはドロドロに汚れたまま跨ってくる。

髪から垂れた精液を舌で舐め取りながら、もはや洪水が起きてるほど濡れた割れ目を出し終えた僕の陰茎に擦り付けながら品垂れかかって来る。

「も、もう無理です! さっき出したばかりですし、お二人もお風呂に……!」

「みゃーから少年の匂いがして、これはこれで悪くにやいにやん。それにそんなこと言って少年のも、もう固くなってみゃーのオンナに入ろうとしてるにやん? まあ、あれだけの竿と玉の大きさなら1回で満足するわけにやいとは思ってにやいけど♪」

確かに僕のペニスは既に2回戦目を待ち望んで、再度硬さを取り戻していた。

なんか日に日に僕の性欲が強くなっている気がして嫌になるなあ……。

彼女の秘裂に先端があてがわれる。根本をクルリと黒い毛並みの尻尾が捉えて、狙いを定められていた。

「じゃあ、次は本番の「大博打」にや……。今日は卵を抱えるまで遠い日にやけど、見事大穴を当てれば……」

クチュ、と割れ目に侵入した先端に、ちゅうちゅうと中の肉襞が吸い付いてくる。

エイナさんとの恥じらいある営みとは違う、完全な本能に身を委ね

た『繁殖』行為が始まろうとしていた。

「二等賞は、少年とみゃーの赤ちゃんが出来ますにゃん♪」

僕らの交尾を止めるものはここに誰も居らず、唯一の第三者であるアーニヤさんは固唾を飲んで見守っている。

にっこり笑いながら、クロエさんは腰をゆっくりと降ろし――

「クロエ、アーニヤを見ませんでしたか。まだ居るのでしょうか？」

「?!?!?」

「あみやああ!」

透き通ったその声で、心臓が裂けそうなくらいに驚く。

クロエさんも、思い切り身体を驚きに揺らして、一瞬で身体を起き上がらせて気配を消そうとする。

しかしもう一人の猫人のあげた叫び声によって、居留守は不可能であった。

「?アーニヤ、居るんですね。仕事はどうしたのですか……入りますよ」

「ちよつちよつと待つにゃあ!!」

ゆっくりと開くドア。

伸ばされたクロエさんの手は虚しく空を掴み、無情にも新たな訪問者が訪れた。

「豊穣の女主人」のエプロンドレスに身を包み、鮮やかな金髪から伸びる細長い耳と透明感のある白い肌は純血のエルフである事を物語っている。

「クロエまで何ですか騒々しい……ここで一体何、を……」

そして部屋の惨状を目の当たりにした蒼い瞳が一瞬驚愕に開かれた後に、冷気を体感するほどの冷たさを持つて鋭さを増していく。

彼女が見ている光景は、ベッドの上で三人の男女。

仕事をサボった猫人は全身を白濁に塗れて「しまった」という顔をしている。

その女性の膝に顔を預けて、呆けた状態で大の字になっている全裸の男。

同じく全裸に身体をドロドロにして、男に跨りながら扉に手を伸ばしている猫人。

——言い逃れなど、出来る要素はなかった。

「……い、いやー。リユウ？これにはほんつとにふかい訳があつてにやあ」

「三人共」

底冷えした低音が、部屋に響く。

「説明を、して貰います」

「……………、はい……………」

その恐ろしい詰問に応えたのは、一体誰の声だったか。

++++++
++++++
++++++

結果だけを言うと、僕にお咎めは殆ど無かった。

エルフの女性——【リユウ・リオン】さんは、クロエさんの性格を

理解していて、惨状を見た瞬間に何となく原因が彼女にあると察したみたいだ。

仕事を放置していたアーニヤさんには、軽いお説教をした後に早く身体を清めなさい、と開放していた。

そして問題のクロエさんへは……—

「度し難い愚行です。この件はシルが悲しむので他言無用ですが、——クロエ。貴女には然るべき制裁を、ミア母さんに代わり下します」

とても酒場の妖精には思えない、殺気の混ざった宣告を下していた。

リユーさんが部屋の清掃と非番を取り消して作業に出るようクロエさんに伝えた後、アーニヤさんの部屋で身体を洗わせて貰ったから、僕は本来の要件をようやく伝えられたのだった。

「店番サボって怪物祭モンスターファイアを観に行ったシルに、忘れた財布を届けて欲しいにゃ」

「と、いう訳です」

「……成る程」

「シルは無論サボったわけではなく、休暇を取ったの祭り見学です。今頃財布がなくて困っているでしょう」

そして、紫色のガマ口財布を渡される。

これが無くてオロオロしているシルさんを思うと、早く渡しに行かなければならない。

「お願いします、クラネルさん」

「しますにゃ♪」

「——、というかアーニヤさんは服を着てください！」

「アーニヤにはもう少し慎みを教えなければいけませんね……」

「……とにかく、話はわかりました。任せて下さい」

そして僕は、シルさんが居る怪物祭へ行くことに。
モンスターフィリア
怪物祭——。タオル一枚のアーニヤさんと、制服を着させてあげ
ているリユーさんの説明によると、ガネーシャ・ファミアが主催す
る、年に一度の大きな祭だという。
闘技場を一日丸ごと貸し切り、ダンジョンから連れてきたモンス
ターを観客の前で「調教」するらしい。
要するに、とても過酷な見世物という事だ。

僕は、シルさんの財布を片手に人通りが激しくなっていく闘技場へ
向かう道を駆けて行った。

*****迷宮都市オラリオ〜東メインストリート〜**

リユーさんの言っていた通り、物凄い人で賑わっていた。
——シルさん、見つかるかなあ。

「ベル君!!」

「——、神様? どうしてここに……」

露店の隙間で人の流れを眺めていたら、何日ぶりかの声に振り返
る。

そこには、肩から袈裟懸けに縛った包みを背負った神^{ヘステイア}様が立っ
ていた。

「それはキミに会いたかったから、かな♪」

「あ……はあ、僕も会いたかったですけど……」

「つ、素晴らしいねえ！やはりボク達はただならぬ絆で結ばれてるよおー！」

「あ、あの神様。一体……？」

どこかくすぐったくなるほどの笑顔を向けられて、思わず本音を零してしまった。

機嫌もすこぶる良い様子の神様は、僕の手を取って迷いなく祭りの中心へと歩みだした。

「デートしよおぜーベル君っ」

「ええ!?ま、待って下さい神様……僕、人探しを頼まれてるんです」

せつかくの神様のお誘い、断るのは心苦しいが今もどこかで財布を忘れ困っているシルさんを放っておく訳にもいかない。

「そおなのかい？なら、デートしながら探せばいいよ！一石二鳥だね♪」

「いやあ、そういう訳には……」

「おじさん、クレープ2つ！」

「あいよ！」

「か、神様……」

いくらなんでも、お届け物を神様と遊びながらなんて……リユースに辺りに怒られそうだ。

そんな葛藤をしている僕を他所に、露店の店主へ生菓子を注文している神様。

止める余裕も無く、気前よく生地を熱された鉄板に流して薄く円状に伸ばしていく店主。

これはもう本当に食べ歩きと人探しを両立することになりそうだ。

出来上がったクレープを手に僕らは、闘技場前の人混みを避けられる芝生に座り込んだ。

周囲を見回すけど、シルさんらしき人影は無さそうである。一体どこへ行ってしまったんだろうか……。

「はい、ベル君。あーん♪」

とても嬉しそうに此方へクレープを差し出す神様。

「そんな畏れ多い」と断ろうとも思ったけど、にこにこしている神様の期待を裏切りたくなくて、僕は遠慮気味にクリームに乗った三角形の端を齧った。

「な、ベル君が素直に間接キツスを差し出すなんて……なんて大胆なんだキミはー!」

「そんなっ神様が仰ったのに!」

「あ、ベル君……クリームが口に付いているよ?慌てて食べるからさ♪」

「ええ!えっと、何処ですか?」

神様の前で口を汚すなんて恥ずかしい。早く直したくて手を口元に持っていくが、そっと重ねられた神様の手によってそれは阻まれた。

「ベル君……じっとしているんだ。ボクが取ってあげよう」

「えええ!?そんな、神様にそんな事!!」

「取って、あげたいんだ……」

「か、神様……」

切なそうな、熱のこもった眼差しに僕はぎゅっと目を閉じる。

そして昼クロエさんとの情事を思い出す。

もしかして、舌で舐め取られる……?」

尊い神様の舌が僕の顔に……!?そんな、ッ僕はどうしたら!

胸が爆発しそうなくらい高鳴っているのを感じていると、予想とは違う感触に戸惑い目を空けるとそこには指で口の端からクリームを掬い取っていた神様が映っていた。

神様でふしだらな妄想をしてしまった事が恥ずかしくて、ぶしゅうつと湯気が出るくらい顔が熱くなる。

「ははあああゝんふふ、んはははっはははー!」

恥ずかしがる僕が嬉しかったらしく、ぴよんぴよんとツインテールを荒ぶらせる神様は、左右に身体を揺らしながら歓喜していたのだった。

++++
++++
++++

「……っふーん、キミの探している相手つてのは女の子なのかあ。ベル君は抜け目が無いなー」

何店か露店を回りながら、シルさんを探す為に神様にも事情を説明するとそんな事を行っていた。

「か、神様っどういう意味ですか?」

「さあね!」

「神様……、——っ!?!」

どうしてか、若干不機嫌になってしまった神様を宥めようとしていると、闘技場の方から悲鳴と何かが崩れる大きな音に意識が逸れる。そして、その先には闘技場の正面入り口から出現した大型の猿型モンスターだった。

悲鳴を上げ逃げ惑う人々を嘲笑うように躍り出て、威嚇する様な鳴

き声を広場に轟かせていた。

「……モンスター!?!」

神様が驚いてるのを聞きながら、僕はモンスターを注意深く観察する。

大型のモンスターは両手で闘技場入り口の縁にぶら下がり、逃げ惑う観衆をキョロキョロと眺めている。

そして、拘束具ヘッドギアの奥にある目が此方を捉えた瞬間、怪しく光った気がした。

「べ、ベル君。あいつ……ボクの事を見てないかい……?」

神様の言う通り、例のモンスターは僕達——つまりは神様を凝視して首の動きを止めた。

観察していたモンスターの腕の筋肉が少し膨れたのを見て、僕はダンジョンで感じる予感を察知した。

——こっちに来る!!

僕は咄嗟に神様の手を取ってその場から一気に遠ざかる。

そして同時に視界の端で、モンスターが跳躍するのが見えた。

「うわああ?!?!」

背後で、露店を踏み潰しながら地面へ着地する衝撃を背中に感じる。

振り返ってる暇なんて無い。

原因は不明だけど、あのモンスターは神様を狙っている!!

「神様、何であのモンスターに狙われてるんです!!知り合いですか!?!」

「初対面だよお!!」

追いかけてくるモンスターから必死に逃げ、細い路地を抜けた先には――

「ここは、『ダイダロス通り』……?」

僕が知る限り、ここはオラリオの南と東を繋ぐ貧困街のエリア。

――その構造は複雑怪奇で、一度迷い込んだら二度と出てこれないという。

そして、背後からは建物の屋根を伝って迫ってくるモンスターの咆哮が聞こえた。

「……っ、行くしかありません!!」

――例え迷うことになっても、神様に方が一があってはいけない!

こうして僕と神様の逃走劇が始まった。

3章 「神様の刃（ヘステイア・ナイフ）」
1話 「輝きを、其の手に」

+++++

そう、あの時も確か……こんな風に晴れた日だった。

山でモンスターに殺られ、あつけなくお祖父ちゃんは死んだ。

探しにも行けない、深い谷に落ちていったらしい。

——決めたよ、お祖父ちゃん。僕、冒険者になる。

でも、こんな弱そうな僕を冒険者として受け入れてくれるファミリアは見つからなかった。

その日も、僕はファミリアを訪れては門前払いを食らっていた。

『——やあ、少年。ファミリアを探しているのかい？』

神様が、そこに居た。

——僕の、『かみさま』……。

巨大なモンスターから逃げ惑い抵抗するも安物のナイフは砕けてしまい、今の僕の実力では太刀打ちが出来ない。

一旦は切り抜けるけど、このままでは神様もろともモンスターの餌食だ。

そして、貧困街の中にある水路の扉を閉じて僕は神様を置き去りにした。

この水路から逃げて、その間に僕があのもンスターの囿になれば神様だけは助かるかもしれない。

——神様、僕はもう「家族」を失いたくないです……。

「うまく逃げて、くれたかな……神様」

とうとう怪物——「シルバーバック」に追い詰められた。

もう脚もろくに動かない。

身体ではなく、心が拒んでしまっている。

鋭い牙が、強靱な爪が、僕に終わりを告げようとしていた。

ふと、5階層で遭遇したミノタウロスを思い出した。

——今度は現れてくれないよね、アイズさんも……。

もう1度逢いたかったけど、良かったのかもな……。

格好悪い姿を、見せずに済んで——

「さよなら、神様……」

「——ベル君!!」

「っ!？」

ここにある筈のない声を聞いて、顔を上げる。

そこには、先程までと変わらぬ様子の神様が立っていた。立って、しまっていた。

——どうして……

「——何で来ちゃうんですか!!」

モンスターが標的を歓喜するように神様へと移すのに対し、咄嗟に神様と転がりながら逃げる。

そうして再び宛てのない逃走を再開した。

何故来てしまったのか。

来てしまったては、守れない。

守れないから、僕は一人で——。

「約束、してくれただろう?」

『お願いだから、僕を一人にしないでおくれ』

「でも……、でもこのままじゃ二人とも……!」

「諦めるのは早いぜ、ベル君!」

なのに、神様はこんな弱い僕を信じて、笑っていた。

「すまない、ベル君!僕はこんな状況なのに、心から幸せを感じてし

まっている！」

「何言ってるんですか、神様！」

頬を染めながら場違いな事を言っている神様を、無礼と知りながらも抱きかかえて駆け抜ける。

そして仕掛け扉の先にある袋小路で、僕達は一度モンスターをやり過ぎした。

あいつは神様を追っている。このままでは……

「だったら、考えを変えよう。ベル君、キミがああのモンスターを倒すんだ！——ここでステータスを更新する。キミのチカラを、ああのモンスターに見せつけてやれ！」

——無理です……少しくらい強くなった所で……

——それに、僕じゃああのモンスターを倒せません……

この折れたナイフの様に、強敵を前に挫ける僕の心では……。

「ボクはキミを信じてるんだぜ。だってそうだろう？ああのヴァレン某とかいうバケモノみたいな女を目標にしている冒険者なら、あんなモンスターちよちよいのちよいさ♪」

そうして神様は、僕に一振りのナイフをくださった。

黒い刀身に刻まれた神聖文字。ヒエロ・グリフ

刃は一見鋭さを失っていて、これでは切ることも断つことも難しそうだ。

鞘から完全に抜いた瞬間、その文字が一瞬光った様な気がした。

——ああ、このナイフは僕なんだ。

なんとなくだけでも、そのナイフからは神様がくれる恩恵の暖かさを感じた。

神様と出会ったことで冒険者になれた僕の様……。

神様がもたらしたことによって、このナイフは一級品の武器になる

チカラ

「キミの——いや、ボク等の武器だ。名付けて……神の刃」

ヘステイア・ナイフ

ステータスを更新しナイフを受け取った僕は、神様の信頼に応えるためまた立ち向かう——。

——大丈夫だ、ベル君。ボクがキミを、勝たせてみせる。信じてくれるね？

背中に刻まれた神聖文字を通して、神様からの恩恵を実感する。

僕は、強くなった。

動きが視える——脚が動く——モンスターの攻撃にも、ビクともしない。

このナイフも、僕に合わせて成長している。

肉を絶ち、シルバー・バック怪物をねじ伏せていく。

怖くない……

反撃全てを避ける。向こうが動く前に斬りつけて、敵が怯む前に回り込む。

この武器が、今の僕のチカラだ——！

+++++

巨体が倒れる。

胸に突き立てたナイフと魔石を残して、あのモンスターは黒い灰になった。

——勝った。

——僕と、神様があのモンスターを倒したんだ！

「……やったあああああ!!」

「はいっやりました、神様！」

いつの間にか集まっていた観衆の拍手の中、僕と神様は寄り添って喜びを噛み締めていた。

僕等の武器がああ怪物を打ち倒し、神様を守ることが出来た。

初めて、神様の期待に応えることが出来たかもしれない。

僕等を褒め称える人達で既に周囲はごった返していた。

この人達も、僕があいつを倒せなければ被害が出ていたかもしれない……。

「……なんか、凄い騒ぎになっちゃいましたね」

「ああ、そうだね……」

「——、神様？」

「ベル君、本当 に……良く、頑張った、ね……」

弱々しく笑う神様は、その言葉を最後に地面へ崩れてしまった。

「か、神様あああああああ!!!」

*****迷宮都市オラリオく西メインストリート『豊穰の女主人』く*****

「ダイダロス通り」で倒れた神様をちやんとした寢床で休ませてあげたくて、僕は「豊穰の女主人」のお世話になっていた。

お昼はあんな事があったけど、もうすっかり夜になって酒場として賑やかになった1階の喧騒を聴きながら、僕は2階と3階を繋ぐ階段の下で俯いていた。

神様、いつ目を覚ますのかな……。

「——如何です？女神様のご様子は？」

すると、1階の酒場から階段を昇ってシルさんが様子を伺いに来た。

クロエさんと一緒に、彼女も夕方まで休暇で夜はすっかり従業員として働いているらしい。

「疲れが出て、眠っているだけみたいです……。お騒がせしました、ベッドまで貸してもらっちゃって」

「困った時はお互い様です。ミア母さんにも許可は取っていますので、ゆっくりして行って下さい」

本当にシルさんにはお世話になってばかりだ。

僕からは何もお返し出来てないのに、こんな親切にしてくれる。なんていい子なんだろう……。

「それに、元はといえば私がお財布を忘れたせいで……。ベルさんを騒動に巻き込んでしまったんですね。——ごめんなさい」

「い、いえ……。シルさんの所為じゃー！」

シユンと落ち込んだようにお盆を胸に抱え込んで俯いてしまった。

彼女は何も悪くないのに、あれは只の事故だったんだ。

階段の途中から見上げる彼女よりも下になるように、僕は床に擦る

ほど頭を下げる。

神様から聞いたことのある、極東の謝罪ポーズに近い姿勢だ。

「そうそう、街の皆さんが言ってましたよ？モンスターと戦っているベルさんは『勇敢だった』って！」

「い、いや……逃げ回っていただけです……」

死に物狂いで、鮮やかさなんてどこにもない無様な戦いだっただ気がする。

それでも、感謝している娘に神様を守ったあの出来事を褒めて貰えることが嬉しくて、つい頬が緩んでしまう。

至近距離にあるシルさんの瞳は少し潤んでいて、頬が染まっているのを見てると何か妙な勘違いをしてしまう——、そういえば、僕はこの人にキスをされていたんだ……。

「そんな事ありません……実は私も、少しお見かけして——、」

一度目蓋を閉じながらそんな事を言っているシルさんは、少し背伸びをするように此方へ顔を近づけてきた。

あれ、何か既視感が……と感じる間もなく、両手で顔を挟まれて僕の唇が柔らかい触感に包み込まれた。

「んうう!?!」

「——、んっ、ふふ……♪」

目を閉じて、味わうように舌で舌を絡めてくるシルさん。

前回は初めてって言ってたし今回は2回目？だとしたら何故こんなに手慣れた舌と唇の動きが可能なのか。

こんなの、もはや愛情表現を越えた一種の性交の域である。

流し込まれる唾液の味は甘美で、こちらがだらしなく垂らす唾を余すこと無く舌でべろりと舐め取られていく。

彼女の女性としての本能がそうさせるのか、隠れた才能なのか。

普段の清楚な印象とのギャップが強すぎて、混乱するしか無い。僕の舌を強く吸うことで口から外に出され、だらしなく伸ばした僕の舌をぷるんとした唇に包まれる。

下品にも映るほど窄めた唇と内頬でにゅぽにゅぽと顔を前後して愛撫されると、まるで彼女の膣に侵入させて抽送させている錯覚に陥る。

——私の中でも、こんな風に愛してあげますからね？

深い愛情と情欲を感じるキスから、彼女のそんな思考を感じる。

シルさんとのキスだけで股間は痛い程勃起して、ズボンを破ってしまうんじゃないかと思った。

——というよりも、このままじゃ……！

こちらの生気を吸っているんじゃないかというくらいジユルジユルと音を立てて舌を吸われた瞬間、股間に不味い衝撃が走った。

「——っ!?——!、……うっ、——」

「♥♥♥」

最初に思ったのは「そんな馬鹿な」だった。

まさか、接吻で出してしまうなんて……。

しかし下着の中でドクンドクンと脈打ち、ぐちゃりとした冷たい不快な感触が広がっていく。

口を吸われながら、僕が最後までズボンの中を汚し終わってからようやくキスから開放された。

「ぷはあー、 あっあのー!これはその……」

「♪、我慢が出来ませんでした。それに——」

間違いなく軽蔑されるに違いないと思っていたが、射精したばかりでドゲザの姿勢の僕の耳元に熱い吐息がかけられる。

「私、見惚れちゃいました」

「……………えっ?」

「気持ちよさそうなベルさん、とつても素敵です。——下着は私の部屋に替えがありますので、そちらを使って下さい。……………鍵と部屋の番号は大丈夫ですよね?」

「」

「お店の手伝いしてきます、また後で……………ベルさん!」

もう言葉も出ない。そしてこれも以前あった事……………この人には何度固められる羽目になるのだろうか。

彼女が恥じらうようにお盆で口元を隠して、頬を染めながら階段を降りていくのを見て「今更何を恥じるのか」と思わずには居られなかった。

——からかうには、流石に変だよ……………。

勘違いとするには、彼女の性格からして判断材料が足りなかった。

初めて入るシルさんの薄暗い部屋の中をあまりジロジロ見ないように務めて中に入ると、ベッドの上に男性用の下着が綺麗に畳まれていた。

まるで用意されていた様なその準備の良さに、彼女の底知れなさを実感した。

着替えを終えて戻った時、神様の寝言が聞こえて部屋へ飛び込んだ。

良かった、目が覚めたんだ……………!

「びつくりしましたよ、いきなり倒れちゃったから……」

「いやあ、流石に疲れが出たらしいね。ゴメンね、心配かけて」

見る限り顔色も良く、本当に疲れていただけみたいだ。

怪我也かすり傷程度だし、僕でも神様を守れたと少し誇らしくなる。

「シルさん達に聞いたんですが、あの怪物シルバーバック以外のモンスターも全部倒されたそうです。——アイズ・ヴァレンシユタインさんも活躍したそうですよ」

「……へえ、そうかい」

「ところで、神様」

「？」

若干神様が不機嫌になったようにも見えるけど、それよりも気になることがあり僕は懐からあの武器——「ヘステイア・ナイフ」を取り出した。

「このナイフ、どうしたんですか？ 鞆に『Hφヘαフιアイσストτス0s』って……あの」

取り出した鞆には、戦闘中には気付かなかった鍛冶師ギルドの証——見覚えのあるロゴが刻まれていた。

「あの「ヘファイストス」さ！ 正真正銘のねっ」

「——、」

「知ってたよ。キミがヘファイストスの店の窓にいつも顔を貼り付けていたのを」

知られていたのか。

こんな武器が僕にもあればと、何度あの鍛冶ファミリアの武器を眺

めていたことか。

「キミの欲しがっていたモノとは、ちょっと違うかもしれないけど……でもこれ、世界に一つしか無いんだ。凄いだろ？」

そんな、子供の自慢を語るように神様は誇らしく語る。

「ボク、見ているだけは嫌だったんだ。養われるだけじゃ、助けられてばっかりじゃあ……嫌だったんだよ」

「……でもお金は？へファイストス・ファミリアの武器は凄く高くって……！」

そう、あの鍛冶師ギルドが出す1級品の数々は、到底手が届く値段で提供されていない。

「話は付けてきた！強くなりたいたんだろうか？言っただじゃないか、手を貸すって。これぐらいのお節介はさせてくれよ♪——誰より何よりも、ボクはキミのチカラになりたいんだよ」

「——っ、——」

涙が、止まらなかった。

熱を持った大粒の雨が、頬を大量に流れていく。

僕の不安を、自己嫌悪を、葛藤という泥を洗い流していくように……そして——

「ボクはキミの事が、好きだから！」

「——ひっ、……っく、かみっさま……神様あ！」

そんな曇り無い笑顔が、僕の淀んだ心を照らしてくれていた。
思わず、神様に抱きつく。
母のように、神様は僕を優しく抱き留める。

「いつだって頼ってくれよ……ボクはキミの『かみさま』なんだから」
そうして最後まで、僕は神様の腕の中で泣き続けた。

++++
++++
++++

「ところでベル君、なんか臭わないかい？」

「え、そうですか……？僕にはわかりませんが……」

「んー、というかキミの方から臭いが？——何かポケットから出てい
るよ、べる……く……ん」

「つつつつつつ!!!」

「これはキミの下着だよね……なんでポケットに……しかもなんかカ
ピカピカしてるし……生臭い……」

「神様、これにはワケが……」

「ちよつと失礼、ベル君。服をめくらせてもら——なんだい、コレは」
「ですから、その」

「ほほお、理由があるならしつかり聞こうじゃないか。下着をカピカ
ピにさせて、かつ見覚えのない替えの下着を履いているというこの状
況について」

「……………」

「ベル君？」

4章 「弱者（サポーター）」 1話 「必要になる物」

*****オラリオ・冒険者ギルドくエントランスく*****

時間は夕方に差し掛かる頃、探索帰りの冒険者がクエストの報告や魔石の換金をしに次々と受付にやってくる。

そして私の担当冒険者であるベル君も、いつも通りならそろそろ帰ってくる頃だ。

どうやら以前の怪物祭モンスターフェアの騒動にも巻き込まれていたみたいだし、彼が無事かどうか毎日ハラハラしながら帰還を待っている。

新種モンスターについての書類を整理していると、ギルド前の人混みの中に見慣れた白髪を発見する。

——今日も無事で良かった……。

「なあなあかあいそおおおおおおおお!!?!?!?!」

彼の探索範囲の報告を聞いた瞬間、私は怒りやら驚愕やら呆れやら色んな感情でごちゃ混ぜになった。

私の叫び声に周囲の視線が一瞬集まるが、私と駆け出しであるベル君を認識すると「ああ、何かへマしたんだな」とすぐに興味を無くしていく。

「君はあーこの前5階層で死にかけたばっかりなのに、なんで7階層まで降りてるの！迂闊にも程があるよ!？」

「で、でも僕……あれから結構成長して、ステータスがいくつか『E』に上がったんですよっエイナさん！」

「はあああ？Eいいいい？……そんなわけ無いでしょ！」

あの時も、私は口酸っぱく言ったつもりなのに。

もしかしたら「鬱陶しい」って嫌われてしまうかもしれないと不安を抱いてまでもお説教したけど……もしかしたら「お仕置き」が足りなかったのかもしれない。

慌てて口から出任せ言うなんて、信頼されてないみたいで少し傷ついてしまう。

これでも彼の成長を見届けている一人なのに、そんなひとつ飛びにステータスが伸びるわけ無いじゃない。

この調子では、また適当な理由をつけて深い階層に行こうとするだろう。

私が彼に死なれる事をどれだけ恐れてるかこの純朴な少年にまた教えてあげる必要があるみたいだ。

「いや、ホントなんですよエイナさん、前の騒動で神様に……」

「嘘言わないの、今回ばかりは見逃せない！こっちに来なさいっ」「ああ、そんなあ……」

彼の手を引いて、いつも使用している個室に連れて行く。

これから起こる事を知らない周りの冒険者は、私が只の説教をするとても思っているのか「ははは、精々絞られてこいボウズ」と冷やかしている。

——まあ、確かに精は絞るわね……。

少し顔が熱くなり、赤いだろう耳をベル君に悟られぬ様に部屋へ押し込んだ。

++++
++++
++++

「嘘……」

ベル君にたつぷり「お仕置き」と称して、散々私の中で絞つてあげた後、全裸の彼に後ろから抱きついていた。

股間からはドロドロとベル君に注いでもらった精液が溢れてくる。今日は結構危ない日だから、避妊用のお薬を事前に膈内へ塗つていなかったらデキていたと思う。

今の私はいつも通り、パンツだけ脱ぎシャツの胸元を開けた格好である。

ベル君はどうやら私の仕事着から覗く胸の谷間にご執心と見えるので、このスタイルでしてあげている。

そして、戯れになんだか逞しくなってきた彼の背筋を舌でなぞっている……。

——ステータスが、伸びている。

その背中に刻まれた神聖文字ヒエログリフを解読して、先程の言葉が真実であることを突きつけられる。

「力と耐久がE、敏捷……D いい!？」

「あう……」

「あつゴメンね、ベル君。痛かったよね……」

「い、いえ……びっくりしただけで、あつあの撫でられるとまた……」

行為後のマッサージとしてペニスをやわやわ握っていた手に思わず力が入ってしまう。

酷使した結果、性欲旺盛なベル君のもすっかりしんなりしてちよつと可愛いかなって思いながら、労るように黒い手袋を脱いだ素手で撫でてあげる。

——ベル君の言うとおり、この短期間で急成長している。私じゃ読めない所もあるけど、アビリティは本物だし……。

つまり私はベル君の言う事を信じてあげられず、頭ごなしに体罰を

まあ、もしかしたらご褒美になつてるかもしれないけどとにかく彼を傷つける真似になつたのは事実だ。

「本当にごめんなさい、担当冒険者を信用できないなんて案内役失格だね」

「そんな、エイナさんにはいつも助けられています！僕が頼りないから、仕方ないんです。あはは……」

「ベル君……」

ああ、こんな健気な少年を傷付けてしまった。

せっかく成長して自信がついたところに私が余計な事をして卑屈にさせてしまうなんて……。

謝罪を込めて優しくペニスを手の平全体で包み込む。

「でも、ベル君。凄いじゃない、こんなに成長するなんて……お詫びとご褒美、あげるね？」

「エイナさん？えっええ!!」

「ふふっベル君、私のこれ結構見てるよね。割と女性は気付いてるんだよっ。」

「——、うあっ」

胸元を思い切り左右に開いて、中にある乳房を露出する。

そして前部分のホックを外して胸の下着を抜き取り、私の胸を隠すものが取っ払われた。

何度も見られるとは言え、こうも先端部分を凝視されると……ああ、また勃っちゃったじゃない。

姿勢を変えて、ソファに横たわるベル君の頭を私の胸元に抱きかか

え身体を膝の上に預けてもらう。

——まるで大きな赤ちやんが出来たみたい。

「普段あんまり触らせてあげてないもんね、今日は吸ったり舐めたりして良いよっ。」

「っ、それは……」

「優しくなら噛んだりしても良いし、ベル君にイジメて欲しいな？」

「——、はい……失礼、します……」

「うん、どうぞ……あっ」

私の勃起した乳首に吸い付くベル君。

最初は遠慮気味に舌でつつく程度だったけど、私が微笑みかけてあげると顔を赤くしながらちゅううつと音が出るくらい吸われる。

胸を愛撫される快感と同時に、母性が湧き出してお腹の奥がじんわりと疼いてくる。

ちゅうちゅうとミルクを求めるように胸を吸う彼の髪を撫でていると、もう片方の手でやんわり握っていた彼のペニスがまた大きくなっていくことに気付いた。

もう、こっちはお母さんの気分だったのにベル君ったらスケベなのね。

しようがないなあ、と彼に視線で伝えようと「仕方ないじゃないですか……」なんて抗議が聞こえそうな涙目でこちらを見上げて再び乳首を強めに吸い始める。

どうしよう、ベル君が愛おしすぎる。

勃起したとはいえ流石に疲れているだろうから、ペニスは抜くといふより5本の指で包み込んで、温めてあげるようにゆつくりと動かす。

おっぱいを吸うのに満足したのか、ベル君が口を離してこちらを見上げてくる。

「あの、それで僕……これからも、7階層で探索しても大丈夫ですよね？」

それが気になっていたのか。

私のおっぱいを吸ってるのにダンジョンの事考えてるなんてちよつと複雑だけど、そんな一生懸命な所も彼の魅力だから仕方ない。

彼の提案に、私は案内役として頭を切り替えて（ベル君のペニスは握ったまま）少し考える。

「確かに、このステータスなら7階層進出を許可しない訳にはいかないけない……」

いくら彼が心配だからといって、いつまでも役不足な探索をさせる事はベル君の成長の邪魔になってしまう。

ベル君を応援すると決めた以上、私を取るべきはやはり彼が無事に戻ってこれる助けをする事。

「そうになると、問題は……」

ふと、私がひん剥いてテーブルに並べてある彼の衣服や鎧を観察する。

一般的なコートに、薄い板金の胸当て。まさに予算不足の駆け出しと言える装備だ。

神様から頂いたというナイフは立派だけど、それに見合う防具が彼にはまだ無い。

想像するのは、ダンジョンの奥深くで出現するモンスターからの猛攻を受けてしまい、真っ赤な血を流す小さな白兔――。

「――ベル君。明日、予定空いてるかな？」

「――？」

おっぱいに頬を埋めながらキョトンと目をパチパチさせるベル君。

「明日、中央広場で待ち合わせしよっか。ベル君とお買い物に行きたい所があるんだあ」

「はあ……僕は大丈夫です。その日は神様も夜まで留守って聞いているので」

「決まりだね。じゃあ今日はもう帰って休んで貰わないと。これも、今楽にしてあげるから……あー、むっ」

「ああっ！」

私はベル君のペニスを喉まで頬張り、上下に頭を振る。

最初は不潔と思っていたこの口での行為も、大分慣れてきて今ではあつという間に彼を気持ちよくさせてあげられるまで上達した。

ほら、もう先っぽがピクピクしてる……。

そしてベル君の小さいうめき声を耳に感じながら、喉に熱くて濃い液体がドクドクと流し込まれる。

最後まで出せるように、陰嚢を指でやわやわと揉んであげて、ぴゅっぴゅっど射精が弱々しくなると同時に硬くて大きかったペニスも口の中で脱力していく。

「っ、はあっエイ、な……きんっ」

「♪くく、ちゅっお疲れ様、ベル君。明日は寝坊せず来るんだよ？」

「……、はい……」

いつだって初心に顔を赤らめる彼は、本当に可愛らしい。守ってあげたくなるし、彼のシたいことを受け止めてあげたくなる。

——そろそろ、良い頃合いなのかもしれないなあ。

前から思っていた、一つの望みを叶えるのに明日という日は丁度いいかもしれない。

みだったの?」

「——、えっあ、お買い物じゃ……?あの、僕は……」

「まあ、実は私も楽しみにしてたんだよねー」

確かに、エイナさんとお出かけするのが楽しみでつい早起きはしちゃったけど、「デート」という直接的な単語で言われると無性に照れてしまう。

——なんだか今日のエイナさん、最初から「個室」に居るみたいだ……。

恥ずかしくて、つい俯いてエイナさんの言葉を聞き流してしまう。

「ベル君の防具なんだけどさ、……——フフツ♪」

「——、!!」

すると、急に接近してきたエイナさん。

一気に吐息が顔にかかる距離まで詰められて、心臓が止まりそうになる。

「ベルくうくん、私のこの格好を見て何か言う事はなあ〜い?」

「ああー、あのっす、すっごく……」

興奮します……じゃない!何を考えてるんだ僕の馬鹿!!

でも耳に息をかけられながら、少し指でめくって開かれる胸の谷間に視線が吸い込まれればそんな事しか思いつかない。

でもそんな事を女性に伝えたら嫌われるに決まってる。

何かないか、何か……凄く、いつもより……——

「わ、若々しく見えます!」

「——、ふーん?私まだ19なのにそういう事言うんだあ、ベル君……」

「い、いえっあのそうじゃなくて、若くて綺麗というか、——!!!!」

「ほらほら♪わかる、ベル君？今日の私のし・た・ぎ♥」

変なことを口走って取り繕うとしてたら、僕の手を取ったエイナさんがおもむろにその手をスカートの中に招き入れた。

白昼堂々と女性の下着を触るなんて狂行に走っている状況に、目玉が飛び出そうになるがエイナさんの指に合わせてそこにあるだろう布の形状をなぞると、疑問が生じる。

——なんか、布が少ない……というかほとんど紐？

「コレはねえ、いつかベル君に見せてあげようと思って南東のお店で買ったすっごいエッチな下着なの。買う時すっごく恥ずかしかったんだからね？」

「ああ……、あのつゆ、ゆるしてください……」

「ほら触ってみて……この真ん中とか、小さいスケスケの布をさらにぱっくり開いちやって、もう隠す気がゼロなデザインなのよ？見た時気を失うかと思ったわ♥」

「!!!」

確かに、エイナさんの言うとおり触った部分は女性の大切な部分を隠す部分な筈なのに……そこにあるべき布は無く、指に触れたのはクチュ、という濡れそぼった感触だった。

何度も見た彼女の聖域が、指に触れていると思うとうっかり中に侵入させようとしてしまう。

しかし、第1関節が入るかと言う所で僕の手はスカートから追い出される。

「んっ♪まだダメ♥我慢しなさいベル君っ」

「ああーご、ごめんなさい!!」

「それにい、今日はね……」

僕を見る目は、今にでも襲ってきそうな熱を伴っていた。

握られた手を次は胸元に運ばれ、むにゆうつとどこまでも沈んでいきそうな感触が届いてきた。

——エイナさん、ブラジャーそっちは付けてすらいないんですね……

彼女自ら僕の手ごと胸を揉むものだから、薄い布越しの感触と少し硬い突起が手の平へダイレクトに伝わる。

「良さそうな宿取ってあるんだ……。お買い物終わったら、そこで休もうね♪」

「……は、い……………」

「あと……………」

「……、？」

「——今日は避妊のお薬、持ってきてないから……………」

「——っっ?!?!」

「よしっ行こっか。こっちこっち♪」

「えええ!?!いや、あのエイナさん!?!今のってあの!!」

——今日エイナさんしたら、子供が出来るかもしれない…………。

彼女のとんでもない言葉でお腹の奥がドクン、と何かが鼓動した気がする。

凄い1日になる、そんな予感がした。

だんだん稼ぎは増えてきたけど、僕が自由に使えるほぼ全財産だ。最低でも数十万ヴァリスの値がつくヘファイストス・ファミリアの商品なんて買えるわけもない。

「良いから行くよお？男の子なんだからグズグズ言わないっ」

「ええ、エイナさあん！」

手に指を絡ませて、元気よく歩き出すエイナさん。

引つ張られながら僕は不安を背負いながらも、柔らかくひんやりとした指の感触にドギマギする。

「やつほーい、ソレいけー♪」

繋いだ手をぶんぶん振って、軽やかな足取りで天まで伸びる塔に向かっていく。

終始、エイナさんは楽しそうだった……。

*****迷宮都市オラリオ〜バベル摩天楼*****

ベル君と手を繋ぎながら昇降機を昇っていたけど、目的の階まで途中でふと思い立って降りてみる。

ここは4階から8階までに存在するヘファイストス・ファミリア支店のうち、下の階みたいだ。

よりダンジョンへ近いこの階にあるのは、1級品ばかりでベル君のお財布にはちよつと厳しいと思うけど、いつかお世話になるかもしれないし、場所や商品のレベルだけでも知っておいてもらおう。

ベル君は降りてから、辺りをキョロキョロして豪華な商品の陳列に驚いてる様子だった。

「知りませんでした。……バベルにこんな店があったなんて」

「お目当ては上の階なんですけど、ここもヘファイストス・ファミリアの

お店だから、ちょっと寄って行こっか」
「……、」

二人で中を歩いている最中、色んな武具を見ていたベル君は1つの商品の前に張り付いてしまった。

その拍子に繋いだ手も離れてしまい、ちょっと寂しくなる。

——、やめとけば良かったかな……なんてね、

「っ、うえええええ?!?!?、3000万ヴァリス?!?!?」

あまりの値段に驚くベル君。未知の金額ではあるかもしれないけど、一級冒険者だとそのくらいは平気で消費していくわよね……と、冷静になってしまう。

大きなアクションをしてくれるベル君を見て微笑ましい気分になっっていると、その品物を扱っているお店のドアが開いた。

そこから現れたのは私が一方的に知識として知っている、女神の支柱だった。

「いらっしやいませー♪今日は何をお探しでしょうか、お客様あ?」

赤を貴重としたメイド服のような制服を身に纏っているのは、「ヘステイア・ファミリア」の主神である女神ヘステイアだった。

——バイトをしているって聞いてたけど、ここで働いてたのかしら。

「えっ」

「——、」

そして、愛想よく接客をしようとしていた神ヘステイアとベル君の視線がパチパチ、と数回ぶつかりようやくお互いを認識してみたみたいだ。

「ベル君!!」「神様!!」

「何やってるんですか、こんな所で!」

どうやら、ベル君には内緒のバイトみたい。

神ヘスティアはベル君よりも低身長だから、まるで仲の良い兄妹の諍いに見えて、つい頬が緩む。

——この方が、ベル君の家族。

「近頃やけに忙しそうだと思ってたら……バイトの掛け持ち!」

「つ……、ベベベベル君こそどうしてココにい、———というか誰だいつこのハーフエルフ君は!!」

気まずそうに視線を泳がせる神ヘスティアの目が私を捉えて、ぷんぷんと抗議をしている。

親の立場である神からすれば、息子が見知らぬ女と歩いてるようなもの。

ここは、しつかり理性ある人物であることを女神には知っていたどころ。

「ああ、そうだ神様。この人が……」

「——初めまして、神ヘスティア。ギルド所属のエイナ・チュールです」

ベル君が紹介するよりも早く、頭を下げて名乗る。

務めて真面目に、受付でベル君以外の冒険者を相手にする時と同じような、職務モードの私で話す。

神に認めてもらうには、しつかりとした誠意を見せなくてはいけない。

「ベル・クラネル氏の迷宮探索アドバイザーを勤めさせて貰っています」

す」

「へえ、キミがあ……」

「――？、はあ……」

自己紹介の内容に問題は無かったはずで、今も私が案内役としてベル君に装備を選ぶ知恵を授けている様に伝わったと思っただけ……。私の奥を見通す様なじとつとした目で神へステイアはこちらを見つめている。

そして内緒話をするように声を潜めて手招きをするので、私は女神の方へ耳を近づけた。

「時に、アドバイザー君？キミは自分の立場を利用して、ベル君に色目を使うなんてこと……してないだろうね？」

「――、っ」

なんと、女神が気にしているのはベル君に女の影を感じていたかららしい。

そしてそこに私服の私が側に居るものだから、そういう関係ではないかと疑っているみたいだ。

そして女神の予想は、見事的中している。

一瞬、公私混同は避けていると誤魔化そうか頭をよぎった。

……だが、私は正直に事実を伝えることにした。

何よりベル君との関係を、彼の大事な人へ否定する事に強い抵抗を感じたから。

「……はい、公私共に『ベル君』にはとても仲良くさせて貰っています」

「んんなっあああ!？」

「えええ!!エイナさん!？」

神へステイアだけじゃなく、ベル君までも驚愕に叫んだ。

ベル君はどうやら隠すと思つてたみたいだけど、親に子との交際を認めてもらうんだもの。お姉さんの私が率先してあげないとね？

後ろめたいことなど、何も無いんだから。

「勿論、今夜も彼と二人きりでたつぷりと仲良くしていこうと思つておりますので、神へステイアには、ひとつ彼をお貸し頂くこと、伝えさせていただきます」

「ちよちよちよちよちよつととおお!!エイナさあああん!!」

私は見開かれた女神の瞳を見つめて、しっかりとこれからの予定も伝える。

彼と誰にも隠すこと無く愛し合う、と。

……にしてもベル君ったら騒ぎ過ぎじゃない？恥ずかしい事言つてるみたいじゃない。

まあ、言ってるんだけどね？

私の言葉の意味を飲み込んだ神へステイアは、俯いてプルプルと震え出す。

黒髪のツインテールがユラユラと蠢いてるけど、あれって動かせるのかな。

「そうかい、そうかい……キミがベル君と……ボクのベル君の、ベル君を……」

「……あの、神様？」

ただならぬ雰囲気を醸し出す女神に、恐る恐るベル君が様子を伺う。

ベル君はたった一人の眷属だろうからまあこうなるかな、とは思つていた。

どうやら年下の恋人を得るのは、一苦労しそうだ。

「……ううう許さあああああんん!!!」

「ぎゃっ」

「ビーンツとツインテールを逆立てて、女神が噴火した。否、憤慨した。」

あまりの大声にびっくりしてしまった。
拳を握り、もう片方の指を渡しに突きつけて女神は捲し立てる。

「キミはどうやら越えてはならない一線を越えたみたいだね！良いだろう、このボク自ら神の鉄槌を……」

「か、神様あ！何言ってるんですか、落ち着いて」

「キミも同罪だあ!!ベル君の浮気者おお!!」

「っうえええ!!」

「あ、あはは……」

どうやら、ヘステイア・ファミリアでは眷属の不純異性交遊に関しては厳しいみたいだ。

そして当人であるベル君にも怒りの矛先は向けられ、断罪が決まったらしい。

でも怒ってる姿が癩癩を起こしてる子供みたいでやはり微笑ましくなってしまう。

兄を取られた妹が、我儘を言ってるみたいで可愛らしい……神に対して不敬とは思うけど。

ベル君が神ヘステイアを宥めようとしている所、女神が出てきた扉からヘファイストス・ファミリアの鍛冶師と見える女性が出てきた。

極東特有の袴姿に、髪を後ろに括っている姿はまさに職人らしい格好である。

「ちよつとーバイト女神様あ、暇ならこっちの陳列手伝って下さーい」
「待ち給え鍛冶師君！ボクはこの淫乱ハーフェルフ君に裁きを下さな
いといけないんだあ!!」

「い、淫乱……」

あまりの言い様に引きつった笑いが出た。

愛しの子供をキズモノ（普通は逆だろうけど）にされて、怒り心頭のご様子である。

鍛冶師の女性は、一瞬こちらを見て「はあああ」と大きめのため息を吐き出す。

「ハイハイ、こんな清纯そうな人に淫乱なんて失礼つすよー。いやあ、すみませんねえこの女神様、ココ来たばかりなもんで」

「はあ……」

「こつちでしつかり言いつけますんで、どうぞごゆっくりご覧になって下さいな」

「ちよつと待つんだ！まだ話は終わってなあああい、終わらせないんだあ!!」

「はい、バイト女神様はこつちねー」

「離せっ離すんだ鍛冶師君!!ベええルくうん!!、帰ったらお仕置きだああああああ!!」

ベル君にとって不吉な捨て台詞を叫びながら、女神は店内に連行されていった。

なんとというか、とても愉快的な神だと思った。

あれがベル君の明るさの源になっているのかもしれない。

騒がしかった通路はシンと静まり、再び私とベル君だけになる。

いい加減、目的の場所に向かった方が良さそうだ。

「……上、行こっか」

「……はっ」

+++++

「変わった神様、だね？」

「……………」

一悶着あつてから、私とベル君はさらに上の階へ昇っていた。

神様の話題を振ると恥ずかしいのか、気まずそうに笑っていた。

「はい、到着」

そうして、目的地である階に到着した。

そこは先程の上級鍛冶師ハイ・スマミスが手掛ける商店とは違い、雑多な印象を受ける。

全体的に薄暗く、所狭しと鍛冶師達が自分の作った作品を並べては、やってくる冒険者達に売り込んでいる。

「ベル君は、ヘファイストス・ファミリアみたいな高級ブランド、『自分には縁がない物』って思ってるでしょ？」

「……………はい……………」

「実は、そうでもないんだなあ」

ベル君はとても謙虚な子だ。そこが魅力でもあるが、上を見上げるばかりで視野が狭くなっている。

私は彼に新しい知識を教えてあげるのが楽しくて、鼻歌交じりに先を歩く。

そして、彼の得物であるナイフが置かれている場所で止まった。

ベル君へ、その値段を見るよう促す。そこにあるのは「1200ヴァリス」の文字。

「ほら、見てみて」

「あ、あれ……………、そんなに高くない？」

「♪、驚いた？」

彼のお財布事情は何となく察している。

きつと数万ヴァリスの装備も十分に買えないのだろうが、そこは駆け出し冒険者なのだからしょうがない。

だがここにあるのは、そんな彼が1日で稼げる程度の金額が載っている。

「ここにあるのは、新米の鍛冶師の作品だからねえ。安くても実際に売られて評価を受けることが、駆け出しの彼等にはプラスになるの」

そう、駆け出しで困っているのは冒険者だけではない。

鍛冶師にとって、その冒険者達に商品売り込むきつかけが欲しいのもまた事実なのだ。

いくら高い品質を誇っても、それを知るための評判が無ければ誰も手に取らないのだから。

「中には掘り出し物もあつたりするんだよお?……さ、行こ♪」

ベル君と共に、武器や防具が更に陳列されてる方へ進む。

様々な剣や槍、ナイフや盾が並んでおり、それぞれには銘を入れられない代わりに製作者の名前が入ったプレートがかかっている。

「——、へえ……——ははっ」

「…………ふふっ」

まるで玩具屋にやってきた子供の様に目をキラキラさせるベル君。隣りにいる私も、デートというより引率のお姉さんな気分になつてつい一緒に笑ってしまう。

「奥の方も見てきますねっ」

「ああ、ベル君っ」

もう待ちきれない、という顔をして元気に走り去ってしまった。
どこか甘い最初の空気は飛んでしまったな、という残念な思いと彼
を楽しませることに成功して良かったと安心している自分がいる。
恋人気分でのお買い物は、どうやらまたの機会になりそうだ。

「――、もお……」

では私も、あの無鉄砲な所がある男の子が怪我をしないようなお手
頃の防具を探すとしよう。

++++++
++++++
++++++

バベルに武器商店がある事自体初めて知ったのに、さらにその上に
こんな所もあるなんて……。

ここに並んであるものは、確かに先程みた超一級品には及ばないか
もしれない。

だがどれも十分自分には価値のある品で、しかも値段が僕でも手が
出せる範囲だ。

「わあ……。へえ……。――、っ?」

見てるだけで楽しい。

見ると防具も安い値段で提供されているみたいだ。

色々な商品を見て回っていると、箱から見える白い防具が目にと
まった。

「――、――……」

手に取ると、まず感じたのはその軽さだった。

そして、薄そうにも見えるその材質は恐らく「メタル・ラビット」の素材を使用したのだろう。

軽く、そして硬い。素早くダンジョンを駆ける兎モンスター動きを阻害しないように、ある程度のしなやかさもあった。

白い輝きに、赤いラインが刻まれたデザインに、何か愛着が湧いていく。

胸当ての裏側を覗くと、そこに製作者のサインがあった。

「ヴェルフ・クロツゾ」……」

それが、その白き鎧【兎鎧MK-II】を造った者の名だった。

「値段は、と……」——つげ?! 9900ヴァリス……」

——手持ちほぼ全部……でも、

と悩んでいた所で、不意に視界が塞がって柔らかい感触が瞼を覆う。

「だ〜れだ♪」

「え、あのつエイナさん、前が見えない……」

「はい、正解つご褒美のキスだよ?——んっ……」

視界が開放され、両手で顔を引き寄せられた先にはエイナさんの笑顔が目の前にあった。

かぶり付くように唇を奪われるが、ここが商店の中であることに羞恥心が勝ってすぐに顔を離す。

「ぶはっだ、誰かに見られちゃいますって!」

「大丈夫♪この辺りは今、私達しかいないよ。もう一回する?」

「そ、それは……じゃなくて!」

キスが嫌では無く、むしろ心地よいと感想を述べてしまいそうになる。

気を抜くと毎回すぐエイナさんのペースに乗せられてしまう。

「ふふっ♪ゴメンゴメン。ベル君、あつちに良いの見つけた、……あれ？」

「——っエイナさん、僕これにしますー！」

僕は、話題を変えるため手に持っていた兎鎧MK-IIの胸当てをエイナさんに見せる。

すぐにエイナさんは、この防具の性能をおおかた察し、ため息をついた。

「はあ……ベル君ってほんつと軽装が好きなんだねえ」

「す、すいません……」

僕の長所はこの敏捷あしのため、それを殺す鈍重な防具はあまり装備したくない。

エイナさんが僕の防御力を心配するのはわかるけど、どうしてもこれに関しては中々変われそうにない。

「良いよ、ベル君が使うんだもんね。キミが『コレ』って決めたんなら、それで良いと思う」

「——、ありがとうございますー！」

「で、明日もダンジョンに行くの？」

「はい!!」

「出来れば、パーティも組んで欲しいんだけどねえ……せめて、サポーターを雇うとか」

サポーター、アイテムの運搬や魔石の回収などダンジョン探索の補助をしてくれる人達の事だ。

「サポーター、ですか」
「うん。何かと効率も上がると思うよ？君がその気なら探してみるけど」

確かに最近の稼ぎであればサポーターを雇う余裕もあるし、むしろ戦闘に専念することで効率はエイナさんの言うとおりに上がるはずだ。だが、今まで仲間と一緒に探索など経験が無いので、不安もまだある。

「……ちよつと、考えてみます」

エイナさんに入った宿は宿泊から休憩まで幅広く対応しているそれなりの値段がする宿だった。

利用代金は前払いで、僕も払うと言ったのだが「今度、ベル君が連れてきてくれた時にね」とウインクされやんわりと断られてしまった。

渡された鍵と同じ番号の部屋まで、手を繋いで入ったが僕達は途中から無言だった。

そしてダブルサイズのベッドに寄り添って座り、繋いだ手だけがトクントクンと音を刻んでいた。

「――、じゃあ……しよっか」

小首をかしげ、沈黙を破ったのはエイナさんだった。

ぎゅっと握られる指の感触が、なんだかこそばゆい。

「……は、はい……あの、宜しく願います……」

「……こちらこそ……」

初めてエイナさんと繋がった時を思い出し、顔が熱くなるのを感じながら俯いてしまう。

つられてなのか、エイナさんの顔も尖った耳まで真っ赤だ。

「うふふ、なんか変だね。もう何回もシてるのに」

「うう……」

「もうつベル君が恥ずかしがるから、私がいやらしい女みたいじゃない」

そう、エイナさんとうとういった事に及ぶのはもう何度もあった。

でも慣れるかどうかは別問題で、どうしても恥ずかしくなってしまう。

求めてもらう嬉しさ、綺麗な女性に甘えなくなる欲求、そんな節操のない自分への羞恥がごちゃごちゃになる。

「そんな事思ってますよお！」

「ええー、……でも、ベル君。私なんか押し倒してくるか説教するかの女で鬱陶しくないの？」

「そ、そんなつエイナさんは……僕にとって……」

どれだけ僕がエイナさんに助けられていることか。

必死に伝えようとする僕を、エイナさんは微笑ましい物を見る目で優しく見つめてくる。

「なあに？」

「え、えつと……」

僕は、正直にいつも思っていることを溢し始める。

「いつも、僕みたいな頼りない冒険者に親身になって接してくれて……エイナさんのアドバイスが無ければ危なかった日はたくさんありました……」

「そうだよお。私がどれだけ心臓に悪い日を送っていることか、反省しなさいっ」

「あうっ」

途中で小突かれてしまった。

でも、伝えたいことはまだその先にある。

「……でも、今日だつて僕がダンジョンで無事に探索できる知恵を覚えてもらえました。バベルの新人鍛冶師の売り物なんて、僕一人じゃ辿りつきませんでした。——、エイナさんには感謝してばかりです」
「ふふ、どういたしまして」

「僕、これからもエイナさんに案内役……お願いしたいです」

「……うん、任せて。ベル君が立派な冒険者になる、手助け……私も、してあげたいな」

唇が触れるか触れないかぐらいの距離まで顔が近づき、お互いの息遣いが伝わる。

「ベル君……」

エイナさんの長い睫毛の奥でグリーンの瞳が潤んでいる。

固く握られていたお互いの手は、段々僕達の身体を触り合う動きになる。

「……脱がせて欲しいな。その為に……今日着る服、選んだんだよっ」

「っ——、エイ、ナさん……その、失礼します……」

少し躊躇するが、ゆっくりとエイナさんのブラウス、そしてその中にある下着に直面する。

薄紫の下着は、朝触った感触の通り大事な部分の布が無く、全体的に透けている。

たわわな胸の膨らみの先端にある、ピンクの突起と股間の茂みや少し唇が開いた秘裂も全て見えてしまっている。

「どう、かな……やっぱおかしいよね、その下着……」

「いえっその……凄く綺麗です!」

「ありがとう、でもその言葉は待ち合わせの時に聞きたかったなあ」

「——、すつすいません……」

エイナさんに苦笑いをされてしまった。

だが少しくだけた雰囲気が出たおかげで、緊張が解れる。

すると、一つ大事なことを思い出した。

「あ、あのっエイナさん……いつも、その……エイナさんって……」

「うん?——ああ、今日は避妊してないよ?」

「そ、それなら……」

「いつも思ってたんだあ。君がくれるモノを薬で拒むなんて、なんか嫌だなんて」

「……エイナさん」

全てを受け止めてくれそうな笑顔のエイナさん。

僕の顔を両手で包み込んで、彼女は僕に優しく語りかける。

「ベル君、——私ね、産むなら君との子供が良いな。……駄目?」

「……っ、——」

真剣な想いが目から伝わる。

——僕との子供、エイナさんとの……

「僕……こんな事考えていたら嫌われるって思ってた……黙ってた」

「……なあに？」

「エイナさんに、僕の子供……産んでもらいたいです」

「——」

エイナさんの目に溜まった涙が一筋、頬を伝う。

温かい涙を流しながら、彼女は満面の笑顔を見せた。

「——うん、良いよ。私の子宮も、ベル君のモノにして欲しいな」

「っエイナさん！」

覆いかぶさるように抱きつき、エイナさんの胸に顔を埋める。

柔らかい肌の中で甘い匂いを吸いながら、小さい子供のように甘える。

「きやつ慌てないで……私は逃げたりしないよ？」

「す、すいませんっ」

つい慌てる気持ちを抑えて、僕は姿勢を正す。

そして、痛いほど腫れ上がってる僕の性器を、エイナさんの入り口に宛がう。

だが、狭い穴がどこにあるのか伝わってくる感触ではわからず、ニユルツと滑ってしまう。

「そういうえっいつも私から挿れてたもんね。……うん、そこだよ。きて……」

エイナさんが僕のモノをそつと触り、正しい場所へと導いてくれた。

ぐにゆつと一回侵入を始めれば、どんどん奥まで進み一気に根本まで迎え入れられた。

エイナさんの中で包まれ、先端に当たる感触が子宮口なのだと思うと更に胸が高鳴った。

「んっ今日は一段と、大きいね……それに硬い……」

回された手がスリスリと背中を擦る。

正常位で繋がった僕は、エイナさんの胸に舌を這わせながら腰を振った。

いつもエイナさんが乗ってするように、今は僕が自分自身を彼女にぶつけていた。

「あつあ、凄い！ベル君、私の中つベル君でいっぱい！」

ぎゅうぎゅうに締まる膣肉。

じゅぶじゅぶと溢れる泉を掻き出しながら、エイナさんの中をひたすら擦る。

「んあつあああ!!あ、あつああん!どうしよう、私っ本当にい、いやらしい女にされちゃうよっベルくん!」

普段、真面目にアドバイスをくれたり、時には厳しく叱るエイナさんが今、僕に貫かれて舌をだらしなく垂らしながら喘いでいる。

そんな僕しか知らない淫らなエイナさんを見てると熱い気持ち湧いて、尖った耳の中に舌を差し込み優しく囁いた。

「エイナさん……、『大好き』です……」

「——っ!!あ、なんで、今っ——!!」

すると、目を見開いたエイナさんは僕の頭を抱きしめて、腰には長い足がしがみつくように絡んだ。

声にならない叫びを上げながら、彼女の中がぎゅうぎゅうと一層締め付けてきた。

「あつうそーやだやだ、……ゴメン、ベル君！私もう——！！」

きつと、滅多に見せないエイナさんが「達する」所なのかもしれない。い。

彼女の奥を擦りながら、ピンと勃った乳首を思い切り吸う。

「あああああああ！！」

そして、エイナさんは全身で僕にしがみつき、獣のように吠えた。プシッと温かい液体が股間にかけても、少し入り口が降りてきたように感じる子宮口へ先端をグリグリ押し付ける。

エイナさんの息が落ち着くまで、繋がりながらそうしているとじつとりとした半目で睨んでいる彼女と目が合った。

「もう、ベル君ったら。そういうのはここぞという時に使うのっ安売り禁止ー！」

「う、すみません……」

「それにベル君はまだでしょ、好きだけ出してね……？」

「エイナさん、僕っ……！ー！」

今度は両手を恋人のように絡ませて、目を合わせながら腰を振る。痛みを感じるかもしれない強さでエイナさんの腰へ叩きつけて、パンッパンと音が響く。

「あつああ！！激しい、ベル君！」

「エイナさん、エイナさん！もう僕、我慢がっ」

歯を食いしばって、出来るだけエイナさんの中を擦れるように射精を我慢していたがそろそろ限界だ。

「貴方の中に出したい」と目だけで訴える。

「我慢しないで、出して！ベル君の熱いので、妊娠させて！キミので受精したいの!!」

「っ、——!!」

「——!!あああああ!!」

最後の瞬間、エイナさんの胸の谷間に倒れ込み、むせ返るような女性の匂いに包まれながら射精した。

まるで睾丸が脈動してるのかと思うくらいに彼女の奥まで注がれていく。

「ああ……すごいよ……あついい、ドクンドクンって言ってるね……」

「すいません、まだ……」

「ふふ♪良いよ、全部出していいってね？」

結局、射精が収まったのはそこから少し経ってからだった。

その間はずっと抱き合いながらキスをし続けて、離れた瞬間に結合部から大量にごぼつと白い液体が溢れる。

「わ、たくさん出したねえ。ドロっとして、なんか溶き卵みたいだよ。ベル君」

「は、恥ずかしいですよ……」

指でこぼれた精液を弄ぶように見せられると粗相を見られた気分になって恥ずかしい。

口に運びながら、穏やかな表情になったエイナさんは僕の胸板に頭

を預けながらぽつぽつと呟いた。

「あのね、ベル君。ハーフエルフって、純血の妖精^{エルフ}ほどじゃないけど……子供が、出来にくいんだよね」

「……エイナさん？」

「——だから、ね」

少し照れ臭そうに彼女は僕のモノを撫でながら、

「ここにあるベル君なので、今日確実に当ててくれないかな……？」

「——、!!エイナさんっ」

「あん♪待ってまださっきの余韻が……あああ！大きいよお!!」

「エイナさん、頑張ります！僕の子供、産んで下さい!!」

「うあ、うん！お願いっキミの子供、ああん!!っ、産ませて！私の子宮っ全部、ベル君が奪ってえ!!」

夢中になって腰を振る。

お互いの汁でドロドロになっても構わずに絡み合った。

エイナさんの中へ何度も欲望を吐き出していると、いつの間にか僕の意識は白く濁っていった。

——そこは、白い世界だった。

浮いてるような感覚で、事実僕の意識は浮遊している。

目の前には、産まれたままの姿のエイナさんも居た。

彼女もふわふわと浮かびながら、幸せそうに微笑んでいる。

ふと、いつの間にか僕は何かを抱えていた。

白い、兎。

それは雪のように真っ白な子兎だった。

子兎は僕の手元から離れ、漂うようにエイナさんの所へ辿り着く。

優しくそんな笑顔でエイナさんは、両手を広げて子兎を抱き締める。

一瞬柔らかな光が子兎を包み、そのままエイナさんのお腹へ吸い込まれていった。

愛おしそうに兎が沈んでいったお腹を擦るエイナさんの笑顔を最後に、僕の意識は途切れていく。

+++++

「——ル君、ベル君？寝ちやった？」

「っ、エイナさん……」

「あ、起きた起きた。疲れちやったのかな、お疲れ様ベル君♪」

「あの、僕どれくらい……」

どうやら、寝てしまったみたいだ。

エイナさんに抱き締められながら、まさか寝たまま彼女を放置してしまっただかと少し焦る。

「うーん、最後にシてから10分くらいかな？急にベル君、眠っちゃってたよ」

「そ、そうですか……す、すみません、こんな乗っかっただまなんて、

「重いですよね！」

「ううん、ベル君と繋がったまま重みを感じてたから……支配されちゃったな、って思えて……嬉しかったよ」

「そういうもの、ですか……」

「そ♪もう流石にベル君のも、お疲れみたいだしね？私もあんなにされて、腰立たないや」

「ううっ……」

何度もエイナさんの中を擦り続けたモノは、くたくたになり硬さは失っている。

柔らかいまま彼女の瞳にあやされている状態に気まずさを感じた。

「――、そうだ。よいしょ、と……ベル君、はいこれ」

「?……、これって……」

エイナさんは上体だけを起こして、布に包まれた何かを取り出した。

それは腕に装着するタイプのサポータ。

盾と用途を同じくする防具で、軽く動きも阻害しなさそうだ。

色が彼女の瞳と同じ、緑玉石色をしている。

「私からのプレゼント♪ちゃんとして、使ってあげてね？」

「ええ!?そ、そんな……貰えませんか」

「――、貰って欲しいな……私じゃなくて、君自身のために」

「……え、？」

これだって、きつと数千ヴァリスする筈なのに軽い気持ちで受け取る事は出来ない。

だが、エイナさんは哀しそうに目を伏せてしまった。

「本当にさ……冒険者は、いつ死ぬかわからないんだあ……。戻って

来なかった冒険者を、たくさん知ってる」

「……、」

僕が冒険者になる前から、エイナさんは他の冒険者を見届けていて、その中の「結末」も知っているのだろう。

「居なくならないで欲しいなあ……ベル君には。——ベル君、だけに」

このグリーン・サポータは、そんな彼女の気持ちなのだろう。ダンジョンへ共に着いては行けない者の、せめてもの想い。

「あはは！これじゃあやっぱり、私のためかな？」

そんな健気な応援を誤魔化すように笑うエイナさん。

「それに、頑張ってる君を見て……力になってあげたいなあって思ってたんだよ」

——僕は何度だってこの笑顔に背中を押されていたんだ。

「だから……ね、受け取って……？——ンツ……」

「——、——」

だんだん顔が近づき、啄むようなキス。

もはや恋人としか思えないやりとりに、僕達は二人して真っ赤になる。

これが、今の僕らの関係だ。

照れ合いながら愛を育み、無茶をする僕の背中を押してくれるエイナさん。

「っ、……ありがとうございます、ごぞいます……」
「ど、どういたしまして……」

「あの、本当に……子供……」
「……うん、産むよ。ベル君との、赤ちゃん」

何の問題も無いと笑うエイナさん。
本当に、彼女は身籠った時迷わず僕の子供を産むのだろう。
お腹を擦りながら、慈愛を含む目でそこにある存在に意識を向けて
いる。

「なんとなくだけどね、もうここに君との子がね……居る気がするの」
「……、」
「えへへ、気が早いよね……一回避妊しなかったただけなのに」
「……いえ、僕も実はそんな気がして……っあ」
「うん？……ふふっ」

何となく、僕もそんな予感がした。
エイナさんとの子供。

大人のお姉さんが、僕の遺伝子を分けた子供でお腹を大きくする
……。
——あ、まずい……。

「大きく、なっちゃったね？」
「す、すみません……」
「私が妊娠したかも、って想像で興奮しちゃったの？もう、ベル君は
エッチだねえ」
「ぐううう、!!」

凶星だった。

いつもは頼るばかりだった女性を妊娠させたのが僕だなんて、変な征服感が込み上げてしまう。

エイナさんは前髪を耳にかけて、再び大きくなっていく股間に顔を寄せていく。

「じつとしてて？こっちはまだヒリヒリするから、飲んで……あげるね」

「はあっ……エイナさん……」

「あむ、じゆるっ……またこんなにカチカチ、男の子だね……じゅ、んむっ」

口を下品に凹ませて、卑猥な音を立てて顔を振る。

搾り取るような動きに、僕はあっという間に限界を迎えてしまう。

結局、エイナさんには叶わないあと天井を見上げながら独りごちた。

「ん、んくっ、んむ……んっんく……」

柔らかいエイナさんの髪を指で掬いながら、彼女の喉へ射精をする。

粘りけのあるそれを嫌がらずに嚙下する音を聞きながら、僕は窓から見える空が朱みを帯びているのを眺めていた。

3話 「忍び寄る協力者」

++++
++++
++++

時刻は夕方。もうすぐ日が暮れる。

私こと「リユー・リオン」は食材の補充として買い出しの帰り道だった。

いつもの路地を歩いていると、階段の先で何やら騒ぎが聞こえてくる。

「このつ糞小人族があ!!」

「っ、ー!」

聞こえてきたのは怒鳴り声と金属音。

刃と刃がぶつかり合う、戦いの音だった。

私は気配を消して、踊り場の影から様子を伺う。

「ぐっ——、なんだテメエ。そいつの仲間か」

「ち、違……初対面です」

そこに居たのは、髪を後ろに括っている冒険者の男。得物はショート・ソード片手剣が一振り。

そして相對するのは私の親友であるシルの想い人、クラネルさんだった。

因縁を付けているのは明らかに男の方で、クラネルさんは距離を離すと低姿勢で相手を落ち着かせようとしている。

——あれでは相手が付け上がりませぬ。

「……じゃあ何で庇う?」

「…………えっ?」

私を感じた気配は3人だったが、どうにもやり取りをしているのは彼等二人だけ。

どこかに潜んでいるのか……でもその前に払わねばならぬ事がある様だ。

「…………お、女の子だから?」

「ああ!?何言ってるんだ糞ガキ!!」

「——止めなさい」

男が剣を抜いた所で静止をかけた。

くだらぬ怒りで彼に武器を抜くなど、器が知れている。

出で立ちからも、下級冒険者の中でも良くて中層一步手前の実力が良い所だろうか。

買い物袋を片手にとるのは些か格好が付かないですが、武器を収めてもらう分には問題ない。

「はあ……、街中で剣を交えるなど、穏やかではありませんね」

クラネルさんは少し安堵した様な空気を出している。

そのあどけない顔には可愛げも感じるが、この様な男には増長させるきつかけにしかない。

案の定、例の男は一瞬私の容姿を見て怯むが、所詮酒場の店員に過ぎないと侮られている様だ。

——多少、脅してしまおうしか無さそうですね。

「ああ?口出しすんじゃないねえ。とつとと失せろこの……」

「——吠えるな」

「っ!」

低俗な言葉で耳を穢される前に、一喝して男を黙らせる。

大方妖精^{エルフ}への誹りか、「豊穰の女主人」への罵倒でも吐こうとしていたのでしょうか。

私は下らぬ癩癩に交わす言葉など、持ち合わせていないのだから。

「手荒な真似はしたくありません。——私はいつもあり過ぎてしま
う」

「——っ、クソ……」

少し威圧した辺りで男も分が悪いと判断したのか踵を返す。

見えなくなるまでその背を見送り、下で緊張から開放されたため息を溢すクラネルさんへ歩み寄る。

「……はあ、ありがとうございます。助かりました、リユーさん」

「いえ、差し出がましい真似を……」

そういえば、彼の前で冒険者としての空気を出すのは初めてだった。

あの程度で大人気なかつたと今更に気まづくなってしまふ。

クラネルさんに向けられた剣を見て、私もどうやら焦りが出てしまったのかもしれない。

「あ、そうだ……あの子は、——あれ、居ない……?」

「——、……」

クラネルさんは後ろを振り返り、誰かを探す素振りを見せる。

奥の物陰に別の気配を感じた私はそちらへ視線を移すが、もう気配は消えていた。

——妙な事になっているのかもしれないね……。

「怖くて、逃げちゃったのかな……」

私が怪しい者を探しても良いが、確証もない上に今からでは夜陰も邪魔して時間がかかる。

それに、彼も小さい子供ではない。

あまり私のような日陰者が迂闊に手助けをする必要は無いだろう。

「……貴方が怪我をしたら、シルが悲しみます。気を付けて下さい」

「あ、あ……ハイッ」

「では、私はこれで」

「本当に、ありがとうございました！」

背中に彼の素直な謝辞を感じながら、私もその場を去る。

……シルは良い男性に巡り会えましたね。

*****とある教会へ『ヘステイア・ファミリア』ホーム

「——よしっ」

今朝も探索に出かけるため、朝早くに起きて準備をしていた。

昨日購入した兎鎧MK-IIを身に纏い、左腕にエイナさんから貰ったグリーン・サポータを装着する。

姿見に映る自分を確認しながら、感触を確かめる。

守って貰っているような安心感に、早く探索へ向かいたくなる衝動に突き動かされそうだ。

「神様、じゃあ行ってきますね！」

「ふゆう……いつてらっひゃあい……ふみゆ……」

まだ神様は目覚めるには辛いらしく、ベッドでもぞもぞしながら返事が戻ってきた。

昨日も結局遅くまでバイトがあつたらしく、帰って来てもすぐ寝てしまった様だ。

……神様を楽させるためにも、頑張らないと。

*****迷宮都市オラリオく中央広場く*****

*

朝靄がかかる中央広場、そしてそこにそびえ立つ摩^バ天^{ベル}楼の正面で僕は少し立ち止まった。

僕の他にもこれから探索に向かう為、バベルに赴く冒険者達。

そしてその傍らに、巨大なバックパックを背負って随伴する人達が目に入った。

「サポーター、か……」

「お兄さん、お兄さんっ白い髪のお兄さん！」

真後ろからかかる声が、僕を呼んでいるのだと振り返ればそこには巨大なバックパックを背負った少女がこちらを見上げていた。

フードを被っていて雰囲気少し違う気がするけど、その容姿には見覚えがあつた。

「初めまして、お兄さん！突然ですが、サポーターを探していませんか？」

「あ、あれ？君は確か……」

顔をよく見てみるけど、やはり記憶にある少女と合致する。

昨日、冒険者の男性に斬られそうになっていた少女と同じ顔をして

いた。

だがあの時の怯えたような表情と違い、とても明るい雰囲気にならず戸惑ってしまおう。

「……？、混乱してるんですかあ？でも今の状況は簡単ですよ。冒険者さんのお溢れに預かりたい貧乏なサポーターが、自分を売り込みに来ているんですっ」

「っ、そうじゃなくて……君昨日の、小人族の女の子だよな？」

「小人族？……リリは獣人——シァンスローブ犬人なんですが？」

だが彼女は徐ろに頭のフードを外して、その栗毛の上に昨日は無かった2つの耳をピヨコン、と動かした。思わずその耳を触るが、柔らかい毛並みや暖かき、そして反応してぴよこぴよこと動くそれは本物の耳だった。

「本当だ、小人族じゃない……」

「ふああんっ……はわわあ、お兄さあんっ」

「あつゴメン！つい……人違いだったみたい」

他人の空似というやつかもしれない。

いくら僕でも、小人族と犬人は見間違えるとは思えないし。

落ち着いて話をするために、広場の噴水の縁へ二人で腰掛けていた。

「えつと……それでリリルカさんはどうして僕に声を？」

「はい。見たところお一人のようでしたし、冒険者さん自らバックパックを背負っていらっしやっただので恐らくは……、と」

「あ、……」

それで僕がサポーターを探しているんじゃないかと予想したのか。僕もサポーターが居ればもつと探索が捗るかもと周りをキョロキョロしていたし、いつも一人で荷物も全部持参だった。

「それでどうですかお兄さんっサポーターは要りませんか？」

「えっとそれが……出来るなら欲しいかな、と丁度思ってた所で——」
「本当ですかあ！なら、リリを連れて行ってくれませんか!?お兄さんっ……リリは貧乏で、手持ちのお金も心許なくて……」

食い気味で来られたので呆気にとられる。

そして今度は俯き気味に身の上のを語り始めてしまう。

コロコロと表情が変わる、感情豊かな女の子なんだなあと感じた。

「それに、男性の方に……リリの大切な物をあんなにされてしまうなんて……思わず気持ちよくて濡れてしまっ、じゃなくて！責任を取って貰わないといけませんね？」

「——、っ!!」

僕はリルカさんの耳を触っただけなんだけど、彼女の言い方だと何かとんでもない事をした気持ちになる。

まるで女性の純潔を奪ってしまったみたいで、顔が熱い。

断る理由も無い上に、非礼をした詫びも兼ねて僕は彼女の申し出を受けることにした。

「わ、わかりました……それじゃあひとまず今日一日、サポーターをお願いします」

「——、ありがとうございますー!」

そうして両手を握り込みとても嬉しそうに笑う彼女を見ると、頼んで良かったのかもしれない。

*****ダンジョン上層*****

「——はあっ！」

「ベル様お強い！」

【キラー・アント】の群れを難なく討伐するベルという白髪の男性。

私こと【リリルカ・アーデ】はまんまと彼のサポーターとして同行する事に成功し、「チャンス」を伺っていた。

今朝まで私の事を覚えてはいたみたいだが、やはりこの人も私の魔法【シンダー・エラ】を見破ることは出来なかったみたいだ。

「はあ……リリが居てくれるおかげで、戦闘に専念できて助かるよ」

「いえいえ、これだけのモンスターをぜえーんぶ一人で倒してしまつたベル様の方が、ずうーつと凄いです！」

適当に彼を褒めちぎって機嫌を取る。

だが実際これは事実でもあり、彼はその頼り無さそうな雰囲気とは裏腹に手慣れた動きを見せていた。

私の見立てでは、7階層程度ならソロで全く問題無い程の実力と捉えていた。

そして、私が最も気になるのは——

「まあ、ベル様のお強さは武器による所も確かにあるのでしょうか」

「ああ、やっぱりそうだね……僕もちよつとこのナイフに頼り過ぎかなって」

冒険者の癖に謙虚に言う彼が持つ漆黒のナイフ。

その刃が放つ輝きは上級冒険者が持つ物、あるいはそれ以上の「剣気」を放っていた。

モンスターをあれほど屠つてもなお刃毀れ一つしない業物。

だが、なぜ彼のような下級冒険者がそんな身の丈に合わない物を持っているのだろうか。

「……ベル様、そのナイフはどの様に手に入れたのですか？」

「あ、ああ……僕のファミリアの神様に頂いたんだ」

成る程、主神が相当な親馬鹿らしい。

だが神縁りの品であるの異様な武器……恐らく「ヘファイストス・ファミリア」が仕上げた武器だろう。

——数千万ヴァリスは下らない……!!

私は興奮が彼に伝わらない様に、地面に散らばる魔石を拾い始める。

「……そういえば、リリは？どこのファミリアに所属してるの？」

「——はい、ソーマ・ファミリアに」

「へえ……そうなんだ」

務めて冷静に返答する。

見るからに世間の黒い部分知らなそうな少年だ。反応からしてウチのファミリアがどれだけ下らない集団かも聞いてなさそうだ。

どうせ後で知られても、二度と彼に会うことなど無いだろうから……。

「それよりベル様、『コイツ』の魔石も取っちゃいませんか？胴の浅い所にあると思います。落ちてるのはリリが回収しときますから、今日はソレであがりませよ♪」

「あ、うん」

何の疑いもなしに渡したナイフを受け取り、壁から生えた状態のキラアントの亡骸に向かう彼。

私が渡した物は、特殊な樹脂を塗って切れ味が最低レベルに落ちて

いるナマクラだ。

案の定彼は「あ、あれ？」とマヌケに眩きながら、無防備に腰のナイフを晒している。
今なら、誰かに奪われても気が付きやしないだろう。

——、ごめんなさいベル様。これからはお人好しなものも大概にした方が良いでしょう？

*****迷宮都市オラリオく冒険者ギルドく*****

「うーん……ソーマ・ファミリアのサポーターかあ」

「何か、あるんですか？」

僕はリリと別れた後、エイナさんに探索の報告をしに行った。

ダンジョンから戻るとリリは、今回の報酬の中で2割程度しか貰っていなかった。

「今日はお試しということ、これで十分です」なんて言って、少しの稼ぎを受け取ってそのままどこかへ走っていった。

あれだけ助けてもらったのに、なんだか悪いなあ。

「彼等は探索が中心のファミリアで、少しだけお酒も売ってるの。そこまでは普通なんだけど……」

少し不安そうにエイナさんが語っている。

エイナさんはギルド職員だから、殆どのファミリアの事に詳しい。

「みんなどこか必死なんだよねえ、死に物狂いつていうか。……それより、ベル君から見てもどうなの？そのリルルカさんっていう子は」「はいつつも良い子でした！おかげで今日はたくさん稼げたんですっ」

リリのファミリアに対して、あまり良い印象は無いみたいだ。

なら彼女だけでもエイナさんに良い子だと知って貰いたくて、彼女の助力が大きかったことを伝える。

実際、今日はいつてもより多く稼げたのだからリリが居てくれて感謝している。

「そっか。だったら私は反対しないよ？……それに、その子も狙ってるんでしょ？」

「……ええっ？」

「だってほら、また私の中で大きくして……スケベねベル君♪」

例の如く、僕はギルドの個室でエイナさんと繋がっている最中だった。

数回ほど彼女の中で果てて、膣の中はドロドロだ。

既に結合部から入り切らない精液がごぼっと溢れ、泡を立てながら淫臭を放っている。

「よおし、じゃありルルカさんに出す分が無くなるくらい、私が絞っちゃうね？」

「そ、そんなあもう無理ですよお」

「こんなにおつきくして、嘘付かないのっああん♪硬あい……ちやーんと、妊娠させてね？」

「あうう……」

その後、エイナさんのお尻や口も合わせて何度も絞られる。

僕が乱れた服を直す頃には、もう夕方になっていた。

「とにかく、後はベル君次第。最後は君が決めないとね」

「ありがとうございます！それじゃっ」

「――、ベル君？」

「っ、はい？」

僕はエントランスで見送ってくれるエイナさんに別れを告げて、ホームに帰ろうと思っていたら呼び止められた。

何か忘れ物でもしただろうか、エイナさんは僕の腰元を凝視している。

「ナイフは、どうしたの？」

「え、……あ、あれっ？あれ、あれ!？」

何の事かと思い、腰に手を回すが在るべきものが無い。いくら弄つても僕の腰元には、何も無かった。

血の気が引いていく。きつと青褪めている事だろう。

「お、落としたああああああああ!？」

*****迷宮都市オラリオく西の路地く*****

*

今日も私は、親友のシルと共に買い出しの帰り道だった。

「豊穡の女主人」へ向かう途中、路地の向こうから一つの小さな人影が向かって来ている。

フードを目深に被り、俯いて気配を消し歩く姿は背丈からして小人族だろう。

特段気にする様な相手では無いが、持っている物が特異である。

——今、左手に得物を隠した。

だが、私はその者が隠した物を見逃さない。
すれ違いざま、私は背後に向かって呼び止める。

「——待ちなさい、そここの小人族」

「——う、」

狼狽える気配が伝わってくる。

昨日の騒ぎの中見えなかった1つの気配といい、大体察しはつく。
今頃、「彼」は大事な物を失って困っている筈だ。

「袖に仕舞ったナイフ、それを見せて欲しい」

「……リユール？」

シルが不思議そうにこちらを伺うが、説明する時間はない。

願わくば、この者が今潔く行為を改める事を祈ろう。

「知人の持ち物に似ていたので確認したい」

「あ、生憎ですが、コレは私の物です。貴女の、勘違いでしょう……」

……残念だ。

「——抜かせ。神聖文字ヒエログリフの刻まれた武器の持ち主など、私は一人しか

知らない！」

「っ!!」

袖に仕込んだコインを振り向きざまに弾き、ナイフを落とさせる。

小人族の姿勢が崩れた拍子に、フードに隠された赤毛の少女が露わになった。

彼女は武器を捨てることも無く、路地の奥を走り抜ける。

「やはり奴が昨日の……」

「あれ、それベルさんの？」

漆黒のナイフを拾い上げて、彼が扱っていた得物と同じだと確信する。

ならば奴は昨日クラネルさんに目を付けて、早速犯行に及んだということだ。

「追います。シルは後から来て下さい」

「あ、ちよつとリ्यूー！」

小人族の少女が走った先へ向かう。

それほど俊足でも無く、私の敏捷あしなら大通りへ紛れる前に補足できるだろう。

路地を走り抜き追いついた先では、何故かクラネルさんと共に倒れ込んでる少女の姿。

そして、

「……犬シアンスローフ人？」

「リ्यूーさん、シルさんも……あ、そうだ！」

その頭には獣の耳、小人族ではなく獣人の少女である証があった。人違い？いや、その筈は無いが証拠もない。

シルも後ろから追いついたようだが、どうしたものかと思案しているとクラネルさんが急に立ち上がる。

「二人共、上から下まで真つ黒なナイフを見かけませんでしたか!?、なつナイフが真つ黒!?!」

「――、これですか？」

「!!っ……、——」

シルと視線を交わし、「ひとまず落ち着かせよう」と意思疎通をする
と私は彼へ探し物を見せる。

それが彼の持ち物である事を認識すると、どんどん目が滲み号泣す
る寸前の様な顔になる。

これは主神からクラネルさんが賜った物と聞く。よっぼど焦って
いたようだ。

「僕の、ナイフ……ふあああああ!!」

「!!!」

「っひゃあ!!」

すると、彼は突然ナイフを持つ私の手ごと両手で握ってしまった。

女神に拜んでいるかの如く、擦るように触られていると自分でも理
解できないほど胸が高鳴った。

——何なんだろうか、この感情は。

私の手を包む彼の手に、空いた手をそっと添える。

「ありがとうございます！ほんつとうにありがとうございます！」

「ク、クラネルさん……」

「、あれ？リユー、さん？」

彼の手の甲から、私の指を差し込むように絡ませる。

手を握り合い涙で揺れる紅の瞳を見つめた。

ヒューマンに触れられるなど、本来は痛い目に遭って貰う所だ。

だが彼と触れ合うことがここまで心地よいなんて、もしかして私は

「……リユーううう？」

「——はっ!!」

真横に迫っていたシルのじつとりした視線で我に返った。

何ということだ、私は親友の想い人に対してこんな劣情を抱くなど……。

後ろめたさからクラネルさんとシルから顔を背けてしまう。

「その、困る。この様な事は私ではなく、シルに向けて貰わなくては……」

「……そう思うなら、早く手を離さないよっ」

絡めた手を顔を真っ赤にしたシルに引き剥がされるまで、何故か私は離すことが出来なかった。

+++++

「――では、どうぞ」

「はあ、良かったあ……」

「――、」

エルフの女性が彼にナイフを手渡した瞬間、その刀身に一瞬輝きが宿る。

……やはりあの武器は一級品に見えるのに、何故質屋では30ヴァリスの値しか付かなかったのだろうか。

「神様、ごめんなさい。もう二度と落としたりしません！」

「……落とした？」

「っ、……」

話題が不味い方向に向かったので、三人に背を向ける。

あの女性達が少しでも自分に疑いを向ければ、私はお終いだ。

「はい、これ何処にありました?」

「あった、というより……一人の小人族が所持していました」
「小人族?」

……どうやら見逃すらしい。

沙汰は少年に任せるといふことだろうか。

なら、このお人好しならいくらでも誤魔化せそうだと少し安心して立ち上がった。

「では、私達はこれで」

「あ、ありがとうございます!」

女性達は去るみたいだ。

さてどうやって言い逃れようかと考えていると、

「——あんまりオイタしちや駄目よ?」

「っ!!」

背筋の凍るような、優しい声音で囁かれる。

今のはエルフの女性ではなく、もう片方の鈍色の髪をしたヒューマンの声だろうか。

まるで二度はない、と刃物を突き付けられたような最後通告。

……助かった、とは言い難い結末だ。

「……ああ、けど丁度良かった。実はリリの事も探さなきゃと思って
て」

「っ、」

私を探していた？

やはりこの少年も、私を最初から信じていなかったのだろうか――

「えっと、リリ？明日も僕とダンジョンに潜ってくれるかな」

「……………」

……やはり、どこまでもお人好しみたいだ。

不思議にその少年の笑顔を見てみると、果たして私は彼を騙し続けることが出来るのか怪しく思えてきた。

だが、私には果たすべきことがある。

こんな少年に、惑わされるなんてあり得ない。

4話 「痴情の纏れ」

*****ダンジョン上層*****

僕とリリは、あの後もパーティを組んでダンジョン探索に向かっていた。

「ベル様」

「ん？」

「リリを正式に雇ってくださって、ありがとうございます」

まだモンスターの居ないダンジョン表層で、リリにお礼を言われる。

昨日はリリのおかげで沢山稼げたのだからパーティを組んで貰えて喜ぶのは僕の方だ。

他にも理由はあるけど……。

「……、ところでベル様？あのナイフが見当たらないようですが」

「うん。今度は落とさないように、ここに収納したんだ」

昨日は危うく神様から貰った「ヘスティア・ナイフ」を失う所だった。

繰り返さないように、左腕のグリーン・サポータの内部に鞘ごと収納するスペースがあったのでそこに仕舞っている。

よく考えてエイナさんは選んでくれたんだと思うと、とても嬉しくなる。

「そうですか……」

「それより、本当に契約金とか良いの？」

本来、サポーターは探索一回ごとに一定の報酬を受け取ったりする

ものと聞いた。

でもリリに聞いたら、稼ぎからの配分で問題ないと言われた。

「ええ、ベル様はお一人ですので配分もややこしい事になりませんし。それに……」

「それに？」

「——その方がベル様にも都合がよろしいでしょうか？」

「……えっ？」

リリの言ってることがわからなくて、問い返す。

僕に都合が良いというのは一体、

「さあ、行きましょ。ベル様に頑張って頂ければ、何も問題ありませんから！」

「あ、うん……」

考えている間に、リリに促されてしまった。

まあ、あまり重要な事でも無いだろう。

「今日はどれくらいまで行きましょうかねえ」

「そうだなあ——」

昨日よりは多く、なんて高望みをしながら僕はリリとダンジョンに潜っていく。

*

「に、240000ヴァリス!?」

ギルドで換金した稼ぎは、見たこと無い金額だった。

金貨がたつぷりと詰まった袋が2つ、目の前にその重みを体現している。

その事実をすぐには受け入れられず驚愕の声を上げてしまう。

「あ、あぁっ夢じゃないよね!?こんなにお金が入るなんて!」

「ベル様凄おい!!お一人でレベル1の5人組パーティを上回る額を稼いでしまいましたあ!!」

「いや、ほらあ『兎も煽てりや気に登る』って言うじゃない?それだよ、それ!!」

「全く訳がわかりませんが、今日の所は便乗しときます!すごおーい!!まだまだ上を目指せますよお」

リリも一緒になって喜んでくれている。

やはり彼女とパーティを組めて本当に良かった。

「では、ベル様?そろそろ分前を……」

「うん、はいっ」

「——ええっ?」

「はは、これなら神様に美味しいもの食べさせてあげられるかもっ」

丁度、12000ヴァリスが入った袋の片方をリリに渡す。

僕の方にも12000ヴァリスが残る訳で、これだけでいつもの何倍の稼ぎになるのだろうか。

これを持ち帰った時の、神様が喜ぶ顔が目に見えかぶ。

最近、僕の主神はともお金に困っているみたいだから。

細々と最初の頃のように暮らし始めて、僕も毎日気を揉んでいた。

「あつ良かったらリリ、これから一緒にご飯食べない？」

「あ、あのつベル様!!」

「――、？」

この際だから神様にリリの紹介も兼ねてお祝いなんてどうだろうかと思っただけど、何やら深刻な顔で僕を見上げながら、渡した袋と僕の間で視線を彷徨わせている。

「な、なんで山分けなんて……独り占めしようとか、ベル様は思わないんですか!？」

「え、どうして? 僕一人じゃこんなに稼げなかったよ。リリが居てくれたからでしょ?」

「――はあ?」

「全部リリのおかげだよ、ありがとう」

ここまで稼げたのはリリのおかげなのに、それをリリが受け取らないなんて理由がわからない。

きつと、謙虚な子なんだろう。

素直に喜んで欲しくて、僕は彼女の目を見て笑いかける。

「これからも、宜しくね」

「――、……」

友好の証として、手を差し出す。

小さな犬シヤンスロープ人の少女は、おずおずと僕の手を握った。

「――、変にやのお……」

「……んっ?」

握手を交わして、お互いの関係を納得して終わりかと思っただけど……。

今なにか妙な声が聞こえたような、

「べるしゃま、へんにやのおー」

「り、リリ?」

何かリリの様子がおかしい。

顔は真っ赤だし、目はトロンとしている。しかも内股になってモジモジし始めた。

握った手をぎゅつと掴んで離さず、何かを我慢しているみたいだ。

「えっと、トイレ我慢してたの?」

「ちっ違いまふ、べるしゃまのおばかあ」

トイレを我慢していた訳では無いみたいだ。

なら、後考えられるのは……少し汗ばんだ上気した頬、息も荒く何かの症状にも見える。

「そうか、風邪だね!僕ってば気付かなくて。えっと、熱は……」

「ふやああああんっ」

僕は彼女の体温を計るために、おでこ同士をくつつけるとリリが更に変な声を出し始めた。

もしかして危ない状態なのかもしれない。

しかし彼女の額から伝わる体温は高めではあるが、熱があるという程でもなかった。

「何か毒を持っていたモンスターが居たのかな……」

「ち、ちがつ……べるしゃま、はにやつはにやれてええええ」

「あ、ごめんね。……もし良ければ良いお薬があるお店を知ってるんだけど」

ミアハ様の所に行けば、何かこの症状を抑える薬があるかもしれない。

それにもし種族特有の病気だとしても、あのお店にはリリと同じ犬人のナーザさんも居る。

女性だからしつかりとした診断だって出来るはずだ。

それにもし高額な薬だったとしても、今日みたいな稼ぎなら立て替えてもらえば何日かで払えるだろう。

「い、いらにやいでしゅ……おくひゆり、いらにやいでしゅ」

「そんな事言って、こんなに顔が真っ赤だよ!？」

「また触っちゃあああはああああんっ!!」

「くっ、急がないと。ごめん、リリ!」

「つつあぁっ!!——ひ、あっ!？」

僕はダイダロス通りで神様と逃げた時の様に、リリを抱きかかえて「ミアハ・ファミリア」のお店へ向かう。

腕の中で、リリがビクビクと震えてる。

——時間は無い。逃げ、女の子を助けるんだ!

「それで、その雌犬はベルのなに？」

「いや、つい昨日パーティを組んだ女の子ですってば!それよりもリを診て貰えませんか!？」

僕は大急ぎでリリをミアハ・ファミリアのホーム兼お店までやって来た。

戸を叩いて、中から出てくれたのはファミリアの団長である【ナーザ・エリスイス】さん。

眠そうに半分閉じた目蓋と垂れた耳が特徴の犬シアンスロープ人の女性。

今は薬師をしているけど元はレベル2の冒険者で弓の名手でもある。

「今ミアハ様は買い出しで居ない。それにその子……」

「——つりりの症状、わかるんですか？」

「わかるというか、身に覚えがあるというか……」

お店の前に座り込み今は少し落ち着いてきたリリを見て、ナーザさんは軽くため息をつく。

やはり種族、もしくは女性特有の症状なのか。

だとしたらナーザさんには是非解決して貰いたい。

「お金なら、高くても分割で払います。だからリリをどうか！」

「お金……それも魅力的だけど、今はそっちよりも——」

「つあの、ナーザさん？」

顔を息がかかるまで近づけるナーザさん。

亜麻色のウエーブがかかった髪の毛の匂いや、目蓋で半分隠れた紺色の瞳が視界に広がる。

何やらスンスンと鼻を鳴らして、彼女はジトツと僕を睨んだ。

腰から伸びたふわふわの尻尾が、不機嫌そうにユラユラと揺れている。

「最近来てくれないと思ったら、他所で雌を漁ってたなんて……」

「えっ?」

「浮気者のベルにはお仕置き。こっちに来なさい……」

「いやあのナーザさん！リリがっ」

彼女の右腕が僕の手を取る。

なんか小さく「がるる」とか唸ってるし、もしかしなくても怒ってる?。

「あれは放っておけば治る」

「ええ!? えっとリリ! そこで待ってて、辛くなったらすぐ言うんだよ!?!」

「……いいから行ってきてくださいやい」

「そんな雑な」と思いながらも、彼女の細腕に隠された力に抵抗できずお店の奥まで連行される。

小さなリリの返事が聞こえた気がするけど、あつという間に僕はお店の小さな部屋まで来た。

「ここは、私の調合部屋」

「え、そんな所に僕が入って良かったんですか?」

「ベルなら、いいの」

先の中へ押し込まれ、僕は部屋の中を見回していた。

様々な薬品とガラスの容器、材料なのか植物の種子や根、そして大量の書物がある。

初めて見る薬師の仕事部屋に少し心が浮き立ってしまう。

「それよりも、ベル」

「――、あつ何ですか? やっぱリリは何かの」

「脱いで。全部」

「っ!?!」

病気なんですか、という言葉も言い切る前に僕は驚愕する。

後ろ手にドアと鍵を締めて、ナーザーさんは突然そんな事を言いだした。

そして音もなく懐まで接近されて、上着をぐいぐいと脱がしにかかっている。

「ななな何をいきなりつナアーザさん！」

「大人しくしなさい、じやないと噛み千切る」
「!?!?」

物騒な事を言われながら、僕はあつという間に服を脱がされた。

彼女の方がレベルも高くかつ女性だから乱暴にも出来ず、僕の抵抗なんて通用しなかった。

せめてこれだけはと、下着だけは死守した。

「ベルは良い子なんだから、他所の子にかかっちゃ駄目」

「かかるって、犬じゃないんだから……」

半裸の僕に伸し掛かり、マウントポジションで僕を睨むナアーザさん。

そして倒れ込んで来たと思ったら急に僕の顔を舐めだした。

「れろ、ちゅっベル、ベル……」

「あ、あのっ」

「他の雌この匂いを消して、私の雄おとこだって印をつける。ちゅ、んれえ……」

まるで大型の犬にじゃれつかれているような状態だが、相手は年上の綺麗な女性だ。

僕の胸を柔らかい感触がふつくらと押してくるし、顔だけじゃなくて耳、首、鎖骨に胸とくまなく彼女の唾液が塗られていく。

時折、ちゅうつと強めに吸い付かれてはそこに赤い痕が斑点のように残されていた。

素肌を這い回る温かい舌の感触と、熱い吐息のせいで僕の股間が反応して彼女の股を押ししてしまう。

「なに、私に種付けしたいの？」

「ええええっ!?!いやこれはそんなんじゃないよ!!」

「……違うの?」

必死に否定するが、何故か余計にナアーザさんの機嫌が悪くなる。半分閉じられた目蓋がさらに細められ、抗議の意志を感じた。僕にどうしろっていうんだ?

耳に舌を差し込みながら、彼女は僕の下着を捲ってしまう。

言い訳できないくらいに勃起した愚息が、外気に晒されてビタンツとお腹に貼り付く。

「何コレ。他の子を散々虐めたくせにまだこんなにして、ベルのスケベ」

「ご、ごめんなさい……」

泣きたい。というか若干涙が出てきた。

リリを助けようとしたはずが、何故か女性に押し倒されている。

「他の子」とは、エイナさんの事だろうか。もしかして「豊穰の女主人」の人達?

でも彼女が僕の男女関係に関して何故ここまで執着しているのかわからない。

「でも、僕は浮気とかそういうのは」

「言い訳しないの。ベルは悪い子だね、あぐつ」

「うわっ!!」

困りながら弁明しようとする、ナアーザさんに乳首を甘噛みされた刺激で腰が跳ねる。

ナアーザさんは確か、主神のミアハ様の事が好きな筈。

僕とはご近所さんで仲良くして貰っているだけだと思っていたのに。

「またこんなおっきいの私に押し付けて……ベルとはまだ子供作ってあげられないの。『待て』だよ、出来るよね？」

「僕の話聞いて下さい……うう」

まるで子犬をあやすように肉棒の先端を、黒い手袋の右手で撫でられる。

動きは落ち着かせようとしてるけど、その部分に対しては逆効果でどんどん硬さを増していく。

その間もずっと、僕の顔をナアーザさんがペロペロと舐め続けていた。

「子供はファミリアの収入が安定したら。その後なら、ミアハ様と育てるから好きだけ産んであげる」

「そんな酷いことしませんよ、僕は！」

「我慢できないなら、こつちでしてあげるから。今日はそれで満足して」

「ええ!? あ、ああ!! 入っちゃいますってっ」

「んんっ………思ってた通り、大きいね。お腹がベルのでいっぱいになってる」

ナアーザさんはスカートをペろんと捲るとそのまま僕に跨り、陰茎を手で支えながらそのまま体重を掛けてきた。

下着を履いていないのか、そのまま僕のモノはナアーザの中へ侵入していく。

しかし、そこは女性の膣では無くお尻の方にある不浄の穴だった。

「あ、な、ナアーザさん……」

「んっ安心して。ちゃんと綺麗にしてるし、ベルのこと想って毎日試験管で練習を……って何言わせるの」

「うああっ」

「こつちなら赤ちゃん出来ないし、さつき香油で濡らしておいたから

気持ちいいでしょ？」

「ナアーザさんとこんな事をするのは初めてで、しかも挿れているのはお尻の穴だ。」

「たまにエイナさんともお尻でする事はあるのだが、念入りな準備が必要な上に未だに彼女はちよつと痛そうにしているのに……。」

「でも今日の前で腰をクイクイと艶めかしく動かす彼女は、まるでこの行為に慣れているような動きだ。」

「肛門も締めりはキツ過ぎず、腸の中はぎゅつと陰茎全体を包み込んでいた。」

「まるでこの行為を想定して慣れるまで準備をしていた様な感触である。」

「どう、ベル。ちゃんと私、気持ちいい？お尻の穴、変じゃない？」

「あ、はっナアーザさん、僕……もう、」

「私、こんな腕で……『キズモノ』だけど」

「僕の頬に素手の左手を添えながら、彼女は口で右手に嵌めた手袋を脱ぎ、袖を捲くった。」

「そこには形状は普通の腕に見えるが、剣の様な金属光沢で関節部分には宝石が埋め込まれている。」

「銀の腕アガートラムという一級品の魔道義手で、過去に右腕を失っているナアーザさんの体の一部となっている。」

「それでも、女として見てくれるベルが……好き。触っているとドキドキするベルが、大好き」

「――、……」

「ミアハ様も大好きだけど、ベルも大切な男の子。相手してくれないと……嫌」

「ほ、僕は……」

いつもご近所のファミリアとして仲良くしてきたナアーザさん。
眠そうな目で、たまに冗談を言ってきた僕を困らせる年上の女性。

先輩冒険者としてアドバイスをくれて、お店では薬を調合して手助けをしてくれる薬師。

そして、主神のミアハ様を熱い目で見つめていた、恋する犬シアンスロープ人。

「ベル、出して！熱いが出るんでしょ？赤ちゃん作れないけど、お尻にベルのいっぱい頂戴っ」

「……っナアーザさん！」

「あっ、ベルうう!!——っああああおおお!!」

最後は乱暴に腰を振りながら、義手と素手で僕の顔を挟んで至近距離から見つめてくるナアーザさん。

限界だったモノは決壊し、噴火するマグマのように彼女の中へ注がれていった。

眠そうな目は今は見開かれて、舌はダランと垂れている。

中で脈打つ感覚を、全力で味わおうと肛門が締め付けて離さない。顔を挟んでいた両手は、今は僕の頭を抱え撫でており少し恥ずかしい。

「くうん、熱い……凄いや量。格好いいね、ベル。お腹たぶたぶになりそう」

「すいません、まだ……」

「良いよ、全部出して?——ベル、たまにで良いから……もっとお店に顔を出して。またお話したい。私、ベルが来るの……お店で待ってるから」

「ナアーザさん……、はい。僕で良ければ、いつでも」

「……ありがとう。——ん、」

「——、」

僕の射精が終わるまで、唇をそつと重ねるだけの温かいキスが続いた。

+++++

「ベルはベッドヤクザ。まだ腰がガクガクする」

「そんな、酷いですよお」

「ふふ、次来た時はもつと遊んでもら——」

「どうしたんですか、ナーザーさ……あつ」

服を着直し、扉を開け先に部屋から出たナーザーさんが石化した。後ろから中の様子を伺って、僕も事情を察する。

調査部屋を出た眼の前の、居間とお店が繋がっている空間で待っていたのは彼女の主神、ミアハ様とリリだった。

テーブルを挟んで、二人でお茶を飲んでみたいだ。

「やあ、ベル。元気そうで良かった」

「あ、あのミアハ様これは」

「それに、この前伝えた通りナーザーとも仲良くしてくれているみたいで何よりだ」

「そ、それはですね。えつと深い事情があるといえますか……」

「ところで、サポーターを雇ったんだね。ベルの良き相方だと聞いたから、中で休んでもらっていたよ」

「あ、ありがとうございます……」

このお店は決して立派な建造物とは言えない。

つまり壁は比較的薄く、先程までのやりとりを「詳細まで」聞かれていた筈だ。

だがミアハ様は一切気にする素振りを見せず、微笑ましい物でも見てるかのような表情だ。

そして対面に座るリリは僕ではなく、横で固まるナアーザさんをジーンと見ている。

お茶を啜り、ゆっくりと湯呑みをテーブルに戻した彼女はややあつて、

「……いいご趣味をお持ちで？」

「」、つつ」

リリのその言葉で、石像と化していたナアーザさんが再起動した。ビクウ！と身体を竦めた後、ギギギと錆びたネジのように此方へ顔を向ける。

犬耳の付いたリングかと思うくらいには真っ赤であった。

因みに、僕もきつと大差ないくらい赤い顔をしていると思う。

「!!!!!!」

声になっていない叫びを上げて、ナアーザさんは部屋に籠もってしまつた。

呼んでも「駄目」としか返つてこない。

きつとまた暫くは会わないほうが良いのかも、と僕は彼女に申し訳ない気持ちになる。

「ベル様、日も暮れますしそろそろお暇しましょう」

「おや帰るのかい？道には気を付けなさい。是非、今後は当店をご贖に」

「ええ、リリもここが気に入りました！お茶、ご馳走様です♪」

後ろから聞こえるご機嫌そうな会話を他所に、僕は封印された部屋の前で途方に暮れていた。

+++++

「きよ、今日も乗り切ったあ……ローン返済のためとはいえ、神のボクを遠慮なく顎でこき使いおつてえ……」

ボクはヘフアイストスの店で働き終えて、夕暮れの街をぐったりしながら歩いていった。

全く、あの親友である神は子供たちにボクを「見習い」でも思え」と伝えてるのか扱いが悪い。

馬車馬のように1日中働いて、流石にくたくただ。

「早くベル君に会いたい……」

愛するあの子に会えば、きつとこの疲労だって消し飛ばはずだ。

眷属である少年へ思いを馳せていると、願いが通じたのか喧騒の中に聞き慣れた声を感じた。

「——むっ!!」

例えどんなに騒がしくても、ボクがあの子の声を聞き間違える訳がない。

周囲を見回し、その雑踏の中で揺れる見慣れた白髪を発見した。

「……ベル君だあ!!——っっ!!」

なんと運命的だろうか、やはり世界はボク達を引き合わせているん

だね！と歡喜に震えたのも一瞬。

ベル君の隣で、ニヤニヤしながら歩く小柄な少女の姿が。

『だから違うんだよ、リリってばあ』

『ええー、でもベル様ってば酒場の店員にもコナかけてたじゃないですか、破廉恥ですねえ』

『そういうんじゃないんだよ、ただ仲良くしてもらってるだけで』

『そう言っつて、リリにあんな大胆な事するなんて油断なりませんね？
ベル様』

『ただ介抱しようとしただけだっつてえ！』

「ガーーーーー！！」

なんだ、アレは。

ボクの愛するベル君が、見たこと無い女の子とイチャイチャしながら歩いている。

相手も頬を染めて完全にホの字じゃないか。

ベル君まで真っ赤になって、あのアドバイザー君に続いてもう新しいオンナを作っているなんて……

「ベル君の、浮気者おおおおおおお!!」

5章 「魔導書（グリモア）」 女神に追われ

*****西メインストリートとある酒場のテラス*

「……つぶはああ!!」

ドンツと乱暴に空のグラスをテーブルに叩きつける、黒髪を双方に結った女神ヘスティア。

私こと「ミアハ」は、お互いのファミリアから近い酒場で友の愚痴に付き合っていた。

「聞いてくれよ、ミアハあ!!ベル君が……」

そう涙ぐまなくなつて聞いているとも。

このテーブルを囲んでいるのは我等二人のみだし、その話はもうかれこれ6回目だ。

「ベル君が浮気をしまくってるんだああ!!ううううっ」

涙を流しながらテーブルに突っ伏す女神。

怒りのやり場を失った拳は何度も木製の卓上を殴りつけている。

私は胡椒を振った焼き菓子ブレッツェルを齧りながら、白髪の子供が苦笑いする様を想像していた。

「くそお、そもそも何なんだあの子達はあ!ベル君はボクのものなんだぞお!」

「これこれ、ヘスティア。ベルは誰のものでも無いぞ」

「フンっ!!わかってるさ、そのくらい!ただ言ってみただけさ!!」

解ってないではないか。

どうもこの女神はたった一人の眷属が可愛くて仕方なく、独り占めしたいらしい。

これは夕方、ウチでナーザがベルと部屋の中で睦言を交わしていたという話はしない方が良さだろう。

「んぐつぶは、言ってみたかっただけさあ!!」

やるせない想いを、自棄酒で解消しようとしている友ヘスティア。

安物の麦酒^{ビール}はどんどん小柄な女神の胃に収められていき、真っ赤な顔をして「ぶはあああ」と酒臭い息を吐き出している。

「ああ、べるくうんっお願いだからボクの前から居なくならないでおくれえええ!!」

「これこれ、声がデカイぞ」

まるで目の前にベルの幻を見ているかのように両手を伸ばし、テーブルに倒れ込む。

私はベルではないので受け止めないし、料理が駄目になるので皿を取って避難させる。

子供への愛が深く酒癖の悪い女神は、とうとう滝のように涙を流し始めた。

これは、ベルもナーザも苦労しそうだ。

「あゝいゝじでるゝよ、おおお、べえルくうううん!!」

天に向けた女神の咆哮は、果たしてあの子供に届くだろうか。

*****とある教会く『ヘステイア・ファミリア』ホーム
く*****

「あああああああぐあああああううううあああああ
……」

「大丈夫ですか、神様……」

「……—、ふん……」

昨晚ミアハと深夜まで飲み明かした後、ホームに帰って泥のように眠った。

そして自分の酒臭さに目が覚めたと思ったら、割れる程に頭が痛い。

もともと酒豪な訳じゃないボクは、泥酔するほど酔うと大抵この「二日酔い」という症状に悩まされる。

天界の宴ではこんな事は無かったけど、いざ下界に降り立った時に困ったことの1つだ。

ベル君から奪い取る様にコップを受け取り、中身の水を一息で飲み干す。

だが痛みが和らぐと昨日の一件を思い出したボクは、ベル君に背を向け膝を抱える。

「どうかしたんですか？神様」

「どうもしないよっ」

——ふん、なんだい。ベル君の浮気者っ

ボクはこんななベル君を愛しているのに、彼は他所の子供にしか手を出さない。

理不尽な状況に不貞腐れていると、頭にぽふつと濡れた布巾が乗せ

られひんやりと気持ちいい。

「あの、神様……こんな時になんですけど、次のバイトのお休みっていつですか？」

「……休み？何でだい」

そんなものを聞いてどうするんだらうか。

何かボクに頼むことでも、とベッドからベル君を見上げる。

すると彼は照れ隠しに頬を掻きながら、目を逸らしてぽつぽつと打ち明けた。

「実は最近、ダンジョンでたくさん稼げるようになって……神様に恩返ししたいなって、僕」

「……」

ベル君の雰囲気から、言いたいことを先読みする。

もしかして、これは――

「だからその、行きませんか？……二人でちよつと豪華な食事でも食べに」

「……逢い引き」

そう、それは男と女が連れ添い、愛を深める逢瀬。

とうとうボクの愛が、浮気気味なベル君を射止めたのだ。

ボク達は結ばれる。いや、結ばれなきゃならない！

想いが通じ合うならば、その成就是今宵すぐにでも！！

「今日行こう……」

「えっ」

「今日行きたい！」

「で、でも……」

「今日行くんだ！！！」

何が何でも今日ベル君とデートに行くため、おでこをくつつけて言い聞かせる。

さつさとベル君との愛を深めないと、またどこぞの子供と浮気しかねない。

「体調は……？」

「もう、治ったあ！！——っ、くん、くん……」

頭痛や吐き気がナンボのものか。

ボクとベル君のデートの事を考えたら、体調なんて崩していられない。愛は全てを超越するんだ。

さーて、おめかししなくてはとクローゼットを開けた所で、大事なことに気がつく。

——、臭う

酒をしこたま呷り、水浴びもせず布団に入ったもんだから酷い匂いだ。

これでは決戦の時にしくじる……！！

「——ベル君。6時に南西のメインストリート、『アモールの広場』に集合だ！」

ボクはぐつと親指を立てて、ベル君と落ち合う約束をする。

今回、全力で準備をして臨む必要がある。

——それに、待ち合わせなんて……まさにデートっぽいじゃないか！

*****迷宮都市オラリオく南西メインストリート「アモールの広場」く*****

南西のメインストリートから伸びる小路から辿り着く先にある広場。

鮮やかな敷石で舗装された園内、華やかな雰囲気飾る花の植栽が垣根となっていた。

そんなここ「アモールの広場」は待ち合わせによく使われるのだが、——き、気まずい……。

ベンチで寄り添い、愛を語らう者。

抱き合いながら時折隠れるようにキスをしている者。

そう、ここは恋人同士がよく利用する広場なのだ。

目のやり場に困り、俯きながら神様を待っていた。

「ベル君！」

すると尊敬する神様の声に安心して、そちらに向き直る。

そこにはいつもの独特な露出の多い服ではなく、肩を出した白のワンピースに髪は真っ直ぐに下ろした、私服の神様が居た。

「ごめんね、ベル君。待たせちゃったかい？」

「い、いえ全然……僕も今来たばかりですから」

「——、うん」

まるで僕達まで恋人みたいなやりとりに感じてしまう。

目を背けてはにかんでいる神様を見ると、僕までカアッと顔が熱くなる。

そして神様は、僕の方へゆつくりと手を伸ばし、

「おおーアレが噂のっ」

「ヘスティアの男!？」

「「キヤアアアアア可愛い♪」」

「うはあ!？」

「か、神様!？」

急に現れた女神様達に突き飛ばされる神様。

そして僕は一斉に囲まれてしまう。

「ゲット♪」「ええいつこつちも♪」「やだっなんかこの子……」「どうしよ、濡れてきたかも」

「え、いやっあの、ちよつと……」

「ななななななな……」

「ごめんなさいねえ、ヘスティア。気になって付いて来ちゃったの」

神様が別の女神様と会話してるみたいだけど、ソレどころじゃない。
あつちこつちと頭を撫でられたり、抱きすくめられたりで揉みくちやにされる。

——ま、不味い……。

女神様達の中には奔放な服装な方もいて、素肌の感触がダイレクトに伝わってきた。

胸や太腿を思い切り当てられたり、たまにお尻を触られたりもしていれば当然僕の股間は盛り上がってくる。

「なんかいい匂い……う？」「というより、美味しい?れるっ、ちゅ……」
「ひゃい!？」

うなじに鼻を押し付けて匂いを嗅がれたり、耳を舐められ始めた。
最初はハグ程度だった女神様のスキンシップも、胸や腰を弄ってくる動きに変わってくる。

このままではアソコを大きくしている事がバレてしまう、と僕は必死にもがく。

「やば、身体火照ってきた」「何、貴女も?」「近くに宿ってあったかしら」「連れ込んだじゃう?この子」

「は、離してくだ、さ……い」

お香や香水の混ざった妖艶な女性の匂いと、押しくら饅頭によって上がった体温で僕は逆上してしまう。

なんとか脱出し倒れ込んだ先で、とても柔らかい布団に包まれる。

そして、それは布団ではなく女神様の谷間。

要は女神様のお胸に顔を埋め、抱きしめられていた。

その事に気付いた頃には僕の股間も最大まで膨らみ、女神様のお腹へ押し当たってしまったている。

「……」

「……」

ゆつくりと大きな谷間の中で視線を上げると、そこにはキョトンとしている金髪の女神様。

そして女神様の視線が僕の目から下腹部に移り、再び僕の目に合わせる頃には満面の笑みになっていた。

——おっき勃起、しちやったのね♪

優しく慈愛に満ちた女神様の目から、言い逃れ出来ないことは明白だった。

再度、僕の顔は女神様の手によって谷間の奥まで包み込まれてしま

う。
「やだもおこの子ったら大胆ああん♪持ち帰ってウチの子にしちやーう!」

「なあああああああああああ!?!」

女神様の羽ヘッド交ロツクい締めで視界が真っ暗、いやむしろ真っピンクになる。

柔らかいやら甘い匂いやら神様の絶叫やらでもう何がなんだかわからない。

とにかく言えることは、この女神様のお胸は大層ご立派だということだけだった。

「べええルくううううん!!」

「あらっ」

「んんうううおおおおおおお!!」

叫びながら僕の首根っこを掴んで女神様の抱擁から掻っ攫い、神様はそのまま広場から走り去る。

僕は引きずられながら、先程まで顔を包んでいた感触に頭が真っ白になっていた。

「へステイアが逃げたぞお!」

周りを取り囲んでいた女神様達は、その場から去る僕達を追いかけしてきた。

そうして、追われながら隠れながら僕達が逃げ惑っていた頃には、オラリオに夜の帳が下りていた。

「よ、ようやく逃げ切れましたね……神様」

「まったくこれだから神ってやつは……娯楽に飢えたハイエナめ!」

二人で逃げた先はメインストリートから外れた先にある鐘楼の中。大きな銅鐘が吊るされている空間で、ようやく一息つけそうだ。

「おかげですっかり夜も更けちゃったし……はあ、せつかくのベル君とのデートが」

「でも、ちよつと楽しかったです」

「ふえ?」

「それに……ほら見て下さい、神様」

確かに、何か血走った目で追いかけてくる女神様たちはちよつと怖かったし、「あの子を私色に染める」とかよくわからない事を叫びながら走り回る姿はミノタウロスを少しだけ思い出してしまった。

でも、一緒に息を潜めて隠れたり、焦りながらも手を取り合って走り回るのは楽しかった。

そして僕達の前には、夜のオラリオが一望出来て、その上では満天の星が輝いている。

「……、わぁ……はは、」

「綺麗ですね……」

「うんっ」

この誰もいない場所で、僕等二人だけがこの景色を独り占めしている。

それだけでも、少しは神様の気晴らしになったかもしれない。

「神様……またここに来ましょ？今度は絶対ご馳走しますから」

「……、」

そう、次はたくさん美味しいものを一緒に食べて、お腹いっぱいになってこの夜空をまた観に来るんだ。

その時にはきつと疲れた思い出じゃなくて、僕等の素敵な秘密になるんじゃないかな。

「……、……っ楽しみにしてるぜ、ベル君……」

何か言葉を1つ飲み込んだ後、そつと方に頭を預けてきた神様は、頬を染めながらうつとりと目を閉じていた。

いつか来る素敵な思い出に、想いを馳せて。

少し恥ずかしくて、僕は頭を掻きながら、そのまま夜空を眺めていた。

*****ダンジョン上層*****

「ベル様、足元!!」

「ぐっ……!!」

ベル様と今日もダンジョンに探索で潜っていた所、それは起きた。彼が複数のキラール・アントと立ち回っていた時に、俊敏な動きのメタルラビットが体当たりを仕掛けた。

慌てて声をかけ直撃は避けたが、膝に受けた衝撃でベル様は体制を崩してしまう。

倒れ込むベル様に、好機と鎌のような前脚を振り降ろそうとするキラール・アント。

リリは、咄嗟に懐に忍ばせていた一振りの魔剣を抜いた。

「だめええええええええええ!!」

短剣型の紅い魔剣から、火焰が迸る。

槍のように真っ直ぐ怪物^{モンスター}へと伸びた炎は、着弾した瞬間に全身へ燃え広がり、凶刃の動きを止めさせる。

「っ、はあああ!!」

ぶすぶすと黒い煤を上げるキラール・アントをすかさず黒刃で一薙ぎにするベル様。

その後も体制を立て直し、残りのモンスター達も倒していく。助かった、と安堵したのも一瞬でリリは慌てて魔剣を懐に仕舞い直す。

——しまった、つい魔剣を……。

あの少年どころか、誰にも所持していることを知らせていない魔剣。

こんな高級装備を隠していることを知られたら、私を監視して「謝礼金」を要求してくる【カヌウ】達に何をされるかわからない。

ただでさえ昨日は定期的な謝礼金の支払いで、いつもの3倍も収入がある所を3割増し程度で誤魔化したばかりなのに、バレたら根こそぎ奪われる。

「はあ……」

「ベル様っ無事ですか!？」

青褪めながら、ベル様はその場にへたり込む。

私は心配そうな声を上げながら、彼の元へ駆け寄った。

「リリ、ありがとう……助かったよ」

「え、あっはい……」

「ねえ、リリ……今、魔法を使ったよね？」

「あ、いえ……あれは魔剣の力で」

若干的外れだが、流石に誤魔化せない。

正直に言った方が誤解を招かないだろうし、彼がとことんお人好しであることがリリでもわかってきたので、まさか奪い取られることにはならないだろうと踏んでいた。

「魔剣!? そんな貴重なものを僕のために!? ありがとう……」

「そ、それは……ベル様の為ですからあ、あはは……」

彼が居なければダンジョンを無事に探索なんて出来ないし、稼ぎも減る。

それに、まだ例の黒いナイフも奪えてないのだ。

打算的な理由で助けたのだが、感極まりながら感謝されてしまい、リリは気まづくなってしまう。

+++++

「やっぱり魔法って凄いなあ。……はいっ」

「、え？」

モンスターの出現しない空間^{ルーム}で、リリ達は休憩を取ることに。

座り込みながら先程の魔剣の威力に感動していたベル様は、四角い包みを空けると中のものを1つ取り、残りをそのまま此方へ差し出してきた。

その中は、なにか言葉で表現できない独特な色彩で彩られた、なんともまあ独創的なサンドイッチが並んでいた。

下卑た笑いを浮かべた冒険者の連中に、残飯を投げつけられたことはあっても、昼食を分けてもらったことなんて無かったのでリリは戸惑ってしまう。

「貰い物だけど」

「……ありがとうございます」

「……ベル様っ」

「あー……、うん？」

一口目を食べようとしていた彼に、意を決して申し出てみる。

彼には、誤魔化さずに言うのが最も好転すると思ったのだ。

「明日一日、お休みを頂いても宜しいでしょうか」

「良いけど……何か用事でもあるの?」

「ファミリアの集会があつて、どうしても出席しなくてはいけなくて……契約違反なのはわかっています。罰則はお受けしますから」

ペナルティ

他の冒険者なら、己のファミリアの都合で休暇を取るなど「調子に乗るな」と頭を蹴られ、金を奪られる所だ。

ベル様がそこまで奴等と同じとは思っていないが、真摯に地面に膝と手を付き、頭を下げる。

「ええつい、良いよそんな事!?!それより、ごめんねリリ」

「――、?」

なぜリリが謝られているんだらうか。

意味がわからなくて、顔を上げると居心地悪そうに頬を掻くベル様が居た。

「僕、気が回らなくて……休みたい時は遠慮なく言つてね。……あぐっ」

そう言つて笑顔でサンドイッチをジャリジャリと頬張るベル様。

なぜあんな音がするのだらうかとかはどうでもよく、私は腑に落ちなかつた。

縁サの下ボの力持タち風情イに気を使う冒険者なんて存在するのか。

目の前の彼の言葉を、素直に受け止められないリリと、この少年だけはその例外に当たるんじゃないかと信じ始めているリリが居た。

「……………」

ベル様との時間に「最後」が訪れた時、リリは果たして彼を裏切るだらうか。

ソーマ・ファミリアを抜けると誓った決意が、彼の純朴な心に揺ら

いでいく。

何も言えぬまま、彼から貰ったサンドイッチを一口齧り、「ガゴ
リツ」と意味不明な食感が広がった。

……次からコレを貰うのは断ろう。

魔法、発現

*****迷宮都市オラリオ〜西メインストリート『豊穰の女主人』〜*****

「ご馳走様でした」

僕は昨日シルさんから頂いたお弁当のバスケットを返しに、お店へやって来ていた。

このお弁当も一度や二度で終わりかと思っていたら、バスケットを返す度に「次の探索はいつですか？その日も作って待ってます♪」と先手を打たれる。

そして申し訳ないのでやんわり断ろうとすると、「駄目、ですか……？」と目をウルウルさせながらあざとくお願いされるのだから弱ってしまう。

なので毎回ありがたく頂いている。のは良いのだが、毎回味が独特なので感想を伝えるのは控えているのだ。

「今日はお休みなんですか？」

「はい、急に暇になっちゃって……シルさんは休みの日って何してます？！」

僕はこれといって趣味は無く、やることと言えばダンジョン探索しかない。

だが今日はリリが用事があって一緒にダンジョンへ潜ることは出来ず、今更一人で行くのも効率が悪いので、やる事が無くなってしまうのだ。

鈍色の髪を後ろに括ったシルさんは、思い出すように視線を宙に浮かせて頬に指を添える。

「そうですね……読書、とか」

「読書かあ……でも、神様が持つてる本はどれも難しそうだし——、？」

童話や英雄譚なら好きでよく読んでいたけど、神様が持っているような本を読むのは自分には向いてなさそうだと諦めていたらある物が目に留まった。

お店の棚に掛けられた、ぽつんと佇む一冊の本。
革の装丁に古ぼけた表紙。その題名には、

『ゴブリンにもわかる現代魔法』……？』

「興味あります？お客様の忘れ物なんですけど、取りに来る様子もなし……この本で良ければ貸しちやいますよ♪」

「え、良いんですか？」

「減るものではないですし、読み終わったら返してくれば良いですから」

まあ確かに、読むだけなら問題はなさそうだ。

魔法には興味があるし、題名からして僕のような初心者向けなのかもしれない。

「それじゃあ、お言葉に甘えて……」

「はい、——んっ」

「っむう！」

にこやかに本を渡すシルさんから両手で受け取った拍子に、そのまま倒れ込むように顔を近づけた彼女に唇を奪われる。

いつぞやの魂まで吸われそうなキスではなく、軽く舌で口腔を何度かかき回すと、シルさんは離れた。

「あ、あの……」

「えへっ今日はお弁当ご不用みたいですし、そちらをこ馳走しちやい

ました♪」

名残惜しそうに、若干唾液で湿った唇を指でなぞり、シルさんはぱたぱたと厨房へ消えていった。

お弁当の時も含めて、シルさんには何度も口を吸われている。

一度避けようとしたら、信じられないくらいシヨックを受けていたので、それ以来何度も受け入れていた。

最近では目をつぶると彼女の唇と舌の感触を思い出す程で、非常に股間に優しくない。

どうしたものかな、と本を抱えてお店を出ていく。

『ニヤア、あれが白髪頭で、シルのオトコニヤ』

『ふーん……結構可愛い顔してるんだねえ』

『やっぱ良い尻してるニヤ……』

……なんだろう、寒気？

*****とある教会へ『ヘスティア・ファミリア』ホーム

ホームに戻って、本を開く。

そこに載っていたのは、魔法に関しての大まかな概要。

才能あるものに芽生える先天的なものと、神の恩恵によって発言する後天的なもの。

魔法とは、つまり「自己実現」……。

字を目で追っていくと、だんだん意識が曖昧になり、ぼんやりとしたイメージが湧いてくる。

ページに並ぶ字がじんわりと溶け、頭のなかに染み込んでいき、やがて光の中に僕は立っていた。

——魔法。

それは炎。猛々しくて熱い、弱い僕にはちっとも似合わない、赤い炎。

雷のように疾く、あの人に追いつきたい。

もし、叶うなら……英雄になりたい。

昔読んだお伽噺に出てきたような、「あの人」も認めてくれる、英雄に――

「――ル君。ベール君。何してるんだい？」

「う、あ……、――？」

気づけば僕はテーブルに突っ伏し、神様の声で意識を取り戻した。いつの間にか、寝てしまっていたのか。

――さっきのは、夢……？

「――じゃあ慣れない読書をして、まんまと眠気に襲われたってわけだ」

「そうみたいです……」

「ふふ、可愛いねえ……つ、？――つつ!？」

いつも通り、うつ伏せになった僕に乗った神様にステータス更新をしてもらっている。

今日の出来事を神様と話していたら、何やら神様の様子が変わだ。

「神様?」

「……魔法」

「――、え?」

「魔法が……発現した「えええええええ!!」へばにやつ!」

「神様……っ？」

あまりの驚愕な言葉に、思いつきり起き上がってしまった。急に転がされた神様は変な声を上げながら、ひっくり返っている。僕は真に受けることが出来ず、逆さまの神様に尋ねるのだった。

【ファイアボルト】

・速攻魔法

わなわなと震えながら、写されたステータスに加わった新たななる行を何度も見る。

そこには間違いなく、魔法の発現が記されていた。

「まさか、魔法まで発現しちゃうなんて……」

「かつ神様！まほ、魔法ですよ!?僕、魔法を使えるようになりました!!」

感激のあまり思わず羊皮紙を抱きしめる。

僕に魔法の才能なんて無いかもしれないと半分諦めていたのに、こんな急に使えるようになるなんて。

嬉しさを小躍りしていると、神様からこの魔法についての推測を聞いた。

魔法には本来、呪文の詠唱が必要だが、この魔法にはその呪文について1文字も記されていない。

恐らく、この「ファイアボルト」には詠唱が必要ないのだろう。

それが”速攻魔法”というワードの意味かもしれない、と。

「——まあ、とにかく明日、ダンジョンで試し撃ちでもしてくれば良いさ」

「え、明日……?」

「大丈夫っ心配しなくても、キミの魔法は逃げたりなんてしないぜ?」
「——、……」

何かお預けを食らった気分になり、何も言えなくなる。

僕は今すぐにでも使ってみたかった。この身体に備わった、新しい力を。

「すいません、神様……」

夜もだいぶ更けた頃、神様も寝静まったホームの扉をゆっくり開けて、外へ出る。

鎧などは置いていき、簡単な装備だけ整えて僕は夜の街を駆けていた。

——僕、今すぐ使ってみたいです!

「っはは!、……」

『レフィーヤ、置いてくよー?』

『あ、……はーい!』

胸が踊り、つい笑いが口が溢れた。

中央広場を通った時に誰かの声が聞こえたけど、気にしてる余裕なんて無い。

僕はあつという間に、ダンジョン上層へと足を運んだのだった。

*****ダンジョン上層*****

モンスターを探し、ダンジョンを彷徨っていると、一体の小さい影を見つけた。

小型のモンスター、「ゴブリン」だ。

強さもモンスターの中では底辺で、練習台には丁度いいだろう。

こちらに気付き、様子を伺っているゴブリンに掌を向けて、その魔法名を叫んだ。

「ファイア、ボルト——っ!？」

魔法名を言い終わる直後に、翳した手から炎が吹き出た。

火傷はしないまでも、確かな「熱」を感じるその火は、こちらへ飛びかかろうとするゴブリンを貫き、黒い灰へと変えた。

「……出た——、やつつつたああああああ!!」

夢じゃなかった。

ステータスに現れた魔法は、確かに僕のものだったんだ。

嬉しさのあまり、手当たり次第に魔法を撃ちまくる。

炎雷が迸る度にゴブリン等のモンスターを次々と魔石のみ残して駆逐していく。

時間も忘れてそんな事をしていたら、僕は上層でも割りと深めの階層まで来てしまっていた。

「——っはあ、はあ………しまった。こんな所まで来ちゃった。そろそろ……戻らないと……、——」

踵を返して、さあホームに戻ろうかという時。
僕の意識は既に、暗い底へ沈んでいた。

『、』
『……？』

何か聞いたことのある声。

眩しい光を感じる声を聞いても、まだ僕の意識がすぐに浮かび上がることはない。

+++++

迷宮の孤王——【ウダイオス】を討伐した私【アイズ・ヴァレンシユ
タイン】は、一人で相手をするという無茶を聞いてくれたリヴェリア
と一緒にホームへ戻っている最中だった。

「帰ったら皆驚くぞ。たった一人で、階層主を倒すとは」

リヴェリアは私がああのモンスターを倒したことを喜んでいる。
今回で、私は成長できたのだろうか。
それに私を「アリア」と呼ぶあの女性、彼女は一体……。

様々な事を考えながら階層を上がっていると、開けた空間で仰向け
に倒れる人の姿。

もしかして犠牲者が、と思ったがすぐに容態を診たりヴェリアがた
め息をついた。

それにしても、あの少年……ウサギのような白髪に純朴な顔。ここ最近ずっと考えていた人物の一人だった。

「……マインドダウンだな。後先考えずに魔法を使ったのだろう」

「——、この子」

「なんだ、知り合いか？アイズ」

忘れる筈もない。

私が逃したミノタウロスのせいで怖い目に遭い、ベートさんから嘲笑われた男の子。

酒場で悔しそうに走り去った背中を思い出す度、胸が締め付けられる。

「直接話したことは無いんだけど、あのミノタウロスの時の……」

「……成る程、我々の不手際で巻き込んでしまった少年か」

頭がとても良いリヴェリアは、少しの説明で全て察したみたいだ。彼女は格下の冒険者を見下したりしないし、むしろ努力する人を厳しくも支えてくれる人なのは知っている。

私は、彼女なら彼の事も打ち明けて良いと思った。

「——リヴェリア……私、この子に償いをしたい」

微笑みながら、リヴェリアが教えてくれた「償い」は、私の膝にこの子の頭を乗せて枕にしてあげる事だった。

本当にこんな事で意味があるのか疑問だったけど、私よりずっと賢いリヴェリアが「それで十分」と言うのだから、信じることにする。すうすう、と優しい寝息を立てる彼の寝顔をじっと見つめる。

前は駆け出しだったのに、もうこんな階層まで辿り着いた少年。

その成長の疾さに、一種の眩しさを感じてしまう。

「頑張って、いるんだね……」

柔らかい初雪のような白髪に指を通して、慈しむように頭を撫でる。

そうすることで、少しでも彼に許して欲しくて。

贖罪の感情とは別に、何か温かい感情が湧いてくると感じていると、何か違和感を感じた。

「……なんだろう、これ」

何かが膨らんでいる。

具体的には、彼の下腹部。率直に言って股間がやけに盛り上がっている。

武器をあんな所に隠すわけもなく、何となく何があんな形になってしまったのかは想像できていた。

「たぶん、これって男性器……」

モンスターや生物の書物にあった、人間にも存在する性器。

女性は穴の奥に子宮が存在し、男性には棒状の性器が生えていて、

「コヅクリ」をすするらしい。

ざっくりとした知識は小さい頃に読んだ書物に載っていた説明だけ。

コヅクリが強さに繋がるのか気になって、ロキ達に聞いたことがあるが、

『アイズさんはそんな事知らんでええねん！ 必要ないもんはとっとと忘れよ、なっ！』

『ふむう、もうちつと歳を食ってからでない、なあ？』

『そういうのはリヴェリアに判断を任せるよ。僕には少し不向きな案件だ』

『……私に丸投げをするな、全く』

『まあ、アイズには早いかもしれないねえ』

一斉に門前払いをされてしまった。

それ以降、私の目の届く所にその手の情報がある書籍は隠されてしまっている。

せめて最低限の知識だけでも、トリヴェリアに頼み込むと

『まあ、それは愛し合う男女にとって必要な知識だ。いずれアイズにそういった男が現れたなら、改めて教えようじゃないか』

そうやって、はぐらかされている。

だが目の前の少年が股間で盛り上げている「コレ」は、間違いなく男性器である事くらいなら私にもわかる。

排泄と、コヅクリとやらに使う器官。

人体急所の一つとも言われ、競技での対人決闘ではこの場所への攻撃は御法度とされている。

そこが、こんなにズポンを押し上げて大きくなっているのは、

「……腫れてるの、かな」

ここらの層には蜂のような毒を持ったモンスターは居ない筈だが、打撲などで腫れているのかもしれない。

股間がこんなに腫れてる事なんて、ファミリアの中でも見たことは無かった。

どうしたものかと悩み、私はふと彼の頭を撫でていたのを思い出して、それと同じように「ソレ」をもう片方の手で包み、上下に撫でた。

「……っ、あっ……」

「痛い、のかな。ごめんね、よくわからなくて……」

少しでも痛みが和らぐように、ゆっくりと盛り上がった部分を撫でる。

指で輪を作り、絞るような形の方がより撫でやすい、と段々動きもぎこちなさが無くなってきた。

心なしか彼の顔も、段々嬉しそうな顔になってきている気がする。

「よかった。これで良い、の？先の方は……少し、膨らんでるんだね」

「……っ、」

「びくん、てなった。気持ちいいの？」

肩や腰が少し跳ねるが、それは痛みではなく、ガレスやロキがマツサージを受けている時に見せる心地よさそうな時の反応に似ていた。先端に少し膨らんでいる部分を見つけ、そこを指で引つ搔くようにしてみたり、若干強めに握って扱くように動かし時は一際気持ちいが良さそうだ。

赤らんでいく頬を撫でて、何かを絞り出すように、股間を握る左手の動きを早めた時にそれは起こった。

「っうあ、……はっ、う……！」

「……っえ、何？何か出してるの？」

腰が暴れるように動くので、ぎゅっと先端まで絞り上げてからストップをかけると、ドクンドクンと手の中で脈打つ感触を感じた。もしかして、お漏らし？と勘違いしかけたが、ズボンが激しく濡れている様子はない。

若干布の中にぐちよつとした滑り気を感じはするけども、こんな少年に粗相の疑いをしてしまって、少し恥ずかしい。

息を荒くしながら、脱力していく彼を見ていると、何かお腹の奥がトクンと暖かくなり、再び頭を撫で始める。

そして、股間の腫れも引いてきた頃、彼の目蓋がゆっくり開かれた。

「おかあ、さん……?」

「——ごめんね、私は君のお母さんじゃない」

弱々しくつぶやかれたその言葉を、優しく否定した。
きつと寝ぼけているのだろう。

彼が最初に見たかった人物でいてあげられないのが、少し残念だ。

「げんか、く……?」

「幻覚じゃないよ……、」

「……つ、——!?つ、……!!!」

少しムツとしてしまった。

私と少年の触れ合いを嘘にされたくなくて、拗ねたような声が出る。

まるで親を探すウサギを手懐けたい、そんな気持ちで彼の頭を撫で続けていると、だんだん彼の顔が面白くなっていた。

ダラダラと汗をかいたり全身を硬くしたり、顔が青くなったり赤くなったり、目を見開いたり口があんぐり閉じなくなったり、の百面相だ。

そして急に、彼はガバツと膝から身体を起こした。

「っ、」

「ううううあああああはあはあああああ……——」

「——、……」

消えていく叫びを残して、正座の状態の私は一人取り残された。
私だと認識した瞬間、彼は器用に前転し続けながら更に上層へと去っていく。

紛れもなく、あの子が私を避けている証拠だった。

「なんでいつも逃げちやうの……？」

嘆きに近いその呟きに、応えてくれる人は居なかった。

6章 「理由（リリルカ・アーデ）」 交錯する疑心

*****とある教会へ『ヘステイア・ファミリア』ホーム

「ううつぐす、ううつぐす、また、また逃げちゃった……」

朝の日差しと、ベル君のすすり泣く声で目が覚めた。

身体を起こして、彼の寝床であるソファを見ると、布団に包まって丸くなっているベル君が居た。

「はあふ、……」

「僕の、ぼくの馬鹿ばがああああ……」

朝っぱらからベル君が泣きじやくっている。

ボクはやれやれとベッドから起き上がり、目をこすりながら彼の元へ歩み寄った。

「なんだい、ベル君……悪い夢でも見たのかい？」

子兎のように震えて泣いているベル君を怪訝に思い、ふとテーブルを見ると見覚えのある物があった。

それは、昨日ベル君が寝落ちしてしまうまで読み耽っていたという本だ。

「昨日読んだこの本のせいじゃないか？……——っ!？」

だがその本を手にとった瞬間、ボクは驚愕してしまう。

それはベル君がおいそれと持ち込めるような品物では無かったか

らだ。

まさかと思いき中身をパラパラと捲るが、ボクの嫌な予感は的中していた。

間違いない、これは魔導書^{グリモア}だ。

読むだけで魔法が発現する超一級品で、下手するとヘファイストスのところの装備以上の値が付くだろう。

どこで手に入れたのか聞いたら、酒場にあつた誰かの忘れ物なのだろうだ。

ボクはその話に思わず天を仰いだ。

そのようなことが、ある筈がない。

魔導書は高級品で、一度読むと白紙となつて効果を無くす。その事実を伝えたら、ベル君はようやく事の重大さに気付き、慌てふためいた。

真つ青を通り越して真つ白だ。ボクは彼を安心させるために、一肌脱ぐことにする。

「良いかい、ベル君。キミはこの本を読んでいない。そういう事にするんだ」

そう、これは不幸な事故。

巻き込まれたベル君も、忘れたとかいう『誰か』も、アンラツキィな事故ということにしようじゃないか。

「後はボクがなんとかする。任せておきたまえっ」

親指を立てて彼にニカッと笑う。さて、この紙束はどこぞの湖にでも捨ててこよう。

「……っ、だ、駄目ですってば神様!!」

「止めるな、ベル君!」

階段を上がる所で、後ろから再起動したベル君から物理的に引き留められる。

ベル君は素直で優しい子だから、罪悪感で潰されそうなのだろう。

「下界には、綺麗事では済まない事が沢山あるんだ!」

「こんな時に名言生まないで下さい!!」

結局ベル君が使ってしまった魔導書については、素直にお店の女主人とやらの謝罪するのだそうだ。

まったく、ベル君のそういうところが大好きだぞ!

*****迷宮都市オラリオく西メインストリート『豊穰の女主人』く*****

「すいません、すいませんっすいません!すいません!!!」

あその後【豊穰の女主人】の店主であるミアさんに、白紙の本となった魔導書を持って謝罪に来た。

とてもじゃないが僕の稼ぎでは全額弁償は難しい。

何の文字も書いていない、役目を終えた魔導書をミアさんは険しい目で手に持ち眺めている。

故意ではない事だけでも伝えたく、ひたすら頭を繰り返し下げた。

「それは大変な事をしてしまいましたね……ベルさん」

「ちよ、シルさん!?!なにさも他人事みたいに言ってるんですか!」

特に彼女を責めるつもりは無いけど、僕の単独行為と思われかねないので抗議しておいた。

するとシルさんは一瞬で目をウルウルとさせて、懇願するような表情でこちらを見つめる。

「やっぱり駄目……ですか?」

「すつごく可愛いけど、駄目です」

「てへ♪」

すぐに悪戯好きな顔をして、舌をぺろつと出すシルさん。

最近気づいたのだが、彼女の表情は変幻自在なのかもしれない。ついでに何でも許しそうになる。

そんな事を考えていたら、ミアさんはため息一つつくとゴミ箱に魔導書を投げ捨てた。

「み、ミアさん……?」

「忘れな」

つまり弁償や持ち主への謝罪も不要という事なのか。

それでは罪悪感に耐えられないので、何かしらの償いをしたくて謝罪に来たのに。

「で、でも……」

「読んじまったもんは仕方ないだろう。こんな代物、置いてく奴が悪いのさ」

「し、しかしですね……」

「――」

文句があるのか、とミアさんの視線から伝わる威圧が僕の体を硬直

させた。

何を考えているんだ僕は。

顔も見たことのない忘れ物をした人より、目の前の女性の方がずっと怖い。

「だ、ダンジョン行ってきます!!」

その視線から逃げるために、僕は一目散にその場から走り去る。

シルさんとあまり話せなかつたけど、あんな空気の中で話しかける勇氣なんて無い。

お店から出てリリとの待ち合わせ場所に向かおうとした時、後ろから声をかけられた。

「待つにや、少年♪」

「あ、えつと……なんですか、クロエさん？」

振り返った先に居たのは、黒髪に黒い耳を生やした猫キャット・ビープル 人のクロエさんだ。

僕はこの人にされた、その……アレな出来事を思い出してつい身構えてしまう。

された事もそうなのだが、この人見かけによらず強い腕力や身のこなしが備わっているので、一度捕まると抵抗できる自身が無い。

「んー……そこまで警戒されると、傷ついちゃうにやあ」

「す、すみません……」

「まあ、仕方ないかもにや。シルが弁当を渡し忘れてたみたいになん。相変わらず少し抜けてるんにやよねえ」

そういうクロエさんの手には、小さい包み。

いつもの布巾に入った小箱ではなく、梱包に使う南方の樹の葉で包んであるみたいだ。

急いで用意してくれたのかもしれない。

「わざわざすみません、シルさんにもお礼を……」

「シルは店の準備でもう忙しいにや。このポーチに入れば良いにや？」

「あ、はい。上の所が開くと思います」

「これにや？あ、あとこれの包みは捨てておいて構わにや行ってさ。シルはお店の洗い物で手一杯にや」

確かに、これから仕込みとかがあるならきつと僕の相手してる暇なんて無いのだろう。

クロエさんは素早く僕の後ろに回り込み、ポーチを開けて中に包みを入れてくれる。

「ありがとうございますいま……って、どこ触ってるんですか！」

なんだかんだこの人も、優しい人なんだなあ……と思っていると、急に臀部をゆっくり撫で回された。

「いやあ、いいお尻だからつい……。じゃ、ダンジョン気をつけるにやよ少年」

満足そうに目を閉じ微笑んだ彼女は、手を数回振った後お店の中へ消えていった。

お尻を触られた事への抗議をしたかったけど、もうそこに黒髪の猫人は居ない。

獲物を狙う獣の様な目をしていたかと思っていたら、軽いお調子者の様なテンションにコロコロと雰囲気を変える。

「掴めない人だなあ……」

年上の女性は、みんな考えている事がわからない。
神様も、エイナさんも、そして……あの人も。

ひとまずは、僕を待っているだろうサポーターの娘の元へ向かう。

彼女は小さい女の子だから、僕が頼りになる様にならないといけないんだ。

*****迷宮都市オラリオく中央広場く*****

*

いつもの待ち合わせ場所まで来たのだが、あの大きいバックパックを背負った女の子の姿は無かった。

「あれ、リリまだ来てないのかな」

周囲を見回していると、林の中にリリを見つけた。

良く見ると、あまりガラの良くない人達に絡まれているようだった。

もしかしたら相方が居ないと思って、サポーターを強要されていたりしているのか……？

「――、リリ！」

「――おい」

リリの元へ駆け寄ろうとした時、突然冒険者の人が視界を遮るように道を塞いだ。

髪を後ろに括り、軽装の戦士の様な格好をしたその姿には見覚えが

あった。

あの路地裏で、口論の末に剣を向けてきた人だ。

不敵な笑みを浮かべている彼に、僕は警戒心を高める。

「あ、貴方はあの時の……」

「お前あのガキとつるんでるのか。となると、何も知らないって訳じゃあるまいな」

「な、何がです？」

「惚けんな。お前俺に協力しろ……一緒にアイツを嵌めるぜ」

「なっ……!?!」

つまり、僕がリリを裏切る。——その誘いをしに来たという話だった。

とんでもない提案をしてきた彼に、僕は信じられない気持ちで目を見開く。

「そんな顔すんなって。お前だってアイツが溜め込んだ金、狙ってんだろ」

ニヤニヤと、いい拾い物をしたというような顔をして至近距離まで近づいてくる。

「冒険者同士、協力して役立たずの荷物持ちからたんまり巻き上げようぜ……なあ？」

その瞬間、リリが彼に乱暴されて身ぐるみを剥がされる映像が脳裏に浮かんだ。

そしてそのおぞましい行為に加わる、僕……

「――、嫌だ」

そんなことは、絶対にしないし、させない。
彼女は守るべき仲間であり、弱い女の子なんだ。
僕は絶対的な拒絶を瞳に込めて、彼を睨みつける。

「絶対に、嫌だ！」

「チツ、この糞ガキ……」

舌打ちと共に、彼はあっさり引き下がって去っていった。

あれではもしかしたら僕だけでなく、他の人にも声をかけているのかもしれない。

もし僕たち二人だけの所を多数で襲われたら……。

そうなたら、せめてリリだけでも逃してあげないと。

それとも誰かに相談を——と僕が思考を巡らせていた時、

「——ベル様」

僕を呼ぶその声で、意識を引き戻された。

+++++

ベル様は、待ち合わせ場所である男と何やら会話をしていた。

あの男が去ったのを見計らって、ベル様に声をかける。

「……ベル様」

会話の内容はおおよそ察しがついている。

ですが私はベル様の考えを見抜くために、探りを入れてみた。

「あの冒険者様と、何を話してらっしゃったのですか？」

「えっ!? えっと、いや、大した事じゃないよ！ 世間話とか……そ、それ

よりリリは？絡まれてたみたいだけど……」

……明らかな動揺。

聞かれたらマズい話をしていました、と自ら暴露しているようなものだ。

この人は嘘を平気で付ける人ではない。

リリのような者にも一切の裏を感じさせない……純朴で、無垢で、愚直な少年。

そんな人だから、リリは……。

「大丈夫だった？」

「……はい」

でも、それも最早どうでも良いことだ。

何度も繰り返してきた事。

奪い、奪われ、騙し、騙される。

「大したことありませんよ。さっさと行きましょ」

裏切られる事はあっても、この経験だけは裏切ってこない事だった。

信じられる、少ないもの。

信じたくは、無かった。

「もう……潮時かぁ」

自分でも意外な事に、

私は彼を、信じていたかったらしい。

*****とある教会へ『ヘステイア・ファミリア』ホーム

「——成る程……。例のサポーター君をねえ」

ダンジョンから戻ってきたベル君から相談があると持ちかけられ、話を聞いてみたらどうやらこの子が最近雇ったというサポーターの話だった。

その子っておそらくこの前イチャイチャしていた子供の事じゃないのか？と問い糾したかったが、ベル君の真剣な眼差し、一旦置いておく事にした。

「はい……。リリはどうも、悪い冒険者に狙われているみたいなんです」

どうにもガラの悪い子供達に絡まれて、サポーター君を騙してしまおうという話を持ちかけられたらしい。

もちろん、ボクのベル君がそんな真似をするとは微塵も思っていないけど、なんてけしからん事をするんだ。

今度その子を見かけたら、ボクが直々にお説教をしてやらねばならない

そんな事よりも、ボクが今一番気にしているのは……

「少しの間でも、匿ってあげられれば……」

「——ベル君」

「……はい？」

「君のそのサポーター君は、本当に信用に足る人物なのかい？」

ベル君は、とても素直な子だ。

そこが彼の良い所だし、愛しいとも思う。

だが、ベル君が見て感じたことが真実とは限らない。
むしろ……子供達から見えている世界というのは、思った以上に裏がある。

「――、え……？」

「ごめんよ、敢えて嫌なことを言っている。今までのキミの話聞く限り、彼女はどうもききな臭いんだ」

親として、ベル君には目を背けるべきではない事を教えてあげなければ。

「…考えてみてくれ。キミは本当にナイフを失くしたのかい？」

「――、」

「冒険者に絡まれていた件についてもそうだ……彼女はキミに、何かを隠している」

ベル君だってもう赤ん坊ではない。

出来る限り、サポーター君の行動を好意的に捉えて、後ろめたい情報には目を瞑ったのだろう。

話を聞いただけのボクなんかより、ずっとベル君のほうがサポーター君の真実が視えている筈だ。

視えていたけど、見ないようにしていた。

「……っ、……」

俯くベル君は葛藤しているのか、口を小さく開いては閉じてを繰り返している。

今の彼は現実を突きつけられた。後はどうするかを決めるだけ……

顔を上げたベル君の瞳に、迷いは消えていた。

そして、ボクがすることは――

「神様——」

もう、決まっているんだ。

始まりのとき

*****ダンジョン上層*****

「ここが10階層……」

「はい、今回の目的地です」

「——わあ……」

濃い霧が視界に広がる、広い空間が広がるダンジョン10階層。

そして所々に枯れ木のような樹木〔ランドフォーム〕が生えている。

この深さまでの探索を躊躇していたベル様を、過去のリリの経験やベル様の魔法を理由にここまでどうか誘導できた。

実際、ベル様の實力ならこの深さでの探索をソロでも深刻な事態には陥りにくいと思っている。

「……危ないから離れないでね、リリ」

「はいっベル様」

ベル様はリリが渡した「シュワイザーデーゲン」を手に周囲を警戒している。

大型モンスターに備えて、という口実の為に用意した2万ヴァリス近いそれなりの業物だ。

かなりの出費だったが、あの短剣が手に入ればおつりが来る上に適当な武器では怪しまれる。

おかげでまんまと、あのナイフをポーチに収納させることに成功した。

「リリ、これって……」

「はい、ランドフォームです。しかし……処理している暇は無いよう

です」
「っ、」

この階層に自生する植物を観察しているベル様に、大型モンスターである「オーク」が接近している事を伝える。

大型の中ではそこまで驚異では無いが、それでもその大きい体躯はハツタリではない。

怪力と、そして鈍器を扱う程度の知能は併せ持っている。

その驚異に後ずさるベル様。警戒は間違いじゃないが、このタイミングでその様子では困る。

「逃げてはいけませんよ、ベル様」

「そうだよね、オークを倒せないようじゃ……この先のモンスターなんて一生攻略できない」

オークがランドフォームを根ごと引き抜くと、その形状は棍棒の様に変形する。

この階層に出現するオークと、あの樹木が厄介だと言われている所
以だ。

「ランドフォーム……『天然の武器庫』！」

「ベル様、来ますー！」

サポータから両刃短剣バゼラードを抜き、身軽さを駆使して立ち回るベル様。
あの様子なら、互角以上。——だが、多勢が相手では火力不足のせいで分が悪い。

……そうでなくては困ります。

「……よし……！」

「ベル様、もう一匹来ます!!」

「!!」

——そろそろ頃合いですね。

リリは近くのオークへベル様の注意を向けて、その隙に気配を消して場所を移す。

「——ファイアボルト!!」

ベル様の無詠唱魔法がオークの表皮を焼いている。

あの魔法は速度で右に出るものはないが、その分一発の威力に乏しい。

時間をかけている間に、リリはベル様を見下ろせる高所……背後には上の階層へ戻る道に繋がっているポイントについた。

「ファイアボルト!——、勝った……やったよりりり!……あれ、リリ?どっ!?!」

リリはベル様の周囲にモンスターをおびき寄せる匂いを放つアイテムを投げ込む。

オークは鼻が利くので、すぐに集まってきてベル様を包囲した。

「リリ、どこなの!?!」

ベル様はオークの攻撃と、どこに居るかわからないリリを探して注意が散漫になっていた。

腕に装着した「リトル・バリスタ」へ矢を装填して、狙いを定める。

「リリ!どっ!?!返事して!!」

大きな声でリリを呼ぶベル様の背中がこちらを向いたタイミングを見計らって、矢を放つ。

数本の矢はベル様の装備を繋ぐベルトを切り裂いていく。

そして、最後に放ったワイヤー付きのボルトが腰から落ちたポーチへ刺さり、手繰り寄せてキャッチできた。

あのナイフの重みを感じて、見事作戦が成功した事に安心する。

「リリ!?何してるの!!」

「……ごめんなさい、ベル様。もう、ここまでです」

ポーチの行き先にリリは居るので、ようやくベル様に発見される。いくら抜けているとはいえ、この状況ならリリが裏切ったという事がわかってしまうだろう。

「あいつに全部聞いたんでしよう?」

「っ、——っな、何を!?!」

そう、リリの本性を知れば遅かれ早かれこの関係は終わってしまふ。

リリのために、ここで裏切らせてもらいます。

「折を見て逃げ出してくださいね。さようなら……ベル様」

彼なら、逃げに徹すれば生き延びる事は可能だろう。

ベル様には彼を守ってくれるファミリアや、愛してくれる方々が居るのだから。

……いくらでもやり直せますよ。

「リリ——!?!」

彼の呼び声が木霊する。

裏切ったのはリリだというのに、その呼びかけに応えるはずもない。

胸を締め付けるのは罪悪感。

あの少年はいつもリリに笑ってくれて、感謝してくれ……
それを踏みにじった者へ向けたあの瞳にあったのは、怒りではなく
困惑と心配だった。

「……人が良すぎですよ」

ベル様は底抜けにお人好しだった。

リリのように素性も知らないサポーターを快く受け入れて……。
冒険者との暮らしがこんなに心地よいとは思わなかった。
もしかしたら、この日々が続くかもしれないなんて思っていた――

「響く十二時のお告げ――シンダー・エラ」

リリは変身の魔法を解呪し、そのままダンジョンの出口を目指す。
こういう時のために、弱いモンスターしか出せない道は把握して
いた。

……ベル様が悪いんです。あいつにさえ、会わなければ……

——ううん、これで良いんです……ベル様も、冒険者なんですから。
リリの嫌いな、冒険者なんですから。

「――ヘファイストス鍛冶の神の武器」

黒い刀身に刻まれた神の銘。

ノームの質屋ではナマクラと言われたが、あれだけのモンスターを
切り刻む武器だ。

あの時は急いでいたが、価値のわかる場所など探せば沢山ある。
短剣を、リリは肌着の中にしまい込む。

「これなら、どこに行っても売れます。――目標の金額にだって、届く
かも」

『ソーマ・ファミリア』……。

人をどこまでも酔いしれさせる神酒を餌に、人を蹴落としてでも金を稼ぐ冒険者の集まり。

あのような、人の悪い部分を寄せ集めたようなファミリアにリリは所属しています。

「……リリの、自由の為なんです」

リリは、ファミリアから抜けるためにお金が必要なんです。だから……！

「——つきやあ!?……う、ぐ」

——階段を降りて広い空間へ出る瞬間、足を何かに取られて思い切り転んでしまう。

「——嬉しいじゃねえか。大当たりだ」

「うああ!?!」

足を引っ掛けられた——

そう自分を飲み込んだ頃には、リリの腹部に男のつま先が突き刺さる。

【ゲド・ライツシュ】……。リリがベル様と出会うまで雇われていた冒険者。

他種族やサポーターを見下しては威勢を張る典型的な冒険者様だ。

「散々舐めやがって……この、糞小人族が!」

「あ、ぐう!」

顔を殴られ、痛みで視界がチラつく。
腹を蹴られた吐き気と、顔中を灼熱する擦り傷に上手く頭が働かない。

「良いザマだな、こそ泥」

「あ、ああう、ああああ!!?」

髪の毛を掴み持ち上げられる。

あまりの痛みにも悲鳴を抑えられない。

男の顔には、嗜虐的な表情が浮かんでいた。

「そろそろあのガキを捨てる頃だと思ったぜ。ここで網を張ってりや必ず会えると思ってるなあ?」

「あ、網……?」

という事は、今の状況は仕組まれた状況……?

ベル様に近づいたのも、リリが行動を起こす為の誘導だったというのか。

「この階層でお前が使える道はそう多くねえ。4人で手分けしてたんだが……ひひ!!見事に俺の所に来るとはなあ!!」

顔を喜悦に歪めて、その残虐性を隠そうともしない男。

ローブを乱暴に破かれてしまい、肌着のみとなった状態で投げ捨てられる。

体を打つ痛みにも、再び視界が暗くなる。

「うあああ!!?」

「へへっ……はは!良いモン持ってんなあ、おい!ああ!!?」

「う、ぐう!」

ローブに仕込んでいたアイテムを物色される。
今まで集めてきた貴重な装備やアイテムを、根こそぎ奪われていく。

積み重ねてきた物が崩れ去っていく感覚。苦しいほどの喪失感。

「魔剣まで持つてんじゃねえか！こりやあとんだ収穫だぜ……にして
も」

リリの持ち物をあらかた懐にしまっていた男は、突然リリを品定めするような目を向けてきた。

そこに含まれた感情に、最初は意味が理解できなかった。

「小人族のメスの分際で、生意気な身体してたんだなあお前」

「ひ、なっ何を……？」

もしかして、リリを女として見ているのか。

今まで役立たずの穀潰し扱いで、そんな男が居なかつただけに困惑が大きい。

本能的な恐怖に身体が硬直して回避が遅れてしまい、男に脚を掴まれる。

股を開かれるような姿勢になった私を舐め回すように男の視線が這い回る。

「い、いやああ!？」

「てめえは冒険者としちゃあ役立たずだけどよお、俺がオンナとして使つてやつても良いぜ?」

「な、あ!？」

予想してなかった男の要求に、言葉が出てこない。

気づけば肌着として来ていたシャツは引き裂かれ、靴も奪われたり

リは下着だけの状態になる。

非力なりりに、伸し掛ってくる男を跳ね除ける力はなかった。

「嫌、やめてっ、やめて………ください、い」

「拒否権があると思ってるのか、馬鹿が！さっさとこの布つきれも脱げや、おらー！」

「ぎやあああああ!?!」

とうとう下着もむしり取られていく。

下衆な男に肌を晒す屈辱と羞恥に、甲高い悲鳴を上げてしまう。

その時、リリが稼ぎを貯める為に使っていたノームの貸し金庫の鍵が転がる。

「ああ？鍵………？なんだこりや。ファミリアの倉庫番でもしてたのかこいつ。………下もだつっうの、ノロマがあー！」

「嫌ああ!?!う、うう………」

ここで、何もかも失うのか。

財産も、これまでの努力も、女として………人として踏みにじられるのか。

「ははははー！なあに！一丁前に恥じらってたんだよ小人族が。………まあ、安心しろや。ガキを身籠るかしたらさっさと娼館にでも売り飛ばしてやるよ」

「みごも………!?!そ、そんなのっゆ、許して………」

「許すわけねえだろうが、散々コケにしやがって。満足するまで返してもらうぞ、お前のチンケな身体でなあ!?!」

おぞましい事を口にする男に、プライドも捨てて許しを請う。

胸を隠していた腕を強引に上へ持ち上げられて、リリの何もかもを眼前に晒してしまう。

「ああっ、い嫌あ！見ないでえ!!」

「ったく、小人族のメスってのはホントにガキみてえなナリしてんなあ。……俺のブツはでけえからよ、こいつで拵げといてやるさ。二度と同族とじゃ満足できねえぞ、おい？」

「ひいいい!!」

いつの間に男まで脱いでいたのか。

ズボンを膝まで下げて、見たくもない男の陰茎が目の中にぶら下がっていた。

黒ずんだその肉棒がリリの太股にべたりと乗ってきて、気色悪さに鳥肌が立つ。

——逃げなきや……!

「——あ？なんだこのナイフ……チツ、ナマクラじゃねえか……」

「——!!」

男はリリが脱げた拍子に落ちたあの黒いナイフを拾い上げるが、その本来の価値に気づかず落胆する。

注意がそれた隙に、リリは小石を拾い上げ男の眉間に叩きつけた。不意を突かれた男は、リリの拘束を解き痛みを目を瞑る。

「っ痛う!？」

「、——!!」

どうしてか、あの黒いナイフだけは奪われたくなくて男の手から掠め取る。

そしてなんとか立ち上がって、立たない腰を奮い立たせてその場から走り去った。

ズボンを下げていたこともあって男の反応は遅れる。

「おい、待てやっ糞小人族っ!!」

++++
++++
++++

あれからどのくらい走ったのだろうか。

男から受けたダメージが思ったより大きく、足元がおぼつかない。

普段は使わない道を、裸のまま一心不乱に駆け抜けた。

「は、は、はあっ……」

「——どこまで逃げてんだ？素っ裸でよお」

「!!」

曲がり道を抜けた先は行き止まりになっていた。

引き返そうとした時、後ろには追いかけてくる気配が既にあった。

どうしようかと逡巡している間に、男の姿が現れ再び追い詰められる。

「う、……」

「鬼ごっこかよ、おい……こそ泥」

「あぐっ!!」

逃げる事も出来ず、脚を払われて転んでしまう。

再びリリは男に押し掛かれて、身動きが取れなくなった。

「いちいち手こずらせやがっ、てー!」

「あぁう!!」

脚を広げた間に体を入れて、両腕を掴んで拘束される。

この体勢になってしまえばリリが抵抗しても、もうどうにもできない。
い。

——犯される。

本能的に、理解してしまった。

「大人しく犯されてろや。具合が良けりやあ、ちったあ優しくしてやっても良いんだぜ？」

「うう……、」

男の汚いモノが反り勃っていた。

リリのような小さい身体の種族でも欲情している事に戦慄する。ダンジョンという魔の領域が、男の本能を刺激しているのか。

「てめえみみたいな貧相な身体でもおっ勃つもんだな……っへへ」

「は、あ……」

硬くなった肉棒が、誰も受け入れたことの無いリリの女穴を擦るよ
うに添えられる。

ここで犯されて……そのままリリはこの男の物になってしまうの
か。

男の慰みモノにされた後、身籠った後は大きいお腹を抱えて、今度
は自ら知らない男達に腰を振る日々が始まる……。

自由を求めた先が、こんな結末になるなんて……。

「……、」

——でも、そうですよね。

これはあのお人好しなベル様を騙した報い。

だとしたら納得も……

……悔しいなあ。

神様、どうして……？

どうして、リリをこんなリリにしたんですか。

弱くて、ちっぽけで、自分が大嫌いでも何も変わらない、リリに――。

男が体重をかけてくる。

とうとうリリを蹂躪する行為が始まる。そして、リリの自由は……
――終わってしまうのですか……？

「さて、汚えダンジョンってのがアレだがまずはお前の使い心地を……んだよ濡れてねえじゃねえか。つたく、これじゃ入らねえぞ……」

「――ファイアボルトお!!」

「う、ぐあああ!!?」

炎雷が迸り、男の背中を焼く。

激しい閃光に目が眩むが、瞼を開いたりりの目の前に居たのはあの男ではなく、白髪の少年だった。

バゼラードを構え、魔法をいつでも撃てるように男へ空いた左手を向けている。

「リリ、遅れてごめん!!」

「べ、ベル様……?」

何故ここに居るのか。

リリは、この少年を騙した筈だ。

その証拠に、左手にはベル様から盗んだナイフが握られている。まさか、助けに来たともいうのか。

「て、てめえ……」

「今すぐここから消えて下さい。……僕は貴方を、許さない!!」

ベル様の声から、感じたことの無い『怒り』が伝わる。
何故憤っているのか。

リリが、襲われていたから……？
ベル様を騙していた、リリを……。

「糞が！偽善者のガキが吹いてんじやねえぞ！」

「偽善だろうが構わない。もしリリに手を出すって言うなら、僕が相手だ！」

「……、チイツ！」

男はそんな捨て台詞と共に去っていく。
リリが困惑している間に事態は収束した。

+++++

僕がリリの事を神様に相談した時から、想いは決まっていた。

—— 神様……僕はそれでも、あの娘が困っているなら……助けてあげたいです。

寂しそうなんです、その娘。

神様と出会う前の、僕みたいに——

「はあ……リリ、無事だよね？何ともない？」

「ベル様……どうやって、ここまで？」

「いや、霧で良く見えなかったんだけど……あの後、別の冒険者が来たみたいで」

10階層でオークの囲まれていた時、どこからか颯爽と現れた人が次々とモンスターを倒してくれた。

霧が深く、リリの元へと急がなくちやいけなくて誰だかわからなかった。

グリーン・サポータもあの階層のどこかに落としてしまったけど回収する時間はなかった。

「周りからオークが居なくなっちゃって……それで、すぐに追ってこれたんだ。間に合ってよかったよ」

「どう、して……?」

「え?」

リリは啞然としていた。

まるで、今の状況が呑み込めていないというふうな。

と、いうよりも……リリってば裸じゃないか!?

あの冒険者に破かれてしまったのか……。

「——どうしてですか! どうしてリリを助けたんですか!?! どうしてベル様はリリを見捨てないんですかあ!!」

「え、ええ?」

ひとまず何かでリリの身体を隠してあげないと、と焦っていたらそんな事を聞かれてしまった。

見捨てるなんて、考えもしなかった。

そして何より戸惑ってしまうのは、リリは何かに怒っているらしい。

「ご自分が騙されたことに気付いてないんですか? リリが驚かせようと思ってナイフを持っていったとでも思ってるんですかあ!?!」

「っと、リリ?」

リリは怒りに任せて、何かを地面に叩きつけた。
……神様のナイフだ。最後まで持つていたらしい。

「ベル様って何なんですか!?馬鹿なんですか!間抜けなんですか!救いようのない阿呆なんですか!」

「リリ、落ち着いて?」

「無理です!!」

突然感情を爆発をさせているリリを、落ち着かせようと宥めるけど駄目だった。

僕としてはリリを怒ってなんて居ないし、ともかく服を着てほしい。

「ベル様は何にも気付いてない……」

それからリリは、これまで僕に隠していたことを吐露していった。報酬を多めにくすめていたこと。

買い出しのお釣りをくすねていたこと。

影で悪口を言っていたこと。

僕に言えなかったことを、強い感情と一緒に全てさらけ出している。

「——わかりましたか!?リリは悪い奴です!盗人です!ベル様に嘘ばかりつく、最低の小人族です!」

でもそれは、僕がリリを助けない理由にはならない。

確かにいけない事ではあるけど、リリが実は優しい子なんだって事を信じてる。

その程度の事は、僕が許せば済む話なんだから。

「それでも……それでもベル様はリリを助けるんですか?」

「うん」

「どうして!？」

「お、女の子……だから?——あつ」

「馬鹿あ!」

リリを助ける理由……。

とっさに考えて思いついたことを言ってみただけ、失言をしてしまった気がする。

リリも裸なままだから、面と向かって言うのは流石に恥ずかしかった。

「またそんな事言つて!ベル様は女性なら誰でも助けるんですか!信じられません!最低です!ベル様のスケコマシ!女ったらし!スケベ!女の敵い!!」

……リリは信じる事が出来ていなんだ。

僕が信じているリリ自身を信じていない。

だから僕の想いを、正直に伝える事にした。

「じゃあ……リリだから、だよ?」

「」、

あの時、僕に声をかけてくれて。

ひとりぼっちだった僕を受け入れてくれた神様。

寂しそうなリリを見ると、

同じ孤独を味わった僕には見捨てるなんて出来ない。

「僕、リリだから助けたかったんだ」

可愛い女の子だから。

サポーターとしてとても頼りになるから。

そんなものは些細な事で、
出会ったのがリリで、相手が僕だったから、助けてあげたいと思っ
た。

「リリだから、居なくなつて欲しくなかつたんだ」

「――」

「理由なんて、見つけられないよ」

くしゃつと歪んだ顔に、もう怒りは無かつた。

僕を睨んでいた瞳はどんどん滲んでいく。

ポロポロと大粒の涙が溢れている。

「リリを助けるのに、理由なんて」

「っ、ひう、あう……」

誰かに必要とされたくて、

誰かと一緒に居たくて、

そんな『誰か』になつてあげたかつた。

「リリ……困つたことがあつたら、相談してよ。……僕馬鹿だから、
言つてくれないとわからないんだ」

腫れた頬を、ゆつくりと撫でる。

身体の傷がいつか治るなら、

僕らの関係だつて、やり直せますよね？ 神様――

「――ちゃんと、助けるから」

「ああああ、わああああ……!!」

涙が滝のように流れ、字の通り泣き崩れるリリ。

そつと抱きとめて、土で汚れてしまった彼女の髪を撫でてあげる。

あとは、彼女の気持ちを聞くだけ。

「ごめ、ごめんっごめんなさいい……!!」

「……うん」

「ううあああ、わあああああ……!!」

涙に濡れた謝罪の言葉は、しっかりと僕に届いている。

後悔は今だけして、また一から始めればいい。

今の彼女には、僕が居るんだから。

+++++

散々泣き腫らしたりリリは、今はベル様に抱きしめられている。

ベル様の暖かさが、じんわりとリリの身体を包んで……

———そういえば、今リリは裸でした。

「す、すみません……ベル様。もう大丈夫です」

「うん？そっか……え、えっとじゃあ何か隠すものを……」

「……、あっ……」

ベル様は、リリを見ないように視線を宙へ泳がせて、周りをキョロキョロしている。

その時、リリのお腹に当たる硬いモノの感触に気づいた。
気づいて、しまった。

「ベル様……これ……」

「うわあ!?!ご、ごごめんよりり!!これはその、生理現象というかその……」

「——嬉しいです」

「……へ?つて、リリ!?!」

リリはその硬いモノの正体が何か、先程まで別の男に知らされていた。

何故硬いのか、その原因も。

先程までは嫌悪と恐怖の象徴だったのに、ベル様と触れ合ってる今となつてはとても愛おしい。

ズボンを下着ごとずらして、その熱い肉棒と対面する。

「お、大きい……素敵です、ベル様」

「リリ、ちよついきなりこんな……」

「リリでこんなに大きくしてくれてるんですか？だとしたら、凄く嬉しいです」

この大きなベル様を、受け入れたい。

逞しい、男性の象徴。

リリのお腹がトクンと鼓動している。

まるでこの男性に全てを捧げるために、身体が準備を始めているようだ。

じわ、と蜜のようにリリのアソコが濡れていく。

「ベル様……リリは、ここで奪って欲しいです」

「り、リリ……」

「あの男に汚されそうになって……怖かったです。誰かの物になってしまうのが、あんなに恐ろしいなんて」

「……」

「叶うなら、リリのことを……ベル様の形にして貰えませんか？」

溢れる蜜を塗りつけるように、ベル様のおチンチンに股を擦りつける。

まるではしたない娼婦の様で恥ずかしい……。

でも、少しでもベル様にリリを求めて欲しくて、リリのおつゆで

おつきいおチンチンを濡らします。

クチュツと割れ目が亀頭を包み、後は腰を下ろすだけ。

「ベル様……」

「リリ、僕は……」

「貫つて下さい……リリの、初めてを」

「う、あ……リリ！」

正面から抱き合うように、彼と繋がる。

ゆつくりと、ベル様がリリの中に入っていく。

——とても太くて、大きい……

プツ、プツと肉が切れる感触。ああ、捧げられた……と、結合部から蜜に混ざる赤色に心が震える。

トンツとリリの一番深い所まで到達した。

肉を裂く痛みや、腹を押し上げる苦しみはあるが、それを押しつぶすほどの快楽と幸福感。

今リリは、ベル様に全てを奪ってもらえている。

「ご、ごめん……リリ、僕もう……」

「っ、……はい、お願いします。……ベル様の全て、リリに吐き出して下さい」

「うう、リリい!!」

最後が近いとベル様の表情で悟ったりリリは、両手両足でベル様を抱きしめる。

その瞬間、お腹の奥に熱い濁流の様な衝撃が来た。

子宮の中を暴れまわり、そこから伝わる温度の高さに目が眩む。

「ベル様の、子種……あったかいです……」

どのくらい、その時間は続いただろうか。

ベル様と抱き合い、つながった部分からは彼の精液が流れ込んでくる。

気づけばお腹がぼっこり膨らむくらいまで注がれた。

「——幸せです、」

「り、リリ?……リリ!?!」

先程までの緊張感から解き放たれた所で、リリは意識を手放した。身体を満たす、ベル様の暖かさに包まれながら——。

*****ダンジョン上層*****

「——チツ、あの糞小人族に、糞ガキが……」

冒険者の男は、背中から煤を出しながら、ダンジョンを弱々しく進んでいた。

ベルが追い払った後、リリル力を襲ったあの広間に戻ろうとしているところである。

「へっ、だがあの魔剣がありやあ……今度こそ鬱憤を晴らさせて……」

「魔剣つてなあ、コイツの事ですかい?旦那あ」

「……ああ?」

そこに現れたのは、男と裏で取引をしていた【カヌウ】というソーマ・ファミリアの男だった。

片手には、あの魔剣が握られている。

「おお、回収しといてくれたのか……なら話は早え、この後」

「――旦那あ、俺らはもう十分稼げたんで……もう用済みなんでさあ」
「……は？」

啞然とする男。

すると奥から、カヌウの仲間の二人が何かを抱えてやってきて、その何かを放り投げてきた。

足元に転がっていたのは

「――キラアアント!?しよ、正気かてめえらあ!!」

布にくるまれた、頭だけのキラアアント。かろうじて息があるようだ。

キラアアントは、瀕死になると仲間を呼ぶ信号を出す。

すると、キチキチ、と音が反響してきた。

もう既に、周囲はキラアアントで囲まれている事だろう。

「にしても旦那あ、見事にアーデの隠し財産まで見つけてくれるたあ俺は嬉しいですよ」

「な、なんの話だ!?!」

「まあ……こういう事です、ぜー!」

カヌウが魔剣を振るった瞬間、赤光が男の脚へ放たれる。

灼熱を伴った炎は、いとも簡単にその片足を炭化させた。

「――つぎやああああああ!!」

その痛みに悶絶し、地面を転がる。

集まってきたキラアアントは、瀕死になった男のところへゆっくりと群がっていく。

「じゃあ、あつしらはこれで……逃げ延びれば、また儲け話でもしま

しようや」

「ふ、ふぎげ、ふぎけるな……なんで、なんで俺がここでえええ!!」

「……冒険者つてなあ、簡単に信じちや駄目ですぜ。旦那?」

「う、うあああああ!!!」

ダンジョンの上層にて、男の絶叫が響いた。

だがその悲鳴も、聞いていたのはたった3人の冒険者。

その後ゲド・ライツシュの行方を知るものはおらず、交友関係も狭かったため搜索願いも出されはしたが誰も請け負うことは無かった。

こうしてまた一人、冒険者がダンジョンの贄となるのだった。

*****オラリオ・冒険者ギルドくエントランスく*****

「すみません、エイナさん。色々心配かけたみたいで……」

あの後、僕はリリを背負ってダンジョンから脱出した。

予想より遥かに遅い時間になってしまったが、エイナさんへ帰還の報告をしにそのままやってきた。

エイナさんは本当に心配してくれていたのか、怒るのではなくまず安堵して僕の帰還を喜んでいいる。

そして、リリの事を調査して、他の冒険者や神様へ働きかけてくれていたらしい。

「あと、プロテクター……失くしちゃいました」

「いいよ。ベル君が無事なら」

オークとの戦闘で、僕はグリーン・サポータを失ってしまった。リリを助けるためには仕方なかったとはいえ、あれをくれたエイナさんには申し訳無かった。

エイナさんは笑って許してくれているけど、可能なら10階層で探してみたい。

「……それで、どうするの?」

「え、えっと……」

エイナさんは、僕の背中で眠る、布一枚だけ羽織ったりリリを困ったように見ていた。

ひとまず、リリは近くの宿で休んでもらおう。

そして……それから――

*****迷宮都市オラリオく中央広場く*****

*

ダンジョンへの玄関とも言えるこの中央広場。

朝早くから、ダンジョンへ向かう冒険者の数々を、リリは一人噴水の前で眺めていた。

「――……」

今日もバックパックを背負い、いつもの待ち合わせ場所に居た。

あの日リリはベル様に救われて、途中で気を失ってしまった。

目が冷めた時には見覚えのない宿でリリは寝ていて、宿泊代も誰かが既に払っていた。

——また、一人になってしまった。

あの少年との関係は、もう終わってしまった。

「言われてみれば当然だ。」

武器を盗まれて、半ば強引に交わった薄汚い小人族を、誰が迎え入れるのでしょうか。

裏切り者のリリは、償いとしてベル様に謝罪と、一度きりの情交……。

代償としてリリはここ最近の財産と、ベル様との繋がりを失った。こうして失うための行いを、また始めないといけないのだろうか。

「——サポーターさん、サポーターさん」
「！」

どこか期待していた、ここに来る筈のない人の声。
振り返ると、そこにはリリを救ってくれた白髪の少年。

「冒険者を探していませんか？」
「、——あ」

淀みのない深紅ルベライトの瞳でリリを見つめる。

そこから感じた意思に、心が震えた。

「混乱しているんですか？でも、今の状況は簡単ですよ」

ベル様は、始めようとしている。

リリとベル様の出会いを。

これまでの事を全て受け入れ、リリという存在を赦し、二人の未来を望んでくれている。

「サポーターさんの手を借りたい半人前の冒険者が、自分を売りこみに来ているんです」

「ベル様……」

だからこうして、あえてリリがベル様に使った文句を繰り返している。

あの時と状況は一緒だ。

でも、明らかにあの時と違うことがあった。

以前のリリは、自分のため。

ベル様の事なんて、見てなくて。

ベル様はリリの事なんて知らなかった。

今はベル様が、リリを見ている。

リリという存在を知った上で、求めてくれている。

「また僕と一緒に、ダンジョンに潜ってくれないかな……リリ？」

差し伸ばされた手を、躊躇いながらも掴む。

そこから感じる、彼の体温と、それ以上に暖かな感情。

リリの芯から、湧き上がる想い。

—— 嗚呼、

「はい、ベル様！」

私の生きる、新しい理由が……見つかりました。

7章 「剣姫（アイズ・ヴァレンシユタイン）」 和解

僕とリリが、改めてパーティとしてやっていく事を決めた後の事。
その日は探索を中止して、僕たちはホームへ帰ることに。

「……………」
「……………」

隣を歩くりりの頭の上では、機嫌が良さそうにパタパタと耳が動いている。

つい気になって、指でつついてみた。

「あつ、ふやん！…………ベル様あ♪」
「うあつ、ごっごめん！つい……………」

無意識にやってしまった。

思ってみれば、リリがサポーターとして僕にパーティの話を持ちかけた時も、つい本物が気になって触ってしまったのを思い出す。

リリの本来の種族は小人族バルウムのだが、彼女の耳と尻尾にはしっかり感覚も体温もある。

…………しかもちよつと敏感らしい。

顔を赤くして、尻尾を嬉しそうに振る今の彼女はどこから見ても
犬シアン・スロープ人にしか見えない。

「驚いたよ…………。まさか、変身できる魔法があるなんて」

「ええ。ですので、この能力さえ知らなければ誰も今のリリをリリだ

と解りません。暫く姿を見せなければ、ダンジョンで死んだと思われるでしょう」

「なるほど……でも、リリはそれで良いの?」

「ええ。ベル様のお側に置いてくださるのであれば……リリはそれだけで、満足です」

トロンとした目で僕を見つめるリリ。

その瞳には情欲と、僕への親愛が籠められていた。

ダンジョンでの出来事を思い出して顔が熱くなる。

リリを助けた後……その場の雰囲気だったり、僕も戦闘で気分が昂ぶっていたのもあって、彼女と……シてしまった。

嫌なんかじゃないし、とても嬉しかったけど……。

彼女の体格が小さくてあまりにも締め付けるからあつという間に達してしまつたとか、顔に殴られた痕を付けた彼女を抱くのは暴漢になつた気分で背徳感が……って何を考えてるんだ僕は!?

最近、性欲がどんどんマズい方向に向かつている気がする……。

「——それより、ベル様はこのままで良いんですか?」

「……え?」

急にリリは不安そうな顔になり、機嫌を窺う声色になる。

「リリは、ベル様を騙していたんですよ?ベル様の好意につけ込んで、裏切つたんですよ?」

「——、」

「このまま許されてしまつたら、リリは……」

「……大丈夫だよ。さ、行こ!」

リリは真面目な子だから、きつと不安なんだろう。

でも、大丈夫。

これから会う神様は、そんな気持ちも晴らしてくれる方なんだ。

*****とある教会く『ヘステイア・ファミリア』ホーム
く*****

「リリルカ・アーデです。初めまして」

「キミが噂のサポーター君かあ……ベル君から話は聞いてるよ」

ホームの廃教会で、待っていた神様がリリと対面した。

リリはどこか緊張した面持ちで、伏し目がちに名乗っている。

二人だけのお話をする必要があるだろうし、僕は一度席を外す事にした。

「僕、下でお茶でも淹れてきます。ああ、でもコップが2つしかないです……」

「なあに、気にすることはないさ！僕とベル君と一緒に使えば良い！」
「神様も、そんな冗談言うんですねっ」

僕が神様と食器を使い回すなんて畏れ多い事する訳がない。

珍しい冗談に笑いつつ、僕は地下の部屋に行く。

……リリ、神様と仲良くなってくれると良いなあ、

「あれ……あのお茶つ葉、どこに置いたかな……」

以前リユースさんに頂いた茶葉を、棚の中に見つけた。

せっかくだし美味しいのを飲んで貰おう。

お湯が入ったヤカンから、ポットに注ぐと良い匂いが漂う。

「お待たせしましたー」

お茶の入ったコップを、神様が腰掛けている横に並べる。

何やらヒソヒソとリリに耳打ちしている所から、だいぶ距離が縮まっているように見える。

「遅くなって、すみませっ!?!っ、か、神様?」

「—!!」

「—さて、改めまして……初めまして、サポーター君。」

急に顔が柔らかい物体に包まれた。

どうやら僕は神様に抱きしめられているらしい。

豊かな乳房に挟まれて、女性特有の匂いにクラクラする。

「ボ・ク・の、ベル君が世話になったねえ……」

「かかかっか神様ああ」

「……っ、——!」

リリの前でじゃれつかれてしまうのは、とても恥ずかしい。

きつとリリは呆れている事だろうけど、ガツチリ頭をホールドされてしまつて身動きが取れない。

というか、マズい……股間がムズムズしてきてしまった。

神様にバレたら折檻なんてレベルじゃない!

「——いえいえ、こちらこそベル様はいつもリリに、お優しくして貰っていますから♪」

「ううあ!!リリ、何シてるの!?!」

どうやって神様の抱擁から抜けようと思っていたら、腰にリリが抱

きつてきた。

そして、硬くなった僕の股間に頬ずりされてしまう。

——そんな事されたら、収まらなくなっちゃおうよ！

「ななんあなんなんああ!? サポーター君!! いきなりソコを責めるのはズルいぞ!!」

「え〜? だってえ、リリってばもう身も心もベル様の物ですからあ、ご奉仕させて頂かないとお」

「にしたって昼間に神の御前でなんたる破廉恥な!! そんなことしたら天罰が下るんだぞ!」

神様、すみません……一番破廉恥なのは僕だと思えます。

「すん、すん……はあ、素敵な香りですベル様……。早速あの時の再開を……」

「ボクの話聞けえええ!! ええい、こうなったらベル君をこの場でボクの虜に、」

「か、神様? リリ……?」

話の流れが不穏になってきた。

神様の目の前で致すなんて、不敬なんてもんじゃない。

睨み合う二人の注意が僕からそれたのを見計らって、拘束から抜けて一気に走り抜ける。

「そ、そうだ!! エイナさんにギルドへ行つて会わないと!!!」

「ベルくううん!」 「ベル様!」

僕を引き留める声が聞こえるけど、応えるわけにはいかない。

既に僕の股間は痛いくらい膨らんでいる。

どこか物陰で、収まるのを待たないと……。

だけど、さっきの二人にはイヤなわだかまりを感じなかった。
リリはもう、僕達の新しい家族みたいなものだ。

——良かった……。

*****オラリオ・冒険者ギルドくエントランスく*****

来週から、【ロキ・ファミア】は大規模遠征を行う。

目標は未到達領域、59階層——。

この遠征で、私は更に強くなりたい……。

——でもその前に、謝らなきゃ……。

手に持つのは【グリーン・サポータ】。

彼が、10階層で落とした装備。

私のせいで傷ついた、白髪の少年。

——これを返して、今度こそ。

彼に謝罪する、きっかけになれば良い。

「——まったく、礼も言わずに叫んで逃げてくなんて。ベル君つた
ら失礼な！」

あの子の専属アドバイザーをやっているという、エイナ・チュール

さんに事情を説明したら、彼に怒り出してしまった。

きつと姉のような存在なのだろう。

彼は悪くないのだけれど、そこに彼女とあの子の関係からくる感情もあるだろうから黙っていた。

「……それで、直接返したくて」

「——、わかりました！では私も協力します。彼が逃げ出さない様……いえ、逃げ出せない様作戦を立てましょう！……そうですねえ、面談用の個室に閉じ込めるとかつ」

……どうしよう、勝手に話が進んでいく。

普通に彼に謝罪する機会さえあれば良いのだが。すると見覚えのある姿が、ギルドにやってきた。

「えっと、エイナさんは……」

「——ベル君？」

「——？」

彼がこちらへ振り返っている。

エイナさんの方を見た後、すぐに目が合った。

「!!?、——!」

「ちよ、ベル君!?!」

彼は私を認識すると、そのまま来た道を走って戻っていく。

まずい、また逃げちゃう……。

私は咄嗟に跳躍して、宙に舞った。

「っあー!」

「……っオウ、なんでえ」

「、あっすいませ……」

歩いていた冒険者にぶつかって転んだあの子の目の前に私は着地した。

彼が起き上がる拍子に私のお尻に顔をぶつけたけど、特に怪我はしてないと思う。

私に敵意はない、と彼の瞳を見つめる。

「……」

「あ、剣姫だ」

「……、つつつつ!!!」

顔を真っ赤にしながら、ギルドに彼の絶叫が響き渡る。

……どうして?」

++++++
++++++
++++++

「この前、ダンジョンでオークに襲われたよね?」

混乱する彼にエイナさんが事情を話して、なんとか二人きりにしてもらった。

今は席について、10階層での時の話をしていた。

私は預かっていたグリーン・サポータを彼に手渡す。

「これ、キミが居なくなっただ後で落ちてたから……返そうと思って」

「……、!それじゃあ、あの時助けてくれたのは?」

やはり、あの時は私だと思ってなかったみたいだ。
……今なら、伝えられる。

「――、ずっと謝りたくて……」

「っ、え？」

彼は困惑していた。

急な話で戸惑っているのかもしれない。

ちやんと、説明しなきゃ。

「……私が逃したミノタウロスのせいで、キミの事をいっぱい傷つけたから」

駆け出しの彼が死ぬ寸前まで追い詰められて、

ベートさんがその事で誇ってしまい、笑い者にさせてしまった。

償って……彼に、許して欲しかった。

私は、誠意を込め頭を下げる。

「――ごめんなさい」

「！、ち、違います!! ヴアレンシユタインさんは全然悪くなくて、むしろ助けて貰った命の恩人で……というか、謝らなきゃいけないのはお礼も言わずに散々逃げ回った僕の方で……ごめんなさい!」

「――、……」

彼は頭を振り、私は悪くないと一生懸命話してくれている。

そこに、あの酒場から走り去った時に感じた悲しみは無い。

――良かった……。やっと謝れた。

「――こんな短期間で10階層に辿り着いて、凄いね」

朝は誰にも言わずにホームの扉を飛び越えてどこかに消えてしまった。

方向からして、この路地に通った筈なのだけど……。

「うわあー!」つ、きやあー!」

路地の曲がり角で、誰かにぶつかってしまった。

声からして男性……少年かな?

こんな時間に会うことは探索前の冒険者の可能性が高い。

私は衝撃で体勢が崩れたまま、痛みでクラクラしつつもなんとか謝罪する。

「あぐつ、ご、ごめんなさい……」

「す、すみません!大丈夫ですか?……、あつ」

ぶつかつた人^{ヒューマン}族の少年は、すぐさま謝り返してこちらに手を差し伸べてくれている。

男性は苦手なのだけれど……少年からは男臭さを感じないし、好意を無駄にする訳にいかない。

なんかこの子顔が赤いけど、もしかしてどこかにぶつけてしまったのかな。

心配に思いつつ、彼の手を取る。

「——つ、ありがとうございます。それと、ごめんなさい」

「い、いえ……こちらこそ。……あ、あの」

「——……」

——なんだろう。

彼の手から感じる、このポカポカとした感覚。

胸が早鐘を打ち、じんわりとお腹の奥が暖かい。

まるで始めてアイズさんに出会った時の様に、顔がカアッと熱い。

触れ合う指が、重なる手のひらが気持ちいい……このままずっと触れ合って、

「——す、すみません。え、えっと」

「……、ふああ!?、ごめんなさい! 私ったらはしたない。うう……」

——な、ななな何をしているの、私ったら!?

アイズさんへの妄想だけじゃなくて、こんな出会ったばかりの少年になんてどうかしちやったのかな……。

少年も赤くなつて目を逸らしてるし、きっと変な子だつて思われてる

……!

は、早くと話題を変えなきゃ……。

「——そうだ! この辺りで【剣姫】、アイズ・ヴァレンシユタインさんを見ませんでしたか?」

「!?」

すると、なぜか少年の様子がおかしい。

明らかに狼狽して、汗をかき始める。

「……もしかして、貴女はロキ・ファミリアの?」

「そうですね……もしかして、なにか知ってるんですか?」

「えっと、僕はその、急いであるのでこれで……」

「そんな! ちよつと待ってください——っ!」

「うわ、危ない!」

逃げようとする少年の手を掴むが、予想よりも動きが速くてつまずいてしまう。

すると彼が咄嗟に私を受け止めてくれた。

——その瞬間、私の身体を衝撃が貫く。

「だ、大丈夫です」「ふああああ!!」「!?!」

感じたことの無い快楽という名の毒が全身を駆け巡る。
しかしそこに不快さは無く、むしろもつと感じたいと本能が叫んでいる。

腰が抜けて、その場にへたりこんでしまった。
まるで長時間走り続けたみたいなのに、息が荒い。

「あ、あの……」

「はあ、はあ、な……何ですか今の……貴方一体……」

「い、いや僕は何も」

「はあ、はあ……怪しい」

「――!」

——この子に何かされた?

そう疑った瞬間、彼の動揺も頂点に達してしまった。

「ご、ごめんなさああああああい——!!!」

「ちよっ!?!」

遂に彼は、絶叫しながら逃げ出した。

アイズさんの事といい、今の現象といい……。

——絶対なにかある!

「――待ちなさああああああい!!」

気合を入れて立ち上がり、すぐさま彼が走っていった方向へ追いかける。

絶対捕まえて、洗いざらい吐いて貰うんだから!

*****迷宮都市オラリオく北都市壁上部く*****

私は、彼に伝えていた場所で先に待っていた。
他のファミアリアと表立って訓練するのは問題があるから、人気のない場所である必要がある。

朝日はまだ登っておらず、少し空が白んでいる頃だった。

この訓練には、私にも大きな理由がある。
あの子の成長の秘密が解れば、もつと強くなれるかも知れない。
でもそれは、あの子を利用するって事で……。

「……」

すごく罪悪感を感じる。

あの無垢な少年を騙しているようでとても辛い。
でも、この事情を彼に伝えても困らせてしまうだけだろう。

——返さなきゃ。せめて精一杯
しっかりと彼の手伝いをする決意をしていた時、息を見出しながらこ
ちらに近づいてくる彼の姿が見えた。

「——はあ、はあ……お、おはよござ、ます……」

「……何かあったの？」

「い、いえ……ちよつと、森の妖精に追いかけて……」

……この子、天然？

「えつと、それで……ヴァレンシユタインさん」

「……アイズ」

「はい？」

「アイズで良いよ。みんな私の事をそう呼ぶから。……嫌？」
「いい、嫌じゃないです!!」

余所余所しきを感じたのでなんとなくそんな事を提案したら、許諾してもらえた。

彼は顔を赤くしながら、うつむきがちに呟く。

「あ、アイズ………さん」

その姿には、どこかファミリアの照れ屋なエルフの少女を思い出した。

彼女と彼はもしかしたら気が合うかもしれない。

「と、ところで！訓練って僕は何をすれば……？」

「……何をしようか？」

「——え？」

彼に問われて、私も少し悩んだ。

実は、この訓練の具体的な方針が決まっていない。

「昨日からずっと、何をしたら良いか考えてたんだけど……」
「……」

彼も見つめた所、近接職だ。

それなら、私にも教えられることはあると思う。

「キミの武器はナイフなんだよね？蹴りや体術は使うの？」

「い、いえ……」

「……ナイフを貸して」

私は受け取ったナイフを手に取り、色んな構えを取ってみた。
だが、どれもしつくりと来ない。

「……………うっ、……………う。……………うっ」
「……………」

実際、私は獲物である剣以外は扱ったことが無い。
鍛えた剣技、魔法、そして体術が私の全てだった。

「……………あ、あの。一度整理したほうが」

「——、！」

「良いんじゃないかぐうふ!!」

構えた所に、彼が手を伸ばして近づいてきたので、反射的に顔を
蹴ってしまった。

回し蹴りが思い切り決まってい、スピンしながら吹き飛ぶ。

私は彼の所に駆け寄り、すぐに謝った。

「……………ごめん」

「そ、そんな……………アイズさんは悪くなくて、ゲホッ」

「……………」

彼は大の字になりながら、苦笑いしている。

……………これでは駄目だ。

しつかり、彼のためになる事をしよう。

そのためには、一番手慣れた手段が良い。

「——やっぱり闘おう」

「え……………！」

私は腰に挿した剣を抜き、鞘を外す。
抜き身の剣を壁に立てかけ、残った鞘を彼に向けた。

「――、」

「！」

「……うん、それで良いよ」

攻撃の意思を感じたのか、彼は咄嗟に構えた。
戦いのカンはあるようだった。

暫く打ち合い、彼の力量を測る。

その愚直なまでに真っ直ぐな打ち筋に、未熟な点は確かに多かった。

「……技とか駆け引きとか、キミにはそれが少し足りない。……立てる？」

「お、お願いします！」

すぐに立ち上がり、強い意思が瞳に宿る。

――この真っ直ぐな所が、秘訣でもあるのかもしれない。

「――、！」

彼の動きが良くなってきた所で、わざとスキを作る。

素直な少年はそこに飛びつき、反撃のチャンスを私に与える。
教訓も込めて、彼の頭に鞘を振り下ろした。

「……」

思った以上に強い一撃が入ってしまい、彼はそのまま崩れ落ちてしまった。
まった。

さつき蹴り倒してしまった時といい、私は加減が下手らしい。

——また、やってしまった……。

気絶した彼は、そのまま起き上がれない。

……彼との特訓は、とても手強いという事がわかった。